
Not Only But Also

加減乗除

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

N o t O n l y B u t A l s o

【Nコード】

N 8 5 6 4 U

【作者名】

加減乗除

【あらすじ】

ここはアルモンド大陸……。平気で竜や魔物が闊歩する世界。そんな世界でそれらを退治するためにある聖エンテルミナ学院。そこで出会ったり他のところでも出会ったりした色々な仲間達と共に、巨悪に立ち向かう！！……………のか？ 多分立ち向かいます。立ち向かいたい！！（ちよくちよく改定が入ると思いますが、ご了承ください。毎日更新します！！）

1話 この世界、説明せずにはいられない。(前書き)

どうも、加減乗除です。

こんな形では初投稿ですが、最後まで頑張りたいと思いますっ!!

評価、感想はいつでも待っていますので、どしどし送ってください
!!

—加—

1話 この世界、説明せずにはいられない。

「まったく、私のことぐらい身を挺して守りなさいよね」

「しょーがないだろうが。あんな攻撃、死んじまうぞ!？」

「まったく、くだらない力ばかり身に付けて」

「いいだろ訓練成功して終わったんだから!! それくらい見逃せよ、お前頭良いだろうが!!」

「女も守れない男に言われたくないセリフね。がっかりだわ」

「そんなセリフを吐くお前に俺はビックリだよ!!」

言い争いをしながら二人はある大きなホールから出てきた。

「畜生、あの女、学年2位は伊達じゃないか……」

「ありえず……」

二人が出てきたホールの奥では白い煙を立てながら男女が倒れていた。

ここは、アルモンド大陸。

未だに竜や魔物が平気な顔をして闊歩している世界だ。

アルモンド大陸の中心に位置している都市ササガケの聖エンテルミナ学院。

この学院は、将来に役立つ者達を育てる、の名目で立てられた学院である。

周期的に襲い掛かってくる竜種、略奪を繰り返す魔物を退治する

ため。

または、人に害をなす行為を行った悪人を捕まえるため。

そんな人間を育てるために立てられた学院である。

ここには、色々な学科がある。

学科1、戦士。

前衛で攻撃、また味方に降り注ぐ攻撃を装備で守る者。速さに特化した物や攻撃に特化したものなど様々な種類がいる。

学科2、魔術師。

攻撃魔法系を主に操り多種多様な攻撃、防御と色々と戦術を変えながら動く者。火や氷など状況に合わせられるが発動に時間が掛かることがある。

学科3、救護師。

回復魔法系を主に操り、味方の治癒を行う者。攻撃は得意ではないが、稀に状態異常回復と治癒両方を行えるものがある。

学科4、呪い師。

状態異常系の魔法を主に操り、また状態異常の回復にも特化している者。救護師と同様、稀に治癒と状態異常両方を行える者もいる。

学科5、狙撃師。

弓や銃を使い、遠距離から攻撃を行う者。弓は飛距離こそ銃に劣るが音が小さく敵に場所を発見されずらく、銃は飛距離は高いが音が大きく火花も出るので敵に発見されやすい。

学科6、隠密師。

速度を重視し、敵に近づき一撃必殺の攻撃を放つ者。情報少なめ。

学科7、その他。

この学科に当てはまらない戦法を取る者、またこれとは違う別次元の力を使う者、上に割り振れない者がここに入る。

学科はこれだけある。

では、先ほどの説明を。

これは昔から続いている、『訓練試合』である。これを行っているのだ。

出たいものが二人ずつでパーティを組み、擬似的に戦う。

もちろん終了は相手がギブアップするか、危険と思われた時点で教師陣が出てきて仲裁するかのどちらかだ。

ちなみに、さっきの試合は俺達が勝った！

最近竜の出没や魔物の襲来が何故か活発化してきているため、殺気立っている輩も多くなっている。

また、この学園の食堂の奥に張られている掲示板、または学園のあちこちに置かれている遠隔通信魔法機器（通称RCM）で『依頼』というものを受けることが出来る。

依頼とは、一般の人々からよせられた嘆願書である。

あつちで竜が出たから倒してくれ、こそ泥を捕まえてくれなど難

易度はピンからキリまでだ。

これは、その依頼の条件さえ揃っていれば誰でも行くことができる。

報酬は学校に取られるが、ある程度、2，3割程度であればもらうことも可能である。

さて、この学園の説明はこれくらいにしておこう。

自己紹介でも始めるか。

2話 ただこの世界、思うようには回らない。(前書き)

どうも、加減乗除です。

二話目の投稿になります。

―減―

2話 ただこの世界、思うようには回らない。

ただ俺は、自分のことをつらつらと語るのはあまり得意な方じゃない。

そこで、とりあえず今俺の隣でドリンクを飲んでいる（救護科の連中が調査した何とかポーションと言う奴らしい。胡散臭いから俺は飲まないが。）こいつについて話そうと思う。

彼女の名前はアルメリア。名字とミドルネームは……覚え切れていない。

……いや、言い訳するつもりはないけど本当に長いのだ。小さい頃から覚えては筆記テストの勉強をして忘れ、覚えては忘れ、を繰り返している。

「何よ、人の顔ばかり見て。変態趣味にでも目覚めたのかしら？」

「ねえよ。それよりメリア、また（大）変な依頼を俺の知らない間に受けてないだろうな。また竜種の卵を探しに行ったりみたいなのを受けるのだけはやめてくれよ」

「わかってるわよ。後、わたしは明日訓練試合に出るのは無理だから。街に出る用事があるの」

「へいへい分かりましたよ」

ちなみにこいつ、学年次席の優等生である。所属学科は魔術師。

五段階評価でぶっちぎりの五だ。

……俺？ 対して俺は一応戦士科に所属してはいるが、評価は二である。さあ、鼻で笑え。

単位は……まあ、心お優しい幼馴染に同行することでどうにか足りている感じだ。

……そう、俺とアルメリアは俗に言う幼馴染なのだ。うん、正直

辛いね、優秀な奴が幼馴染って。格差を時折感じるよ。
友人にもよく言われるが、本当にメリアには頭が上がらないのだ。
回るのは減らず口くらいなものである。

ホールからしばらく歩くと、でかい建物が二つ見えてきた。
西側が女子寮で、東側が男子寮である。

分かれ道で、

「明日、楽しんでこいよ」

「……分かってるわよ。私の心配より、明後日の魔術における四元素と発動基本原理に関する全学科共通筆記テストの結果、楽しみにしてるから」

「うっ……」

「あれだけ教えたのに、まさか再テストには、ならないでしょうねえ？」

「あ、ははは……。それじゃっ！」

敵前逃亡。いや、戦略的撤退か。とにかく、俺はそれ以上の追及を避けるため、男子寮の入口へと駆けて行った。

———聖エンテルミナ学院、男子寮1102号室。

何と言うのか、この学院、生徒の多さだけは随一なのだ。
この寮の全ての部屋も二人部屋なのである。

「ただいま」

「おう、お帰り、オギ」

そう言って、俺のルームメイトであるアレンが答える。

また俺とは違う人の話になるが、アレンは全学科で最も人数の少

なく、最も情報の少ない、隠密師のうちの一人なのだ。

そして、今彼が言ったのが俺の名前の頭をとったニックネーム、オギである。

3話 この世界、動き回るしか脳がない。(前書き)

どうも、加減乗除です。

三話目なんですが、僕こういう物語作るの初めてで……

緊張気味で御座います……(嘘)

ー乗ー

3話 この世界、動き回るしか脳がない。

「アレン、その呼び方は止めろって何度も言ってるだろ？」俺はこのあだ名が嫌いだ。だが、彼はいつまで経っても止めてくれない。前から言っているのに…。

「いいじゃんかよ。オギ。オギ、オギ、オギ」
「だあッ、うるせえっ!!」

おちよくるなこのヤロウと俺は丁度足元にあった沢山教科書が入ったエナメルバッグをアレンに投げつけた。

しかしその直後、ヤバイやり過ぎたと後悔する俺。不運にもバッグはアレンの顔面ド真ん中へ向かってしまったのだ。直撃したら確実に怪我してしまう————。

この一瞬間にも詭弁を考えている俺。ああ、丸つきり落ちこぼれのする事だな……。

その時アレンはうなだれた俺を片目に動き出した。

飛んで来るバッグを越える速さで大きくサイドステップ。空気を躰で裂くように、横に飛んだ。

すると、バッグはそのまま何にも妨げられることなく放物線を描き、鈍重な音を響かせて床に落ちた。

俺はその音を聞いて心底安堵した。
良かった。コイツが隠密師で。

3話 この世界、動き回るしか脳がない。(後書き)

ああ、やっぱ下手っぴですね。

精進します…。

ー乗ー

4話 結果、この世界の整理は続く。(前書き)

どうも、加減乗除です。

四話目。

そろそろ説明も終わらせたい。

加えて減らして乗りで除いていきます。

― 除 ―

4話 結果、この世界の整理は続く。

コンコン、と。

部屋の扉をノックする音が聴こえた。

「お客さんだよ」

アレンはそう言って扉を指を差す。

俺は黙って、扉のほうへと向かう。エナメルバックの中身が散乱され、放置された状態になっているがまあ気にしない方向で居よう。そもそも、片付けは苦手だ。

「はい」

扉を開けた。

喪服のような全身黒いドレス。長い髪の毛も黒で、数珠の玉を髑髏に替えたようなネックレスをした女が居た。

「・・・・・・アレン・・・・・・居る？」

蚊の鳴くような――とまではいらないが、小さな声で女は言う。

「ああ、アレンなら中に――」

部屋の中を指差しながら振り向く。

「アレ？」

・・・・・・居ない。

「おかしいな・・・・・・」

「居ないの・・・・・・？」

「あ、ああ・・・・・・」

「そう」

女はあっさりとそう言う

「呪う・・・・・・」

と一言だけ続けて去って行った。

「な・・・・・・何だったんだ？」

ていうか、呪うって『俺を』じゃないだろうな！？

いやそれよりも先にアレンはどこに・・・・・・？

シャイなのだろうか？

「あ……」

そうだよ。30秒前に感嘆してたじゃないか。アイツ隠密師じゃん……」

本当に物忘れが激しい。だからペーパーテストで点を落とすんだ。また、メリアにバカにされるな……。憂鬱だ。メランコリー状態だ。

閑話休題。

アレンは先ほどの数秒の間にココを去っていったのだろう。そもそもアイツが寮の部屋に居る事自体が珍しいのだ。俺の中では彼にあつたら1日、運がついているということにしている。いや、嘘だけど。

「それにしても……。」「
疲れた。」

先ほどの漆黒の女はオレガノ。呪うという言葉やあの髑髏のネツクレスからも想像できる通り、呪い師だ。

呪い師に関する情報としては、状態異常系の魔法、或いは状態異常を回復させる魔法もコレに値する。救護師は基本的に普通の回復しか出来ないが、呪い師は基本的に状態異常を回復させる事しかできない。『基本的に』というのは、例外もあるということだ。

さて、前述した内容をわざわざ何故口にしたのかということだが、アイツは分からない。それこそ、隠密師並みに。

呪い師自体はそこまで情報が少ないわけではないが、アイツは隠密師と同じくらい謎に包まれている。

「アレンを捜していたという事は……。必要道具の調達任務の協力ってところか？」

それも所謂1つの『依頼』だ。生徒間での依頼もあるということだ。

ちなみにアレンをこの校内から探し出せるのもオレガノくらいの

ものだ。どんな魔術を使っているのか……。

恐怖ですね。

さてと。

「逃げ出したものの、そういうわけにはいかないよな……」

誰に言うでもなく——強いて言えば俺に向かってそう言って、机に向かう。

当然、テスト勉強というわけだ。

「普段使っていない分の脳をフル活用といこうか！」

自らそう言って気合を入れて、俺は。

俺は。

俺はまず、エナメルバックから散乱された教科書とノートの整理を始めた。

はぁ……。

5話 テスト終了、そしてこの世界は物語を欲す。(前書き)

どうも、加減乗除です。

明日が第三日曜日とすっかり忘れていて急いで散髪に行っていました。

五話目、話を加えて行きましょう。

—加—

5話 テスト終了、そしてこの世界は物語を欲す。

前の訓練試合が終わって三日後。

俺は部屋に戻って夕暮れを窓から眺めていた。

「ふう……」

俺にはもうこんなもん必要ない。

「安らかに自然に帰るといい。お前も元は自然から出来たものだ」

「何悟りきった笑顔でテスト用紙を捨てようとしてんだよ」

気がつくと後ろにアレンが立っていた。

「気配消して後ろに立つの本当やめてくれ、アレン」

「悪い悪い。いつもの癖だ」

本当にこいつが隠密師だと実感させられる。

「んで、何点だったんだよ————、プッ」

「今笑ったよな！？　っていうか人のテスト勝手に見るな！！」

「いやでもこの点数は……、プッ」

「手前も隠密師なら感情ぐらい殺せやああ！！！！」

そうして今まさに男のプライドを賭けた戦いが行われようとしていた時だった。

コンコンと扉をノックする音が。

「オギー、テストどうだったの？」

「お前も笑いに來たのかああ！！」

「……、よほど悪かったのね……。色々と崩壊してるわよ」
部屋に入ってきたのは成績優秀な幼馴染、メリアだ。
両手に紙袋を抱えていた。

「ま、追試で何とか頑張れってことだな」

「どう頑張ればこんな点数とれるのよ」

「お前ら成績が良いからってぼろくそに言いやがって……！」
実はアレンもそれなりに成績は良い方だ。
ただ隠密師という学科上なのか、わざと点数を落としているらしい。

こんなことで目立ちたくない、ということだろうか。

「とにかくだ。メリアは何の用があって俺の部屋まで来たんだよ」

「そうそう、これを渡そうと思って」

メリアはそういうと紙袋をごそごとあさりだした。

「はい、探してた本。たまたま売ってたから買ってきたわよ」

「お、ありがとよ！ これこれ、探してたんだよな。“ゴルディアンの家計簿？”」

「まーた訳の分からない本を……」

「うっせ、お前も？から読んでみ」

本当に面白いんだから。

キャラクターとか話の作り方とか。

「おやおや、あんた達また騒いでんのかい？」

その時、今度はノックなどなくいきなりドアが開けられた。

「あ、寮長先生。こんにちわ」
「どうも」

目の前に現れたのは寮長ことミモザさん。学園七不思議のひとつ、

最強の番人なんて名で乗っているほどの女性なのだが、その穏やかな喋りからはとても想像できない。

というか七不思議自体が眉唾物なんだが。

そして気がつくとアレンが消えていた。

寮長くらい気を許してもいいんじゃないだろうか。

「どうして寮長がここに？」

「そうそう。オギ君。ちょっとお願い事があってねえ」

「寮長の依頼、ですか……？」

なかなか珍しい。

「ちょっと救護科から欲しい材料があるそうさね。それを取って来て欲しいんだと」

「何でそれを俺に頼むんですか」

「ことによっちゃあ、追試を免除してやっても良い」

「ありがたくお受けします」

採集くらいで追試が免除されるなら、ラッキーだ。

下手すりゃ鬼の補習まで行きかねないからな……。

「ところで、何を取ってくればいいんですか？」

「まゆたけ繭茸っていうキノコさ。聞いたことあるかい？ センロップンっ

ていう谷にあるんだよ。どうやら救護科で使うもんらしいんだが、在庫が切れちまって、緊急に必要ということさね。大丈夫、あの辺は特に危険な奴等もおらん、楽な任務のはず」

「そうですか。私も言って良いですか？」

「学年次席のメリアちゃんが着いて行ってくれるんなら百人力さね。じゃあ、二人で行って行き。依頼扱いで休みにしておいてあげる

から。詳しい情報とかは今日中に支給するから、明日の朝にでも出
発すればいいさ」

という訳で俺とメリアは、訳のわからないまゆたけ繭茸なるキノコを探し
に行くことになった。

「しかしまあ、キノコ採集なんてもんで追試を免除してくれるもん
か。ちよつとばかり、きな臭そうな気がせんでもない」

アレンは寮長が部屋から出て行った後、一人呟いた。

5話 テスト終了、そしてこの世界は物語を欲す。(後書き)

新章突入、です!!

6話 だがこの世界、良い物には棘がつきものだ。(前書き)

加減乗除です。

6話目になります。

―減―

6話 だがこの世界、良い物には棘がつきものだ。

——翌日、俺とメリアは寮長に頼まれた蕨を探しにセンロッポ
ン谷を訪れていた。

ちなみに今は休憩中、昼飯タイムなのだ。

「なかなか見つからないわね……」

メリアが地形魔法で谷の疑似映像を目の前に出す。

「このあたりだと思っただけだな……」

俺はサンドを食べながらそれを眺める。

……しかし、メリアと依頼に行くと大抵ろくなことになるんだ
よなあ。

この学院に入学して数カ月。ルームメイトになったアレンは良い
奴だし（ほとんど部屋に居る所は見えていないが）、戦士科の連中も
なかなか良い連中だ。

だが、この幼馴染との腐れ縁はどうあっても切れないのだ。
前の依頼も大変だった。実にひどかった。

二週間ほど前のことである。

俺は、なんだかんだでメリアと二人組ダブルを組んでいるのだ。それま
での経緯は今は問題じゃない。

それまでは、俺が程良く単位の稼げそうな依頼を受けていたのだ
が、その日はメリアが依頼を受けてきたのだ。

内容は、『セノン山にある小竜の巣に行き、小竜の卵の個数を確

認すること』。

一見楽そうな依頼だが、一步間違えば親の成体の竜と戦わなければならなくなるのだ。この大陸では竜族が生態系の頂点に立っている。

その竜と闘うことすなわち、自殺行為以外の何物でもないのである。

単位も足りなかったことだし、しぶしぶ了承したのだが、それがまずかった。

何のことはない。セノン山の頂上付近で、遠目に小竜の巣を確認しようとメリアが視覚強化の魔法を使ったのだ。

そしてその魔力を、上空を飛んでいた親の竜に察知された。

竜の持つ魔力は人間の持つその比じゃない。それが何十、何百年と生きた成体の竜ならなおさらだ。

……戦うとか戦わないとか、そういう問題じゃなかった。これで竜が人語すらをも理解する賢豪な生き物じゃなかったら俺の人生はあそこで終わっていただろう。

結局、土下座までして許してもらい、精神的にボロボロになって俺達は学院に帰って来たのだ。

本来、依頼は人数制限が掛けられたり、あまりにも多くない限りは何人で受けても構わないのだ。勿論、独りで受けても問題は無い。だが、「訓練試合」にはある程度実力がないと一人では参加できないことや、寮が二人部屋（ちなみに男子寮と女子寮の行き来は夕方になると出来なくなる）であること、学院が他分野の人間との連

携を推奨していることなどから、意識しなくても大抵の生徒は二人かそれ以上の人数で活動するのだ。

俺とメリアもその内の一組、というわけである。

回想終了。メリアは相変わらず地形魔法とにらめっこをしていた。

「……谷の岩壁に生えてるのかしら。オギ、ちよっと登ってみて」

「何で俺が登るんだよ」

メリアがはあ、とため息をする。

「……私の属性じゃ飛行滞空は出来ないの。ほんと忘れっぽいわね。
相棒の戦術くらい把握しときなさいよ」

「……すまん」

そうだったそうだった。メリアの基本属性は炎と水。異なる属性を組み合わせて色々なことが出来る複合魔法を使っても空中飛行は出来ないのだった。

手ごろなところへ手を伸ばし、岩壁を登る。

しばらくすると、少し広い岩棚に出た。

周りを見回すと………あった。岩棚の奥、おそらく一日中陽の当たらないであろう位置に、蛾の繭の様に白く糸を巻いたような茸が生えている。

「おーいメリア、あったぞ！」

下で待機しているメリアに声をかける。

「根元からもぎ取って！　あるだけ持って帰るわよ！」

「了解！」

とりあえずそこに生えていた物を全て手に入れる。
その時だった。

「……うおっ」

いきなり背後から強烈な突風が吹きつけ、思わず体制を崩してしまふ。

もう一度、大きな突風。

今度は身体を支えきれなかった。風圧に耐えきれず、体が岩棚を離れ、空中へ投げ出される。

「うわあああああああ！！」

ああ、まずい、これは死ぬかもしれないぞ。

そう思って下で待機しているであろう幼馴染の方を見下ろす。

「呪文詠唱。水よ、滝渦の姿をとり障壁となれ！」

そうメリアが叫ぶのが聞こえた次の瞬間、体が水の渦に包まれた。

7話 この世界、不条理が過ぎる事はない。(前書き)

どうも、加減乗除です。

7話目です。

―乗―

7話 この世界、不条理が過ぎる事はない。

直後、落下で地面へ叩き付けられる俺。

思いつ切り腰を強打した。

ー痛っててて…

まあ、それでも痛みはマシな方だ。メリアの張った水流が上手く緩衝材となってくれたようだ。

「サンキュー、メリ…」

「うるさいッ！！目の前の敵に集中して！！」

…俺の扱い酷くないか？

服に付いた砂利を適当に払い除けながら立つ。

そして、空を仰ぐ。

すると、溪谷の澄んだ青空に、大きな鷲のような連中が弧を描いて周回していた。

猛禽の頭蓋、獅子の胴、白銀の翼。

この合成獣の様な体躯を持つ異形の名はグリフォス。

この谷をテリトリーに、集団で狩りを行う飛行獣系の魔物の一種である。

8話 この世界の構成要素は、理不尽。(前書き)

加減乗除です。

8話目。

本当に、理不尽な世界ですよね。

―除―

8話 この世界の構成要素は、理不尽。

「まあ……アレだ」

俺はそう言って立ち上がり、メリアを見た。

「どんな楽そうな依頼も、お前と行くところくな事にはならない」

「それは偏見よ。大体、この依頼を受けたのは貴方でしょう」

「お前が関わってるってだけで、十分な理由になりそうだ」

「後で話し合いね」

「今は目の前の敵を、か……」

俺は自分の武器を。

自分の武器を……。

あれ？

「どこ行っただ!?」

「はぁ!?」

メリアはそう言って、俺を睨む。

「全く……役に立たない」

言って、

「呪文詠唱」

メリアは呪文詠唱を始めた。

「火よ、重なり合い炎となれ」

詠唱により、手の上に炎が出来る。

「詠唱魔法。炎よ、地を離れ鳥となり飛翔せよ!」

そう言ってメリアは炎を投げるようにして、一体のグリフォスに向かって投げた。

詠唱した通り、まるで鳥のような速さでグリフォスの体を突き抜けた。

「G i a a a a a a a a ! !」

と、猛獣ならではの叫び声をだし、グリフォスは燃えながら、谷の段差に遊ばれつつ谷底へと消えていく。

「ヨッ！流石、アルメリア様！」

「うるさい！気が散る！大体、アンタが武器を持ってたら、私との連携でこの群れぐらい一瞬でしょうが！」

「いやー、何処にいったのか分かって——メリア！」

俺の叫びを聞いて、メリアは俺の方から視線を外し、正面を向いた。

グリフォスが眼前に迫っていた。

「しまった！」

メリアはそう言って、詠唱を始めようとするがグリフォスは雄叫びを上げながら、脚を振り上げた。

爪が鋭く光った。

「く……く……」

メリアが防御の態勢を取る。グリフォスは爪で引っ掻こうとしてくる。

ブォン！！

という風を切る音を立てて、爪は空を切る。

「大丈夫か！」

メリアを腕に抱いた状態で、聞いた。

「ありがとう！」

「体張って守んなきゃならないんでな」

俺の言葉を聞いたが早いか、メリアは立ち上がって、走りこみグリフォスの頭部に手を当てた。

「炎！」

手から業火を出し、グリフォスを丸焼きにする。

今のは、略式詠唱。

単純に炎を出すだけだが、技術の腕の高いものでなければ出来ない高等技術で、呪文の威力が高くなればなるほど略式は難しくなる。

「ナイス、メリア」

俺はそう言って、群れを見やる。

「……しかし、この量はちょっときついな……」

「呪文詠唱。火よ、重なり合い炎となれ」

俺の話を聞いていたのか、いないのか、炎を出す。

「詠唱魔法。炎よ、地を離れ鳥となり飛翔せよ！」

そして、炎を構えた。

「G i o o o o o o o !」

「G i a a a a a a ! !」

「G i i i i i i i ! ! !」

まるで共鳴のようにグリフォス達が雄叫びを上げる。

何か、まずい……。

「くらえ！」

「メリア！やめろ！」

叫んだが遅かった。手から炎は離れ、鳥のように宙を舞う。

「「G i i i i i o o o o o o a a a a a a ! !」」

それとほぼ同時にグリフォス達がもう一度鳴き、羽でバサバサと扇ぎはじめた。

一体一体の風圧がそこまで強くないと仮定しよう。現に、空中で羽ばたいている程度の風圧では炎は止まらないし、一体の羽ばたきでは意味をなさない。

しかし、群れが一斉に羽ばたけば――。

「!？」

飛んでいった炎は、向きを変えて、こちらに向かって飛んできた。

「メリア！」

俺は叫んで、メリアの体を引っ張った。

炎は先ほどまでメリアが居た地点に落下した。

強風は未だに吹いている。

「これじゃ、拡散攻撃も防がれてしまうわね……」

「くっそ……」

どうすればいい？

俺は空中の相手と戦うのは何でもないが、空中戦は得意ではない。
どころか、武器すら持っていないのだ。

メリアも同様で、空を飛べないために空中戦は得意ではないのだ。
「アレンとオレガノの方が、これは得意そうだな」

俺が呟いたのを最後に、グリフォスの内の一体が突っ込んできた。
他の数体は相変わらず、羽ばたきによって強風を作り上げている。
炎を出せば、こちらにもダメージが来る。盾も持っていないため、
グリフォスの攻撃を防げない。強風に煽られ、避けることも難しい。

万事休す！俺達にはもう打つ手が残っていない！

心でそう思った途端。

ズガン！

という発砲音がして、グリフォスの体を何かが貫いた。

9話 この世界、非常識は数多い。(前書き)

どうも、加減乗除です。

非常識な人は世の中に多い。

もちろん、常識を知らないという意味でも。常識的に考えてありえないという意味でも。

—加—

9話 この世界、非常識は数多い。

「な、何だ!？」

発砲音と共に、一匹のグリフォスがよろめいたようになる。

「見て、あの耳のところ!! 何かに撃ち抜かれてる!!」

メリアが指を指したほうのグリフォスを見ると、確かに耳から血が出ている。

そして、ズガァン、ズガァンと二つ続けて発砲音が。

「Guooooo!!」

その音と共に、また二つのグリフォスがよろめく。

大きな発砲音に驚いて、グリフォスは逃げていった。

「一体、何が……」

状況が全く理解できなかった。

周りには誰もいないはずだ。

「チンタラ戦ってんじゃねーぞ、クソがきが! グリフォスの弱点と生
態ぐらい学んでから来い、カス!」

前言撤回。

少し遠くの小高い場所に、大型の長距離狙撃用ライフルを担いで
男が立っていた。ロングレンジ

「普通グリフォスつつつたら大きな音と羽が弱点って相場が決まっ

てんだよ!! 勉強しなおせ!!」

急に現れた男に説教され始めた。

だが状況からしてやっぱりこの男が俺達を助けてくれたんだろうか。

「2度と生半可な気持ちで依頼受けんなよ、ボケ!」

男は言って、小高い地点から、ライフルと数体のグリフォスを担いで去っていった。

「な……何なんだ、アイツ……」

俺の疑問に答えたのは、

「フォックス・F・ゼロシルバー」

隣のメリアさんだった。

「知ってるのか?」

「今は狙撃科の4年生。三年連続評価1で在籍中よ」

「はあ!？」

何だソイツは! 評価1で進級なんて出来るのか!?

「狙撃科は基本的に集団行動を主とする。しかし彼は風来坊にして風雲児。孤高の狙撃として有名な男よ。それでも進級できるのは、

彼が圧倒的に強いから……。まあ、全部聴いた話だけだね」
なるほど、なるほど。そんなある意味で凄い事は分かった。だが。

「……………それにしても、ムカつく!!」

俺の声は谷に響き渡った。

「帰ったぜ」

俺は寮長に繭茸を渡し、1、2言話をして（その間に寮長ヘグリフォスのことを伝えておいた）、残りをメリアに任せてから自室に入った。

「疲れたー……………」

俺は部屋の唯一のソファに座り込んだ。

「お疲れ。大丈夫だったか？」

そう言ってアレン（1日で2回も出会えるとは、珍しい）は、ソファの前の机にお茶の入ったカップを置いた。

「大丈夫じゃねーよ。グリフォスが一気に集団でやってきやがった」

「あ……………。あそこはグリフォスが多いからな。やっぱり、僕もついて行けばよかったな」

「お前は1人で依頼ばかりやっているだろ？ 隠密師は孤高を主とする——」

——孤高の狙撃と呼ばれているわ。

メリアの言葉がふと思い出され、急に現れて叫んだ、説教を思い出す。

「オギ？」

「……………アイツ……………何なんだよ!!」

急に現れて、急に上から目線で説教するって何て奴だ! 評価1のくせに……………!!

俺の怒りは、ふつふつとこみ上げてきた。

10話 それでもこの世界、狭いに越したことはない。(前書き)

加減乗除です。

十話目になります。

―減―

10話 それでもこの世界、狭いに越したことはない。

———数日後。

俺は朝食を早々に済ませ、食堂の奥で目に余るほどに依頼の嘆願紙が貼られている掲示板とにらめっこをしていた。

前回のことでよく身に染みただからである。……やはり、メリアと依頼に行くとならない、ということが、だ。

昨日の夜もどこからともなく部屋に帰ってきたアレンの、いまだ疲れきっていた俺に向けられていた、同情とも哀れみとも似つかないような視線。

誰のせいってわけでもない。……でもさ、こういう何処へもぶつけられない怒りが今一番ムカついてる相手に向けられるのは、仕方のないことだと思うんだよな。

……あんの狐野郎（フォックス・F・ゼロシルバー）！
よく考えたら名前かけえ！ それだけでイライラする！

……閑話休題。

とりあえず依頼だ、依頼。この溜まりに溜まったストレスを発散できる、魔物駆除か討伐の依頼がいいな。

そう思いながら掲示板を見続けること数分。

「これにするか……」

手に取ったのは水色の嘆願書。学院内からの依頼であることを示す色だ。

依頼内容は、『この学院のある都市、ササガキの西部にある森でのサラマンデルの掃討』。

サラマンデル。竜族の祖先とも言われるトカゲの一種だ。群れで巣を作り、低レベルではあるものの、火炎魔法を使う。

『詳しい内容、報酬などは依頼主と交渉すること』……。なるほどな。直接要請の依頼か。

さて、依頼主は——と。

『対魔物及び竜族対策委員会の副会長、カミルレ・チュベローズ』……あれか。あのめんどくさ委員会か。

実を言うと、メリアの受けてきた小竜の卵観測の依頼も、この委員会から出されたものだったのだ。

……この学院、ただ単に生徒が学ぶだけの組織ではないのである。街の周囲を徘徊する魔物の退治、犯罪者の拘束など、街のためになることもしているのだ。

……まあ、メリアもないし、今回は何もないだろう。と思いながら振り向くと、

「ねえ、オギ。何を選んでものかしら……？」
噂のメリアさんがいらっしゃった。

「よよよ、よう、メリア。何の用だ？」
限界だ。これが俺の精一杯だ。

「朝食を食べ終わって食器を返してたら、一心不乱に掲示板を見つめてる幼馴染の姿を発見したのよ。……ところで、その手に持っているの、もしかして依頼の嘆願書？」

「ああ……」

「ちょっと見せて。今度はどんな依頼なの？」
そう言うと、メリアはさっと俺の手から水色の嘆願書をかすめ取る。

「えーと、依頼内容、サラマンデルの掃討。依頼条件、シングル単独……。」

ああ、まずい。まずいぞ。

メリアはそのまま俺の方に視線を向ける。

……ジト目である。これでもかっていうほどの。

「……オギ。この依頼、受けるつもりなのかしら？」

「……ああ」

「どうして条件に“単独”なんて書いてあるのかしら？」

「……さあ」

「ねえ、オギ」

メリアがずい、と俺に顔を近づける。ジト目のまま。

「私たちは、ダブル二人組よね。パートナーよね？」

「……そうだな」

「じゃあどうして、私に黙って単独の依頼を受けようとしてるの？」

「それはだな……」

俺は言い淀む。

メリアは俺から視線を外す。

「やっぱり、私と依頼に行くと酷い目に合うから？」

「……それは違う」

半ば凶星だが、ここは虚勢を張るパターンだ。

「“約束”しただろう？ 今日のはたまたまいい討伐依頼があっただけだ。次は一緒に行くよ」

「でも……」

「忘れたのか？俺達は何だ？」

「……ダブル二人組」

メリアがしゅん、といった半ば怪訝さも混じった表情を見せる。

これはレアだ。

「いつも一緒ってわけにもいかないだろう？ 俺は行くよ」

「……ええ。そうね、わかったわ」

メリアは妥協するわ、とでも言いたげに目を逸らす。

……ふう、最大関門突破だ。さて、依頼主の副会長に会いに行かないとな。

委員会は、少数精鋭の生徒で構成される集団だ。いくつか委員会があるのだが……例によって、少ししか覚えていない。

確か、それぞれの委員会室は管理棟に集中していたはずだ。

しばらく歩き続け、俺は管理棟の門をくぐった。

――――――管理棟、6階。

対魔物及び竜対策委員会、と書かれたドアの前にさしかかったところだった。

「ん？」

「お？」

ドアの前には、今まさにノブに手をかけようとしていた、フォックス・F・ゼロシルバーが立っていた。

「この間のクソガキか。何だ？ またグリフォスにでも襲われに行くのか？」

前回と同じく、高圧的な態度。利己主義な性格がありありと見て取れる。

「あんたには関係ない。そこをどいてくれ、俺は副会長に用があるんだ」

そう言って水色の嘆願書をちらつかせると、ゼロは少し目を見開いた。

「……何だあ？ お前もこの依頼の希望者か。悪いが、その依頼は俺が先に受けるんだ。邪魔すんな、カスが」

「……は？」

「人の話はしっかり聞いとけや、ガキが。討伐系の依頼は競争率が高い事くらい常識だろうが、ボケ！」

ゼロはそう吐き捨てると、ドアを開けようとする。

「ちょっと待てよ」

俺はその手を抑える。さすがに今のはむかついた。いや、前からムカついていた。

「開けさせるよ、クソガキ」

「生憎同着なんでね。この依頼は俺が貰った」

「ふざけんなよ、頭ぶち抜かれてえのか！」

「うっせえんだよ、このキツネ野郎！」

「なっ……」

キツネ、というのが響いたらしい。ゼロが眉間にしわを寄せる。

「この常識知らずのガキが。よほどぶち抜かれたいらしいな」

「黙れ性悪キツネ」

ぶちん、という音が聞こえた気がした。

「こんの、クソガキがああ—————」

「……あの」

吠えながらゼロが俺に掴みかかろうとしたところで、目の前のド

アが開かれた。

「……部屋の前で怒鳴り散らすのは、止めてもらえませんか？」

中から顔を覗かせたのは、今俺とゼロが会いに行こうとしていた人物、対策委員会の副会長カミルレ・チュベローズその人だった。

11話 虚しさ溢れる、この世界。(前書き)

どうも加減乗除です。

11話目になります。

—乗—

11話 虚しさ溢れる、この世界。

透き通るような銀色をした長髪と瞳が気品を醸し出し、今時一般的でない片眼鏡を掛ける事で、それに一層の拍車を掛けている。

「あんまり五月蠅くしていますと法会議に連れて行きますよ?」

「「んじゃ、コイツを連れて行ってください」」

くそッ、こんなトンデモな奴とハモってしまった……。不覚……。隣をふと見てみると、ゼロが俺を凄じ剣幕で睨んでいた。

カミルレが冗談ですよ、と微笑む。しかし……。

「ですが、お二方。部屋の中では沢山の役員が一生懸命に働いているのですよ? 貴方はそれを承知で騒いでいたのですか? でしたらそれは非常識と言うものではないでしょうか。私は……………」

この胡散臭い説教はこの後15分程も続いた。隣のゼロはその話の途中で眠り始めた。立ったままでだ。初めて見たよ、立って寝る人。

12話 怒り戸惑う、この世界。(前書き)

加減乗除。

12話。

―除―

12話 怒り戸惑う、この世界。

「……………ということです。これらを知っていたいただいた上で、すなわち私達がやっていることを理解していただいた上で、私達と接していただき、あなた方共々、我々対策委員会と親交を深めていくって欲しいのです。お分かり頂けたでしょうか？」

ようやくそう言って話が終わった。

あ……………だるい。

「終わったか？じゃあ、さっさと話を始めさせてくれ」

ゼロは目を覚ますとそう言って部屋の扉を開けた。

「……………まあいいでしょう」

そう言ってカミルレ副会長（以下、副会長）は俺も中に入れてくれた。

中には委員会のメンバーたちが数人、忙しく働いていたが、副会長の入室を見て1度動きを止め、俺とゼロに一礼して、仕事を再開した。

俺達は奥のほうの応接室に案内された。

2人とも座ったのを確認してから副会長も座り、言った。

「……………まず、依頼内容の確認なんですけれど」

副会長はこちらを見た。

「単独……………と記載したはずなのですが？」

「「単独だ」」

またかぶった……………。

「……………つまり、あなた方は別方向から偶然同じタイミングで同じ依頼を受けにやってきたということですね？」

「そうなります」

ゼロはそう言ってソファにふんぞり返った。何を偉そうに仕切っている……………。

「……………どちらか片方にしていただけないでしょうか？」

「……………おい、ガキ」

「嫌に決まってんだろうが」

何を言い出すか予測はついていたので、先手を打った。

「お前が帰れ。くそ狐」

「つまり、お前を殺して俺が受ければいいんだな？クソガキがあ！
！」

ゼロは叫んで立ち上がった。

俺もソレに次いで立ち上がる。

「先に来たのは俺なんだよ……………割り込みは禁止だろうが！」

「お前はドアの前に立っていて、ドアノブをあげようとしたただけ、まだ依頼を受注しようとしては居なかっただろ！！」

「ヘリクツ言ってねえで、先輩に譲れバカが！」

「お前を先輩だと思ってくらいなら、ゴキブリに敬意を称するぜ！」

「あの一」

「何だ、コラァ！！」

思わず切れてしまった。

当然、その声の主は、副会長なわけなのだが。

「……………」

「面倒なので、あなた方2人で行ってください」

副会長らしからぬ言い分で、俺達を見放す。

「そちらの後輩さんは知りませんが、貴方……………つまりゼロ
さんのことなら存じ上げております」

「……………」

笑いやがった。俺を見下すように。

くっそ……………！！

「貴方ならサラマンデルくらい余裕で一掃出来るでしょう。足手ま
といが居ても何ら問題ないでしょうし」

足手まといのところで、俺を見る。

……………我慢だ。この委員会を相手に暴動を起こすのは問題

だし、第一俺も無事では済まない。

対魔物及び竜族対策委員会の副会長である以上、この女も強いはずだ。

「それにあなた方のような方たちなら、もっと大きな解決になるはずです」

「大きな解決……?」

何を言っているんだ?

「ちよつと待て、確かに俺は強いが……」

そこを前提にするな、クソ狐。

「コイツと一緒にいうのは認められん」

俺のセリフだ、アホ。

しかし、そんな彼を止めたのは、単純な挑発だった。

「出来ないんですか?」

「……上等だ、やってやるぜ!」

ゼロは切れたようにそう言うと、俺の首を引っ張った。

そしてそのまま部屋を出て行く。

「引きずるな、くそ……」

首が絞まっていまいち声も出せず、氣迫も出ない。

つか、コイツ力が強い……。

「行くぞ、後輩。やる以上は、お前も守りつつ一掃してやるよ。不本意だがな!!」

「お互いさまだ……!俺もお前に負けるような奴じゃないんだ……」

「ほお……なら!」

そして、今度は狙って言った。

「「勝負だ!!」」

13話 燃え盛るように怒りを覚えたこの世界。(前書き)

加減乗除の13話目にして。

遂にバトルが始まりました。

—加—

13話 燃え盛るように怒りを覚えたこの世界。

「お前がこの俺に勝てるわけねーだろこのボケが!!」

「狐は黙ることも知らないのか？」

「つてめ……!!」

と、罵詈雑言を繰り広げながらササガキ西部の森、タズナギに到着した。

ここは昔からよく神聖な森として有名だったはずだが、その状況は悲惨なものだった。

木が燃え盛っており、神聖とは程遠い様相を見せていたのだ。

「ま、森にサラマンデルっていったら仕方がないが、ちと暴れすぎな気もするな……」

「どうする？ 今からでもしつぽ巻いて逃げるか？」

俺の呟きにいちいちゼロは反応する。

「その言葉、そっくり返すぜ」

「やれるもんならな」

森に入ると、やはり燃えカスとなった木々がいくつも見られる。

そうして歩いていると、赤い光がちらほらと見え始めた。

「出たか……」

今のはサラマンデルの目の色だ。

ということ、ミッションスタートと言う事だ。

いつの間にかゼロがいなくなっている。

おそらく狙撃用の場所でも設定したのだろう。

「k i s h a a a ! !」

そんな鳴き声が聞こえたかと思うと、赤い光のうちの一匹――
――サラマンデルがこっちに飛び掛ってきた。

「言つとくけど、手前には一匹もやらねえからな!!」
聞こえているかいはいかは別だが。

「おりゃあ!!」

飛び掛ってきたサラマンデルは鋭い爪をこちらに見せて切り裂こうとしてきたが、それを横にいなし、そして一気に片手に持っていた長剣で斬る。

「G i h i i ! !」

そんな声を出して一匹のサラマンデルが地に沈む。

すると、いつの間にか周りに広がっていた赤い光がゆらゆらと動き始めた。

どうやら今の一匹は試金石のような役割だったらしい。どこかの
ことわざで言えば『最初のペンギン』、いや、『最初のサラマン
デル』か？

お前も可哀想にな。

「G i i i i i i i i i i ! !」

どうしたものかと考えている間に、甲高い、というよりは何かを引き裂いたような音が辺りに木霊した。

「G y o o o o o o o o ! !」

そんな叫び声を上げて、三匹が同時に右、左、正面から襲い掛かってきた。

「まずは、右!!」

一番早く飛んできた右のサラマンデルに剣を振るう。

「そして、左!!」

一体を切り伏せたすぐ後に、剣の持ち方を逆手にして右を向いた状態から後ろに刺す。

「最後の一匹!!」

後ろ（今では右に見える）サラマンデルには、逆手で持っていた剣を落とし、切り裂こうとしてくる鋭い爪よりも早く顔面に肘鉄を叩き込んだ。

『G y a a a h i i i i ! !』

怪物じみた声を上げてサラマンデルがどんどんと沈む。

『G y o o o o o o o o o o o o o o ! !』

すると、潜んでいるサラマンデルたちは三匹が飛び出してきたときより大きな声を出してきた。

そして、360度から襲い掛かってきた。

「休ませてくれぬか……! ?」

総勢七匹。

息つく暇などあたえられないが、それでも着実に一匹一匹倒していく。

が。

「ヤバッ……!!」

オギはそうやって飛び掛ってきているサラマンデルに夢中で、後ろの木から飛び掛って来る一匹に気がつかなかった。

鋭い爪が迫ってくるが、対処が出来ない。

万事休すか————、とオギが思ったとき奇跡が起こった。

「G u h i i ! !」

そんな間拔けな声を出して今にもオギに迫っていたサラマンデルが横に吹っ飛んだ。

「! ?」

オギも驚きを隠せない。

『G u i ?』

サラマンデルもそのようだ。

と、一瞬全員の動きが止まった瞬間に、今度はオギの周りで戦っていた三匹のサラマンデルが次々と吹っ飛んでいく。

「まさか……」

その中の一匹のサラマンデルをみて、あることに気がついた。

「狙撃か……!!？」

オギがそう気がついたときには、周りにいたサラマンデルがポンポンと飛んでいく。

「まったく、腕だけは本当にむかつくな」

見えないあの男に対して怒りを露わにしていると、その瞬間に銃弾が頬のすぐ横を通っていった。

「……!!？ あの野郎!!！」

それが嫌がらせだとすぐに気がつく、また一層むかついた。

14話 この世界、火を見るよりも明らかに。(前書き)

加減 14

乗除 話

です。

―減―

14話 この世界、火を見るよりも明らかに。

俺が斬ろうとしたサラマンデルがまた横へ吹っ飛ぶ。

……いい加減にしてくれよな、狐野郎。

さっきから俺が狙おうとした奴ばかり狙撃しやがって！

嫌がらせなのか！ だよな！

「くそッ！」

思い切ってサラマンデルが固まっている場所に突っ込んで、長剣を横へ振る。

数体のサラマンデルが胴体を斬り裂かれて地に伏せる。

大きく身体を反らし、その場に残っていたサラマンデルの脳天に刃を振り下ろした。

「G u i a a a a a a a ! ! !」

……それにしてもずいぶんと大きな群れだ。サラマンデルとは何回か戦ったことがあるのだが、前はそんなに大きな群れじゃなかった。

何かあるのだろうか？

まあ、偶然だろうけれど。

そう思った時、少し近くで、「ぬおあっ！」という声が聞こえた。

そのあとすぐに、上からゼロが降ってきた。

どさっ、と激しい音を立ててすぐ横の草むらに落ちる。

「……手前クソガキ、いいか？」

「あん？　なんだよ狐」

「今回は引き分けにしよう。俺の情けに感謝しやがれ」

「はあ！？　どう考えても俺の方が倒してただろうが！」

「んなもん途中からは数えてねえよ！」

「俺もだよ！！」

……結局、ゼロとの勝負は一度引き分け、という形に落ち着き、俺達は思い思いに帰り支度を始めたのだった。

15話 危機迫り来るこの世界。(前書き)

加減乗除です。

15話目です。

何か誰かが死んでゆく時、何かしらグロ描写を入れないと気が済まないのは私だけでしょうか？

―乗―

15話 危機迫り来るこの世界。

帰り仕度が済んだ。

任務自体はほんの小一時間で終わったが、互いに小競り合いをしていたので、双方かなり困憊している。

あー、体がだるい。

帰ってシャワー浴びようか。

「ケツ、帰んぞクソガキ」

「うっせ、狐。：お前と一緒にいると酷く疲れるんだよ」

「その言葉、そっくりそのまま返してやるよ」

……………一生冬眠しとけ。

俺の臓腑の底から、重い溜息が出た。

と同時に、溜息と重なり合うようにして聞こえた遠鳴り……………。

夜の森林の底の見えぬ闇の中、それは聞こえた……………。

夜の静寂をほのかに掻き消す重低音の響き。

突如、俺達の正面に張られた漆黒のスクリーンが真紅に染められた。

15話 危機迫り来るこの世界。 (後書き)

あー。もう文ホラゲ調。

―乗―

16話 いがみ合い、かみ合い始めるこの世界。(前書き)

加減乗除 16話 書いてみた。

→ニコ動風。

―除―

16話 いがみ合い、かみ合い始めるこの世界。

まあ。

俺の気持ちを一言で表すなら、

はあ！？

だ。

「はあ！？」

言った。

感想が口をついて出た。

目の前の真紅のスクリーンにはよく見ると影によって作られた紋様が見える。そしてそのスクリーンは少しずつ横にスライドされていく。

それは少しずつ、小さくなっていく。

「・・・・・・・・」

ああ。どっかで見たと思ったぜ。

途中から生えてきた足とその後続いた長い尻尾。それを見てから、俺とゼロを覆う影に気付く。ゼロは既にそれがある左側を見ていた。

森の高さよりも高い場所にそれはあった。

先ほどまで見飽きたサラマンデルの顔を、背景に映る黒と散らばる黄色たちが際立たせる。

しかし比べ物にならないくらいの大きさを誇っている。学校の教室2つ分ぐらいは突き抜けるだろう。

「……でかいサマンデルだ……！」

「ちげーよ、バカが。サラマンダーだっつーの。見てみる」

とゼロは顔を指差す。

「小さいのとは違って、目が黄色で、鱗がハッキリしてくる事によって、それが紋様のように見えているはずだ」

「ああ・・・・・確かに」

「ちゃんと勉強しろって言わなかったか？ そんなんじゃないつまで経っても、上にはいけないぜ？」

そう言ったときには、口は武器を構えていた。

「死なない程度に、教えておいてやる。コイツはこの森の中では最強レベルの部類だ。この森の生物は大体、コイツの捕食対象となる。特徴は『仲間思い』と『闘争心』だ」

その発言を聞いて瞬間に、副会長の発言が思い出された。

『それにあなた方のような方たちなら、もっと大きな解決になるはずです』

「つまりは、俺達が仲間を殺された復讐心と併せ持つ闘争心で、俺達の前に現れたのか」

「そうじゃなくて、お前のせいだっつーの、ガキが。お前が喧嘩をふっかけて来るから、その空気感に吸い寄せられてきたんだよ。そんな簡単なことを一々確認とるな。」

ゼロはそう言っ
て俺を睨む。

しかし口調の端々に、毒舌のキレが無い。

言うほど余裕でもないって訳か……。

後、加えておくなら、俺だけの所為みたいに言うな。

「Gyaaaaa
ooooooooooooo」

そんなことを離している間に、サラマンダーは雄叫びを上げて、

目を光らせる。

そして次の瞬間には、俺達の居る場所に向かって牙を向けてきた。

「来たぞ！」

「知っている」

ゼロは俺の発言にそう言って、銃をサラマンダーに向けた。

「悪いが、今回はお前を守るような余裕は無いぞ」

先ほどの調子と違い、冷静な表情と言動を見せる。

「守られた覚えは無いけどな」

「ならいいが」

ゼロは引き金を引いた。

銃口からは先ほどとは比べ物にならないほどの火花が散る。

銃弾は牙ではなく、サラマンダーの迫って来るスピードにあわせるように、虚空を撃つ。

撃った銃弾は上手いタイミングでサラマンダーの額に当たり、炸裂する。強制的に頭を地面に向かって叩きつけさせる。

「すげ……」

「油断するな、クソガキ！」

ゼロが叫んでその場から離れる。

「え——」

気付いた時にはそれは、俺の体を捉えた。

目にも留まらぬ速さで、サラマンダーの尻尾が俺の体を吹き飛ばす。

「ぐぁ！」

運がいいのか悪いのか、俺の体は木に叩きつけられた。

「畜生……」

俺は体制を整えなおし、刃を構える。

くっそ……。結局面倒な事になるなら、メリアと一緒に居たほうが良かったか？

コイツと連携なんて無理に決まっている。

大体、対応策も見つかっていない以上、俺に何が——。

「クソガキ!!」

ゼロが俺を呼んで、俺の横に降り立った。

「何だ、狐野郎!」

「2秒………手エ貸せ!!」

そう言って、こちらを見ているサラマンダーの光る瞳を見る。

「………はあ?」

「いいから、貸せっつつてんだ!俺の言うとおりにやれば、勝てる!そんなぐらいできるだろ、勉強不足!」

「………上等だ。やってやるぞ、落ちこぼれ狐!」

意味の分からない、心の通わせ方だった。

17話 いがみ合ったこの世界、廻り廻って認め合う。(前書き)

加減乗除の力口。

17話目、そろそろまとまります。
—加—

17話 いがみ合ったこの世界、廻り廻って認め合う。

「2秒、つったってなあ!!」

「そんなことも出来ないのか？」

「……、やってやんよ!!」

とにかく俺はゼロからはなれてサラマンダーをひきつけることに。

サラマンダーを見てみると、口が赤く光り始めている。

「火い噴くから気をつけろよ!!」

「見りゃ分かる!!」

そう答えた瞬間、サラマンダーが火を噴いた。

それはまるで爆発のような勢いでオギに迫る。

「つて、熱つつ!!」

それを間一髪で避ける。

「お前は2秒もアイツの動きを止められないのか!？」

「うっせー、黙ってる!!」

ゼロはああ言うけど、実際かなりきつい。

近づけば太く鋭い爪で上半身と下半身が泣き別れになってしまうだろうし、離れたら離れたであの息吹が待っている。^{ブレス}

「畜生!!」

進むも戻るも地獄なら、進んでやるさ!!

オギはそう決意すると、一気にサラマンダーに向かって走り出し

た。

サラマンダーは迫るオギ目掛けて火球を連発するが、それを見事にオギは避ける。

そのままサラマンダーの足元まで迫ったその時、丸太のような太い腕がこちらに向けて振り下ろされた。

「まず！」

それを横に飛んで避けると、今度は横に薙いできた。

「げっ！！」

さつき避けたばかりで態勢すら整っておらず、そのまま腕と爪が迫ってきたその時。

バンという炸裂音がして、迫ってきていた腕が弾き飛んだ。

「お前を守れねえつつたろこのドアホが！！」

その声はオギからして左側のほうから聞こえてきた。

「んなっ……、手前のために――」

「だが、時間をここまで稼げたことは褒めてやる」

よく見ると、ゼロの周りには大きな銃がいくつか置かれてある。

[illegible]

先ほど腕を撃ち抜かれたサラマンダーがゼロのほうを向く。

「消し飛べ、このトカゲ野郎」

まず足元に置いてある一丁を取り上げると一瞬で構え、そして発射した。

すると、ゼロのほうを向いていたサラマンダーの目から血が噴き出した。

「G y i i i i i i i i ! !」

サラマンダーが首を左右に振って暴れだす。

「今のはただの弾。口径が大きいだけのな。だが、次からの弾は違うぜ」

もがき苦しんでいるサラマンダーに、またゼロは別の銃を構える。

「再装填^{リロード}ってのは意外に時間を食うんでな。こうやって置いといたほうがいいんだよ」

そして、景気よく銃をぶっ放す。

バガンと、先程よりも大きな音で撃ち出されると共に、ゼロの身体もズンと後ろに動く。

その音の直後、何の前触れも無くサラマンダーが。

サラマンダーの巨体が。

く．の．字．に．折．れ．曲．が．っ．た．。

「なあ! ?」

一体どんな威力の弾を撃てばあんな風になるのだろうか。

先ほど後ろに吹っ飛んだゼロはバク転の要領で見事に着地すると、

足元に置いていた最後の、一番長いものを持ってサラマンダーに向かって走り出した。

くの字に折れ曲がった後サラマンダーは多少ビクッ、ビクッと動くが目新しい行動は取っていない。

そのサラマンダーの口の中でゼロは銃を構えた。

「大抵の魔物ってのは外は堅くても中は柔らかいってのが多いんだ。常識だ、覚えとけ」

そのままバギンと今日最大の音を立ててゼロが銃を撃ち出した。

その銃弾はサラマンダーを一直線に貫いた。

サラマンダーは一度ひときわ大きくビクビクッとしたが、その後は沈黙した。

銃弾の反動でゼロは先程よりもより衝撃が来た様だったが、吹き飛ばされるようなことは無いようだった。

「い、今のは……」

「魔弾だ。お前、そんなことも知らないのか？ まあ、普通的大型ライフルで撃つ奴は俺くらいだな」

魔弾。

銃弾に魔力を込めて色々な力を付与したものだったか。

確かメリアが普通魔弾を撃つときは魔力付加した銃じゃないと使用者の身体が吹っ飛ぶとか言っていた気がするんだが……。

「とにかく、この大きさのサラマンダーは結構貴重だから、こいつ

持って帰るぞ」

ゼロのこの発言により、俺はこの糞でかいサラマンダーをゼロと一緒に荷台にくくりつけたりしなければならなくなった。

「まったく、あん時はお前がちんたらやってるせいで遅れちゃっただろうが」

「ああ！？ 俺は手前の時間稼ぎのために走り回ってやったんだぞ！！」

「ガキはぎゃあぎゃあ言うから嫌いなんだよ」

「お前みたいな狐に言われたか無いね」

「んだと手前！！」

「やんのかコラ！！」

「お静かになさい！！」

俺とゼロがまた喧嘩になりそうだったところを、ある女性が止める。

それは対魔物及び何とか委員会の副会長、カミルレの叫び声だった。

任務が終了したので、対魔物何とか委員会（もう忘れかけてる）の部屋で報告をしにきたのだが、またゼロとかぶってしまった。

「全くあなた達は任務を成功させてきたのに、やれ俺のほうが狩った数が多いだの、やれ俺がサラマンダーを片付けたなどと言って……いい加減にしなさい！！」

どうやらカミルレはかなり怒っているようだった。

「大体、あなた方にはチームワークというものが欠けているのであ

りましてね……」

最初にあったときよりも長い説教を受けた後、ようやく依頼の話に入れた。

「とにかく依頼の件についてはありがとうございました。サラマンダーの討伐までやってのけるとは、流石ゼロさんですね」

カミルレはどうやらサラマンダーをゼロだけで倒したと思っているらしい。

確かにサラマンダーをひきつけて逃げ回っていたただけだが、その言い方は癪に障った。しゃくさわ

「そう褒めるな、カミルレ。当然のことをしたただけだ」
ゼロは最初と同様ソファにふんぞり返って副会長を呼び捨てにしながら答える。

そしてこっちを物凄い笑顔で見てきた。

すごく殴りたい。

そう思っていると、少し真面目な顔になってゼロが急に副会長のほうを向いた。

「何でしょうか？」

思わず副会長も聞き返す。

「一応、これは、横のガキのために言う訳じゃないが、コイツも多少は良くやった」

え？

俺と副会長は驚いた顔をしてゼロを見る。

「ああ、報酬は魔弾を六発と学食の食券で頼む。俺の部屋に送っておいてくれ。俺は退屈な話は嫌いなんだな。さっさと部屋に帰らせてもらう」

そこまで言い切ると驚いた二人を取り残してゼロはここから出て行ってしまった。

「どういふことでしょうか」

「あの野郎……、相変わらず上からの口調は変わんねえってことかよ」

「……とにかく、オギさんの報酬につきましては新しい剣と今度の追試の免除、ということでしょうか？」

「まあ、問題ないな」

「では、部屋に送っておきますので」

副会長はそういうとドアをわざわざ開けてくれた。

しかしあの野郎、強さだけは一流だな。

そこだけは、認めても良いかもしれない。

相変わらずむかつく奴だな。

17話 いがみ合ったこの世界、廻り廻って認め合う。(後書き)

まとまりましたー。

ー加ー

18話 空洞化する、この世界。(前書き)

加減乗除と18羽……じゃない、18話です。

―減―

18話 空洞化する、この世界。

――ゼロとの一件があった数日後。

俺はそこそこの単位もたまってきたので、とくに依頼も受けず授業を受け続けるという日々を送っていた。

――食堂。

「あー、眠い」

怠惰な日常というものは本当に空しい物で、こうして今の俺が眠気にさいなまれているのも、歪めないといえるだろう。

「――ギ」

あー、それにしても眠い。

「――ギってば！」

なんか依頼でも受けに行くかなー……。

「オギ。起きなさい！」

「母親か！」

突っ込みながら食堂のテーブルに突っ伏していた顔を上げると、目の前にはアルメリアがトレイを持っていた。

「大丈夫？　ずいぶん眠そうだけれど」

「大丈夫じゃないぞ。今もこうして睡魔と死闘を繰り広げているところなんだ」

「まあ、そんなことはどうでもいわ」

冷たい幼馴染である。哀しいね。

「ねえ、掲示板の方が騒がしいの。食器を返すついでに見てこない？」

アルメリアはそういうと、俺の傍らにあった空の食器を乗せたトレイを自分のものに重ねた。

掲示板の周りには今まで見たことがないくらいも量の人ばかりができていた。

周囲からは喧騒。

取り巻きは怪訝な眼。

「あの、何かあったんですか？」

アルメリアが取り巻きのうちの一人に声をかけた。

重そうな鎧を身につけている。いかにもな重戦士だな。もしかすると上級戦士かもしれない。

「ああ。一年の学年次席か。……いや、今日は異常に魔物の討伐依頼が多いらしい」

「魔物の……、学院の周囲のですか？」

「そうだな。ほとんどがそうだ。だから……見ろ」

そう言ってその重戦士が指さした方向を見ると、掲示板の前に群がっている人だかりの内のほとんどが、武器を身につけているのが見えた。

大剣、盾、銃など。戦士科や、他の学科の戦闘狂が一堂に会しているといっても過言じゃない状況だ。

「ずいぶんと……騒がしいですね」

「まあな。戦闘好きな連中はこぞって良い依頼を奪い合っているよ」

「あなたは行かないんですか？」

そうメリアが訪ねると、重戦士は鎧の継ぎ目からかちやかちやと音を立てながら苦笑した。

「俺はそんなに戦闘好きではないんでね。余った依頼もののんびり

受けることにするよ」

そう言うと、鎧は向きを変え、食堂の入口に向かってゆっくりと歩いて行った。

「どうする？」

気がつくともリアがそばに戻っていた、いちいち行動の素早い奴だな。

まあ、そういう迅速なところも、リアの成績を底上げしている要因なのだが。

「そうだな……。今日はちょっと調子が良くないしな。俺は部屋で休むよ」

「そう？　じゃあ、お大事に」

そう言うと、リアは振り返って去っていくとする。

「おいリア」

「何？」

「お前は何か依頼を受けないのかよ。良いチャンスだぜ？」

そう呼びかけると、リアは再び出口の方に身体を向き直しながら、

「私は、パートナーとしか依頼には行かないの。“約束”したでしょ？」

と言い、少し、彼女にしては珍しく、優しそうに笑った。

—————戦士科棟、四階。

とは言ったものの、数時間部屋で眠ってしまえば眠気なんてものはさっさと醒めてしまうもので、俺は上級生や戦士科の連中がほとんど依頼に行ってしまう、ガラ空きと言っていい程誰もいない廊下を歩いていた。

しかし、これからどうしようか……。

やはり部屋に戻るべきか。

授業はもう休むと連絡を入れてしまったし。

訓練場にでも行って、新しい剣の切れ味でも試すかな――。

そう、思った時だった。

突然、体中を縦に、横に揺さぶる衝撃が全身を襲った。

「うおっ!？」

思わず、地面に手をついてしまう。

地響きがしばらくして収まり、次の瞬間。

「きゃあああああああ!!」

「――!？」

実習用の校庭の方から、今だわずかに学院に残っていた生徒たちの、悲鳴が聞こえた。

19話 無色透明なこの世界。(前書き)

加減乗除ッス。19話ッス。

グロいです。

―乗―

19話 無色透明なこの世界。

――何だ?! 何が起きたんだ?!

急いで最寄りの窓に駆け寄り、校庭の様子を一望する。

校庭の土の中から、三匹の巨大な白い生き物が姿を現していた。

そいつの白はとても生々しく艶めいており、その表皮には緑色の脈打つ太い血管が幾束も浮き出ていた。細長い体からは、それに似つかわしくない丸太のような足が百足のように生えている。

――ああ、コイツは知っている。図書室の本で見た。余りのインパクトのある外見のおかげでよく記憶に残っている。

確か名前はボーゾだ。

舞い上がった砂埃の中、三匹のボーゾは一斉におぞましい叫び声を上げると、校庭に散らばった人間に喰らいつき始めた。

一人目の犠牲者は下級呪術科の少女だった。涙目で逃げる少女にボーゾはあつという間に追いつくと、少女の頭にかじり付いた。それで即死した彼女の死体を掃除機のように吸い込む。

20話 想像が支配する、この世界。(前書き)

加減乗除 20話

戦争 はじまりはじまり。
— 除 —

20話 想像が支配する、この世界。

「どうなって――」

「狼狽えないで」

いつの間にかやってきたメリアが言った。

「人が1人死んだんだぞ!？」

「誰が死んだの？」

「下級呪術科の少女だ!」

「私のフルネームも言えない。いくら勉強しても点の取れない。そんな記憶力の乏しい奴が、遠めで見たような少女の存在を理解できるの？」

「……………」

そういわれて見れば……………」

「ボーズの基本特質は？」

「……………特質？」

「……………」

メリアはジト目で俺を見ると、溜め息をついた。

前言撤回。

外見が印象的だったからといって、何もかもを覚えているわけではないのだ。

「早く行くわよ!」

「え、な、どういうことだ!？」

メリアはその窓から校庭に飛び降りる。俺もそれを追って飛び降りた。

「呪文詠唱。水よ、滝渦の姿をとり障壁となれ!」

メリアは叫んで、地面との接触直前にクッションを作る。それから、上手く地面に着地した。

俺はというと、物理的に接触を避けるため、自分の長剣を壁に刺して上手く滑らしながら降り立った。

ああ、折れなくて良かった。

「・・・・・・・・あれ・・・・・・・・？」

そこに居たはずの人間の姿がほとんど消え去っている。

「死んだ・・・・・・・・のか？」

「そんなわけじゃない。大体、さっき地鳴りがしたばかりで貴方が思ったほどの人数が集まるわけ無いでしょ」

「・・・・・・・・つまり・・・・・・・・？」

「んなことも知らないのかよ、カスが！」

聞き覚えのある声。

俺を罵倒する、もうクセに近い叫び。

ソイツはいつもどおり銃を構えていた。

「ゼロ・・・・・・・・！」

「勉強しなおす気は無いらしいな・・・・・・・・。まあ、お前のことだから勉強したってすぐ忘れるんだろう」

「何だと、コラ！」

「やめて、オギ！」

そう言って、出しかけた腕をメリアは止めた。

行動パターンを把握されている。

「今はそんな場合じゃない。それに、否定できないしね」

「メリア!？」

「ソイツもそう言ってるんだ。諦めろ」

「・・・・・・・・くッ！」

俺は諦めて腕を下ろした。

それを見てゼロは口を開く。

「アイツの特質は幻覚性毒霧だ。しかも目ではわからないほど細かくなっている。それを吸ったものは幻覚を見る」

「幻覚・・・・・・・・」

「だから貴方は、遠くからでも呪術師の少女が死んだって分かったの」

「そんな幻覚見てたのか？ハハ！」

ゼロは俺を見て笑う。

「何がおかしい！」

「いいか？この毒霧は、対象者の1番見たくないものを見る。つまり、お前は無意識に人の残酷な死を恐がっている。しかも女子だな」

「……………!?」

俺は横目でメリアを見た。

そうだ。

俺が恐がっているのは――。

「そんなんで戦えるのか？」

ゼロは見下すようにして――当然、物理的には見下されているのだが、そういう意味ではなく――俺を嘲笑した。

「……………そんなことにならないために戦うんだよ！」

俺はポーズの方を見る。

この校庭には、ほとんど人数が居ない。居るのもほとんどが下級だ。つまり、現状は最悪。

「……………あれ？」

メリアは突然、声を上げた。

「どうした？何かあったか？」

「どうして「来たぞ！ボットするな！」

ゼロとメリアの声がかぶって聞き取れなかったが、一体のポーズは突っ込んできたのは確認できた。

俺は飛び上がり、突進を避ける。ゼロとメリアは最小限の動きで避ける。

「魔弾…貫通弾グリフォス」

「呪文詠唱。火よ、重なり合い炎となれ」
「居合い」

そう言ってそれぞれ武器を構えた。

「「くたばれ!!」」

それぞれの攻撃が各所に当り、ボーズは叫び声を上げた。

「まずまずだ。流石は、次席か」

「ありがとうございます」

俺を無視して会話を続けている。

「お前らな——」

「G y a a a a a a a a ! !」

「G a a a a a a a a a ! !」

残りの2体の叫び声が上がった。

・・・くっそ。余裕が無さそうだ。

21話 謎が謎を呼ぶこの世界。(前書き)

加減乗除21話、加。

前回のほんのちよつと解決編というか。

まあ、タイトルどーりまた謎を呼びますが。

21話 謎が謎を呼ぶこの世界。

「後二体もいるのか……」

「おい、これ飲んどけ」

オギは校庭に残った二体のボーズを睨んでみると、不意にゼロから緑色をした小さく丸い物を投げられた。

「これは？」

「解毒薬だ。さっき救護科からかつぱってきた。お前の相手にはもう渡してある。さっさと飲め、それで毒霧から一時間は持つはずだ」

「そうか。お前にしては珍しく気が利くじゃねえか」

オギは投げられた緑色の丸い物（おそらく飴）を食べる。

うん。

時間が経つに連れて舌が痺れる様な苦味が口とのど全体に広がって――――、

「まずっっ！！」

なんだこりゃ！？ 人間の食べるもんじゃないぞ！？

危うく吐き出しそうになる。

「あ？ メロン味だとも思ったのか？ 馬鹿かお前は。こいつはれっきとした薬だぜ？」

「て、手前……！！」

「にしてもその程度の味で吐き出しかけるとは、お前もまだまだガキだな」

「こんなものを平気で食べられるお前の味覚のほうがかしてるんじゃないのか？」

「何だとコラ！！」

「やんのかコラ！！」

「二人共、今は戦闘中だよ！！」

俺達二人の言い争いはメリアの声で遮られた。

すると、ボーゾの内の一匹がこちらに向かって大口開けて突っ込んできていた。

「ちっ！！」

ゼロは舌打ちをすると左に飛ぶ。

俺も右に飛びながら回避する。

「こんなやつらさっさと狩るぞ！！」

ゼロはライフルを構えて先ほど突っ込んできたボーゾに向ける。

「オギ！！　きっと知らない……っていうか忘れてるだろうから言っとくけど、こいつらは毒霧を出すけれど、それってつまり自分の身体能力には自信が無いって事なのよ！！」

「だったら何なんだ？」

「だーかーら、コイツの毒霧さえ封じてしまえば、倒すのは楽なのよ！！」

とてもこのいかつい外見（というか気持ち悪い）からは想像できないな。

「火よ、重なり合い炎となれ」

メリアは早速炎を手から出している。

ドオン！！ という音がして、ゼロが撃った魔弾が一体のボーゾに、メリアの放った炎がもう一体のボーゾに直撃した。

『
G
y
u
o
o
o
o
o
o
—
』

二体のボーズはうめき声を上げながらズズンと倒れる。

「ほへ」

「こんなもんかしらね」

「俺ら二人に掛かればな、学年次席」

「俺を忘れるな！」

とはいえ、今回もほとんど何もしてないけれど。

あれ、最近ほとんど何もしないような――

と、戦闘が終了してホッと一息ついていた時だった。

ゴゴゴゴゴ、と先ほどボーゾが出現したときのような地響きが響く。

「のわっ!!」

「キャツ！！」

俺とメリアは尻餅をつく。

「この程度で慌てるな」

ゼロは先ほどと変わらず立っている。

ピシッ、と。

地響きの中でまた別種の音が聞こえ始めた。

その音は、この校庭から聞こえている。

その音が大きくなると、校庭に亀裂のようなものが走り始めた。

「い、一体何が……」

様子を見てみると、バゴンと大きな音を立て先ほどボーゾが空けたであろう校庭の穴の地面から人の十倍はあろうかとする大きな手が突き出してきた。

手といってもそれはレンガと土を固めたようなもので、それが校庭から突き出していた。

「はっ？」

その手は地面を掴むとそのまま力を入れているようだった。そうして、次にもう片方の手が現れ、最後に全身が姿を現した。

「あ、あれは……」

「ゴーレム……？」

目の前には身の丈3、4メートルはあろう土と泥と石で出来たゴーレムが立ちふさがっていた。

「校庭はもぐら叩きじゃねえっつの。……、ん？」

ゼロはゴーレムが出てきた穴の奥に何かが見えた。

「どうした。ゼロ？」

「おい、お前ら。俺はちつとばかりここを離れる」
『えっ!?!』

ゼロの突拍子も無い発言に二人は驚いた。

「気になることはさっきからあった。俺はちつとあいつとボーゾ共が開けた穴に行つて来る」

「行つて来るって……」

「学年次席がいりや問題ねーだろ。それとも俺様と離れたくなーいつてか?」

「黙れ。さっさと行つて来い」

「はっ!!　ゴーレムは相手にもよるが、こいつはそれなりな強さがありそうだぜ。泣きべそかいて俺にすぎりつくなよ?」

「お前こそ穴から出れないとか言つて俺に助けなんざ求めんなよ?」
オギとゼロはガシツと拳を付き合わせると、二人は走り出した。

「手前まで来るこたねえぜ?」

「お前が一人で穴まで行けるか不安でわざわざついてきてやったんだ!!」

二人は言い合いながら穴まで向かっていると、ゴーレムがその不器用で不自然な腕で殴りに掛かっていた。

「せえら!!」

オギはその拳を剣で横に流すようにしてかわす。

その間にゼロはゴーレムの股下をくぐり抜けてストーンと穴の中に入つていった。

「ゼロさんが不思議に思うのも分かるかも」
「どうしてだ?」

オギはとりあえずメリアのところまで戻ると、メリアが不意に話

し始めた。

「まず、この学園には魔法結界があるじゃない。どうやってあの程度の魔物がこれを抜けてきたのかって一つ目」

そう。忘れっぽい俺でも覚えていることの一つだ。

この学校には魔法結界と呼ばれるものがある。

これは外敵から身を守るための防犯用として設置されているもので、俺が入学して以来これが壊されたなんて話は聞いた事が無い。それくらい頑丈なものらしい。

「次に、ボーズの毒霧について。どうしてあんなに早く毒霧が学園中に広まったのかってこと。大抵霧なんてものは風でもない限り溜まるものだから、地鳴りがして現れたんだとすれば、普通広がるのは校庭くらいのはず。それなのに、窓から様子を見ていたオギにも毒霧の被害が出ていた」

言われてみれば確かにそうだ。

毒霧のめぐりが早すぎる。

「私がオギのところに向かう途中にも毒霧に掛けられた人はたくさん見た。ってこと、あの毒霧は学園中にすでに回っていたことになる」

「あれ？ そう考えると変だな」

確かに地響きがしてすぐに俺は外を見たはずだが。

「でも、この二つもあるキーワードを当てはめれば解決することが出来る」

「あるキーワード？」

「それは、地下よ」

メリアは指を下にして答える。

「地下には学園結界は張られていないし、魔物が入ってきたのもう
なずける」

「ボーズは多分、地下であらかた毒霧を吐いていたんじゃないかし
ら。それが空調機にでも入って学園中に流れた」

「どうかしら？」

メリアはウイंकをする。

やっぱりこの幼馴染は圧倒的に頭が良い、何より、戦場での状況
分析が。

そう改めてオギは確信した。

22話 赤く舞い込むこの世界。 (前書き)

加減乗除です。22話です。――減――

22話 赤く舞い込むこの世界。

ゼロが飛び降りていった大穴を尻目に、俺とメリアは改めて校庭に立っているゴーレムに向き直った。

全身が土や岩で作られた巨体がゆっくりとその大きな拳を振り下ろしてくる。

「オギ、さすがにこれくらいは忘れてないと思うけれど、ゴーレムは高い攻撃力と防御力を併せ持つ代わりに、動きは鈍いわ。素早く動いて、敵をかく乱させましょう」

そう言うのと、メリアは「水流!」と叫びながら、俺の横を走って行った。

俺は一度現状把握に努める。

今校庭に居るのはメリア、俺、それから騒ぎを聞きつけて集まってきたらしい数人の生徒たちだ。

思い思いに攻撃しているあたり、誰と誰がコンビで——とかいうのは特に無いらしい。

即席の一個騎士隊の様なものだ。

だが、相手がゴーレムなら、統率のとれていない集団の方が戦いやすい。

なぜなら、統一した動きをすることがないからだ。魔物だって一応生き物である。相手の行動パターンを読んで攻撃してくることも少なくない。経験則で言えば、だが。

その地響きに耐え、俺はゴーレムを挟んで真正面に立っていたメリアに叫んだ。

「動きは封じたぞ！　後は皆で総攻」
「GUGUGUGUGUUU
UUUUUUUUUU！」

しかし、俺の叫びは突然ゴーレムが上げた轟音によつて遮られた。思わず、耳を手で押さえてしまう。

からん、と剣が地面に落ちた。

「GUUUUUUUUUUUUUUUUUUUUU!」

そこには、身体を形作っている岩石の間から赤いマグマのようなものを流している、ゴーレムが立っていた。

「……違う、こいつ、ただのゴーレムじゃないわ!」

いつの間にか俺の隣に走ってきていたメリアが叫ぶ。

「た、ただのゴーレムじゃない？　どういふことだ、よ……」

メリアと言えば、さきほどの轟音に全くダメージを受けていないらしい。おそらく、水か何かを使って耳を塞いだんだな。

「野生のゴーレムじゃないってことよ。このゴーレムは、使役魔法にかかっているわ」

使役魔法……。

えーと、よし、覚えてるぞ。たしか、魔物の思考や行動を自らの魔力に乗せ、対象に指定した魔物を術者の意のままに操る魔法だ。

よし、完璧。

「……つまり、このゴーレムは誰かに操られている、ということか」
「その通り。自体発熱なんか、本来ゴーレムに出来るはず無いわ。
誰かがこのゴーレムの身体に魔法をかけて操っていると考えるのが
一番妥当よ」

そう言うと、メリアが身体のあちこちに赤い切れ目を光らせている
ゴーレムの方を向いた。

「……使役魔法にかかっている魔物と対峙した時、何に気をつける
か。覚えてる？」

……何だったっけ。

「……後で補習ね。正解は……」

とメリアが俺に向かって抗弁をたれようとした瞬間。

俺達と少し離れたところで大剣を構えていた男子生徒が、その場
から消えた。

「え……」

思わずそんな声が出てしまう。

見上げると、マグマゴーレムが俺達に背を向け、その腕を振り上
げるモーションをしている最中だった。

そして。

次の瞬間、学院の戦士科棟の二階から四階にかけてが、えぐれた
ように消えていた。

「高速移動補助魔法！？ そんな、ゴーレムにかけるなんて……」

隣でメリアが驚いたように声を上げた。

マグマゴーレムは、さっきまでの行動全てが嘘だったかのように、俊敏にこちらを振り向いた。

……速い!!

危険を察知してメリアの手を引こうとするが、マグマゴーレムは既に腕を振り上げていた。

(……殺られる!!)

そう思い、せめて自分を盾にしようとメリアを後ろに引っ張り、目を瞑った。

「……………」

……が。

次に訪れるであろう衝撃は、いつになっても来なかった。

目を開くと、

「……詠唱魔法、……呪縛」

慣れていないと聞き取るのはとても難しいであろう、小さな声。そこに立っていたのは、片手に持つにはあまりにも大きな、木の釘をもう片方の手に握った大きなハンマーでマグマゴーレムの拳に押し当てている、俺が唯一呪い師科で親しくしているアレンの友人、オレガノ・ルードだった。

23話 嗚咽にも似たこの世界。(前書き)

どうも加減乗除です。

23話です。

何かボーゾさん一氣に死んじやいましたWWW
ー乗ー

23話 嗚咽にも似たこの世界。

マグマゴーレムは唸るような嗚咽を漏らし、こちらを威嚇してきた。攻撃はしてこない。動けないのだ。徐々には動いているものの、震える程度でしかない。

これが呪術師――。

「……詠唱魔法、……鎌拔」

オレガノが呟いた瞬間、マグマゴーレムの右腕が突如として吹っ飛んだ。

「G u u u u a a a a a ! ! ! !」 悶え叫ぶゴーレム。身を振るうにも振られない。痛みと怒りとで身に纏う炎が逆立つ。

「……地獄へ送り返してやる」ゴーレムが喘ぐ様を見て厭に不気味な艶笑をするオレガノ。「……詠唱魔法……k」

言いかけたその時。ゴーレムの拳に刺した釘が霧散した。

獅子の如く吠えるゴーレム。束縛から解放された拳を振り上げる。

「……！」隠れた目玉をひん剥いたオレガノ。彼女にとって全くの不測の事態が起こったのだ。

――術が破られた

拳はオレガノの鳩尾を捉えた。彼女は宙に飛ばされ、地面を二転三転して止まった。

「……は……ぐッ……あ……！」腸が口からはみ出してしまいそうな凄絶な感覚。懸命に堪える。「……こ……んな筈じゃ……！」

23話 嗚咽にも似たこの世界。(後書き)

何か文の感じが変わってばっか……。
あと、殺すシーンのほうが楽しい。

―乗―

24話 世界を縛るは、友の枷。 (前書き)

加減乗除です。24話です。

もはや題名意味不明。

―除―

24話 世界を縛るは、友の枷。

「オレガノ！！」

俺は焦った。

これ以上犠牲者を増やすわけには行かない――。

「落ち着きなよ、オギ」

「落ち着いていられる場合かよ！ 人が1人――」

アレ？

この声は・・・・・・。

「俺に任せて」

この優しい物言いには心当たりは1つしかない。

「アレン・・・・・・」

「大丈夫だから」

そう言ってアレンは歩いていく。

そして倒れて伏しているオレガノの横に屈む。

「まるでもうすぐ死にそうな台詞を言うね、オレガノ」

「・・・・・・不吉は、呪いに必要だから・・・・・・」

「どうせ、そんなに苦しくも無いんだろう？ 君の術式が破られて悔しいのは分かるけど、いつまでもそうしているわけにはいかないだろうしさ」

「・・・・・・」

オレガノは静かに立ち上がった。

どうも、痛みはそうでもなかったらしい――いや、まあ、いつも体調は悪そうな顔立ちなので判断しづらいけど。

「さて・・・・・・どうしようかな」

アレンはそう言って立ち上がりゴーレムを睨む。

先ほどまでの優しい視線ではなく、明らかに相手を憎悪を持って

見つめている。

「オレガノ、ゴーレムの動きを封じて、倒しやすくして」

「呪う」

「OK。じゃあよろしく」

アレンはそう言ってもう一度笑う。

それを合図にするようにオレガノは今度は鉄製の釘と鉄製の普通サイズの金鎚に持ち替えてから、走り出した。

「Guoooooooooooooooooooooooo!!」

ゴーレムはまた自体発熱を掛け始めた。

それに向かってオレガノは走りこむ。

そして、その体に向かって釘をぶつける。

釘に熱が伝わり、オレガノの手と釘の煙を上げる。

「…………詠唱魔法…………空間を支配し、呪縛の念を解^{ほど}かない」

それでも顔色を変えずに、その体に金鎚で釘を刺す。

「…………術式…凍結」

さらにもう一度金鎚で釘を叩く。

呪縛で動けなくなったゴーレムの体が、今度は熱が下がっていくようだ。

そして、オレガノは地面に着陸する。

「Gu…………」

すると、ゴーレムは何の動きもとらなくなった。

先ほどとは違い、喘ぐことも暴れる事も、発熱すらしなければ高速移動をすることも無い。

「ナイス、オレガノ」

そう言ったアレンは小刀を持っていた。

そして一瞬消えると。

ゴーレムの後ろに立っていた。

さらにその瞬間にはゴーレムの体はバラバラに崩れ去っていた。

「じゃ、あとよろしく」

アレンは言ってオレガノを見る。

オレガノは何も言わずに、バラバラになったゴーレムの体の上に立つ。

「術式…使役解除」

オレガノがそう言うと、心なしかゴーレムの体から覇気が消え去った。

「お疲れ」

「・・・・・・」

静かに2人はハイタッチして、静かに笑った。

25話 地下で蠢く、この世界。(前書き)

加減乗除の25話目。

加。

つか

25話 地下で蠢く、この世界。

「相変わらず、すごいな」

アレンの手際のよさはいつも一級品だ。

「流石のゴーレムも、もう動けないでしょうね」

メリアも感心している。

「今までどこ行ってたんだよ」

「ちよつと任務にね」

「……依頼よ」

「アレン、お前が言うど任務つてのもシャレにならないぜ」

「ああ、そうだね。ところで、何でこんなことになっているんだ？」

「……謎」

アレンやオレガノも不思議に思っただけだが、それが分からない。メリアの説明からして、地下に何かあるとしか思えないが……。

「随分と長い通路だな」

ゼロは穴の中にある通路を歩いて進んでいた。

「これで何も無かったらどうしたもんか」

そうしてゼロはふらふらと歩いていると、通路の出口に強めの光が見えた。

そのまま走っていくと、大きめのホールに出た。

「何だここは……」

そう呟いた直後、ゼロの上に大きな影が出来た。

「!?!」

上を見ると、何かの巨体がゼロを踏み潰さんと落ちてきていた。

ゼロはそれを大きな横っ飛びでかわす。

ズズン、と大きな音を立ててその巨体は着地した。

「一体何がどうなってやがる……」

その巨体を見て、数日前のあの一件を思い出す。

「こんなところにサラマンダーがいるなんてよお!!」

その巨体は数日前倒したばかりのサラマンダーだった。

とはいえ、おそらくあれとは違う個体だろう。目の前のサラマンダーは以前のものよりも一回りほど小さい。

ゼロがサラマンダーを見ていると、あるものを発見した。

「おい、お前!!」

よく見るとサラマンダーの上に人が乗っている。

常識的に考えれば、まずありえない光景だった。

「僕のことかい？」

ゼロに聞き返すように、サラマンダーの上の男は答える。

「お前以外にここにはサラマンダーしかいないだろうが。いや、そ

んなことより、どうしてそんなところにいる!!」

サラマンダーは何にも気づいてないという風な顔を崩さない。
あの上の男は気づかれていないのか？

「あー、うん？ 何を言ってるんだ君は。そんなところって」
「どうしてサラマンダーの上に平気でいるんだよ!!」

どうも話がかみ合わない男だ。

「そりゃ、僕が使役して行使して活用しているんだから。当たり前じゃないか」

……？

「まったく、僕のボーゾ達も上から戻ってこないところを見ると、
やられちゃったかな？ ゴーレムの魔力も途絶えたっぽいし、どう
したものかな」

コイツの、差し金……？
上の騒ぎは、コイツのせいか……？

「君、一人かい？」

「お前は、一体……」

「僕？ 僕は調教師、カンパネルラ。多分君一人程度なら適当に
葬れるよね」

そこまで言って男————カンパネルラはこっちに向けて指を指
す。

すると、今まで平穏だったサラマンダーが急に敵意を丸出しにしてこちらを睨んできた。

25話 地下で蠢く、この世界。(後書き)

れました。

26話 狐と使役とこの世界。(前書き)

そうです加減乗除です。
26話です。

26話 狐と使役とこの世界。

いったいどうなっていやがる……!?

赤く光るサラマンダーの瞳を逆に睨みつけながら、ゼロは持っていたライフルを再装填する。

「てめえ……。使役魔法の使い手か。しかもその服、うちの学院の……」

「そうだよ」

カンパネルラと名乗った男は、へらへらというか、余裕たっぷりの表情でこちらに向かって笑みを浮かべていた。

……こいつ、学院の魔法結界が地下に及んでいないことを知っているのか。

学院の制服を着ていながら、こんなことをするのは……。

「……潜入者か……!」

この学院の存在意義は、この世界で生き抜くため、戦っていくために必要なものを教えること、世に貢献できる人材を育てることにある。

だからといって、この大陸は治安がよく、正義が必ず勝つという世界ではない。魔物、竜族など、それらを自主的に狩って生きる者も多い。彼らは彼らでコミュニティを作り、俗に言う組織を作っているのだ。中には、非合法に裏社会を回っている者たちもいる。

戦士科や狙撃科、魔術師科の生徒たちは、そういう連中と獲物が被ることもままある。そういう意味で出来の良い生徒は恨みを買うことも多いのだ。

だがまさか、こういう手を使うとは……。

「……へえ。評価1の癖に頭もいいのか。てっきりただの単細胞なんだと思っていたよ、フォックス・F・ゼロシルバー」
しかもお前の情報も把握済みか。

「推理能力もなかなか。引き込むのは君にしておけばよかったかな。まあ、過ぎたことだからいいけれどもね」
何のことだ。

「行動が問題なんだね、迂闊だった。しかし、ここまで追ってくることも予想外だったよ。実は逃走途中だったんだけれど」

「てめえ、ふざけんなよ。俺を相手にしたことを後悔させてやる……」

頭にふつつつと怒りが灯る。舐めた口ききやがって。

「後、僕は別にスパイじゃあないよ。引き込まれたのさ」
カンパネルラが笑みを浮かべる。

「引き込まれた……だと？」
「そう。それも、とても魅力的な条件でね。僕のこの、使役魔法に特化した魔力を最大限活用できる、素晴らしい誘いだった。この学院を裏切ってもお釣りがくるくらいだね」

「ふざけんなクソ野郎。逃げられると思ってんのか」
「まあね」

そう言うと、カンパネルラはサラマンダーの背から軽い身のこなしで地面に着地した。

「さあ、時間も迫っていることだし。この子には君の相手をしてもらうよ」

「チッ……」

周囲の温度が上がっていく。

完全にこの空間はサラマンダーの狩り場になってしまったようだ。
だが、負ける気は、無い。

銃を構え直す。

27話 世界の秩序は静かに乱れる。(前書き)

加減乗除です。27話。

初めての試み。2つの部位は共存できるのか。

―乗除―

27話 世界の秩序は静かに乱れる。

沈黙。静寂。無言。空間を包んでいる空気は熱気に凄まじいスピードで包まれていく。

「・・・・・・・・」

俺も含めて相手も動かない。これだけ殺気を放っているというのに、サラマンダーは微動だにしない。調教師はその生物の特性すらも操ることができる、という事だろう。

つまりサラマンダーは関係ない。俺とカンパネルラの駆け引きという事になる。

既に周囲の温度はかなり高くなってしまっている。サラマンダーの準備は完璧だ。

頭部、頬、顎・・・・・・・・汗が各所を伝っていく感覚。心地よい感覚ではないが、そうも言っていられない。むしろこの状況下ではそんなこと気にならないくらいだ。

人には向いていない戦況ではあるが、俄然やる気がでる。断崖絶壁、背水の陣・・・・・・・・彼らが勝負手の正念場だ。

ライフルを持つ手に力を込める。手汗で滑りそうだが、しっかりと掴む。

そして引き金に指をあて、準備は完了。
顎まで伝ってきた汗が一滴、地面に向かって落ちる。

何の音もしなかった空間に、ピチョン、という小さな音がした。
空間の秩序は狂う。

引き金を引いた。

27話 世界の秩序は静かに乱れる。(後書き)

出来た。

―乗除―

28話 世界は絶望をひっくり返す。(前書き)

加減乗除。28話です。

引き続き『除』ですが。

矛盾というか、メチャクチャになっていた点を説明しました。
ので、文章量が多かったので間違いが多発しているでしょう
すみません。

—除—

28話 世界は絶望をひっくり返す。

弾丸はカンパネルラ、1人に飛んでいく。

「楽しみにしていくよ」

カンパネルラの声が届く前に、弾丸はサラマンダーの舌で受け止められた。

「・・・・・・・・」

使役魔法。

魔法にもいくつか種類がある。呪文詠唱、詠唱魔法、術式……種類は様々だ。

呪文詠唱は、魔法の質量、大きさ、形に関わる場合。

詠唱魔法は、魔法のスピードや威力に関わる場合。

例えば、学年次席の女（メリアだったか？）の技で言えば水を渦に変える技や火を重ね合わせて炎にする技は形と大きさに関係するため、呪文詠唱になる。そして炎を飛ばす技ならば、スピードに係しているため詠唱魔法となる。

術式は呪い師特有の魔法で、それは秘密にされているため明らかにはされていないが、術式を使用できる呪い師のほとんどが詠唱魔法を『詠唱^{ルン}』無しで唱えられる。略式魔法とは別である。略式魔法を使える者も存在するらしいが。

閑話休題。

使役魔法とは、所謂、意思疎通に近い。

使役魔法を対象者に使役した場合、使用者と対象者は意思疎通状態となり、使用者の命令に対象者は従うようにセットされる。使役者の地位——魔法や能力、肉体、精神力などの強さのことを指す——が高ければ高いほど、相手を従わせることが出来る。逆に言えば、

相手より自らの地位が高くなければ相手を従わせるどころか、反逆にあったり、逆に従うことになってしまったりするのだ。

つまり。

カンパネルラの地位は、少なくともこのサラマンダーよりは高い、ということが証明される。

後はコイツが身[・]体的[・]に強いのかどうか……。単に使役魔法が強いかかもしれない——いや、どちらにしろ脅威に変わりは無いのだが。

「何やってんだか知らないけど」

カンパネルラの言葉でハッとして前を見る。

「!!」

サラマンダーが口を開いた。

思考に氣を取られすぎた!

口内が赤く光る。

「くっそ!!」

狭い通路を走って逃げる。

「3、2、1」

カンパネルラがカウントダウンで俺をせかす。

「0」

俺は横道に転がる。

同時に背後から大きな炎の玉が横を通過する。

炎は壁にぶつかり、さらに新たな道を開拓した。

「あんなこともできんのかよ……。適応しやがって!!」

俺は呟いてからサラマンダーの前に飛び出して、銃を構えた。

「くらえ!」

引き金を引いてサラマンダーの額に向かって弾丸を放った。

弾速は十分。

「甘いよ」

カンパネルラはサラマンダーの舌で受け止めようとする。
が。

「!!」

弾丸は分厚い舌を貫通し、さらに額にめり込んだ。

「G y a a a a a a a a a a ! !」

「な、何だ! ?」

「魔弾の威力を甘く見るなよ」

グリフォスの爪の成分を銃弾に魔法合成した弾丸。

その名も、魔弾…貫通弾『グリフォス』

「魔弾………! ? 魔法コーティングもしていない銃で………
………! ?」

先ほどまでとは違い戸惑いを見せるカンパネルラ。

しかしすぐに元の様子——よりは真面目な雰囲気を見せる。

「………君は殺すよりもっと道がありそうだ」

「………」

「君は拘束させてもらう」

カンパネルラがそう言ったと同時に、サラマンダーの体が紅く燃える。

「第2ラウンドだ」

カンパネルラは言って立ち上がる。アイツは熱くないのだろうか。

「望むところだ!」

だが、こちらも燃えてきた。

29話 世界はひっくり返されて、狂った。(前書き)

どうも、加減乗除です。

書きたいところまで書いたら、前回より長くなっております。

—加—

29話 世界はひっくり返されて、狂った。

「さっさと、終わらせる」

ゼロは走り出すと、銃弾の一発をサラマンダーの右前足に撃ち込んだ。

「今のは魔弾じゃないね？ その程度の攻撃、この強化サラマンダーに効く訳無いだろう？」

カンパネルラが言い終わると、サラマンダーの体中の赤い光が開けた口に収束する。

「ふん」

鼻を鳴らして、ゼロは横に飛ぶ。

その瞬間、サラマンダーの口が火を噴いた。

それは先ほどのような火の玉ではなく、吐息状。

壁を貫通させるような威力は無いが、そのかわり。

「畜生！！」

横に飛んで避けたはずのゼロは衣服についた火を叩いていた。

「今のは息吹だ。^{プレス}威力は火の玉に劣るがその代わりに効果範囲が広いのさ」

「解説、どうも……」

「すばしっこい狐には、火であぶるのが一番だと思ってね」

ゼロは多少の火傷を負ってしまっていた。

先ほどの攻撃を横に飛んだ状態、つまり無防備な状態で受けてしまったからだ。

「さって、どんどんいくよ」

またもサラマンダーの身体が赤く燃え光り始める。

「早くきめねえとまずそうだな」

ゼロはそう呟くと、一気に左前足、右後足に向けて銃弾を放つ。

「魔弾は撃たない気かい？ その程度じゃあサラマンダーにとってダメージでも何とも無いよ！！」

確かにカンパネルラの言う通り、サラマンダーは呻くことも無く平然としていた。

「確かに痛みは少なさそうだな。なら、サラマンダーの動きを見てみるこった」

「何？」

サラマンダーは呻くことも無く平然としていたが、妙な点があった。

「……、何故、動かない？ お前、何かしたのか？」

先ほどから足を少しは動かすものの、大きな移動は出来ないように見える。

「さあな」

ゼロは残っていた左後足にも銃弾を撃ち込んだ。

「どうしたサラマンダー！！ 痛むのか！？」

「そんなんじゃないと思うぜ？」

カンパネルラは焦りを隠せない。

「使役魔法…神経遮断、対象はサラマンダー！！」

焦った口調でカンパネルラは叫ぶ。

しかし、サラマンダーが動かないのは変わらない。正確には少し動こうとはしているが。

「今のは痛覚を消す使役魔法か？ 無駄無駄、そんなのは。お前言ったよな？ 俺の通常弾程度じゃ痛みもダメージもほとんど無いってよ」

「だったら何だ！！」

「俺は本来、魔弾で足を破壊することだってできるんだよ。ただ、こいつはお前に使役されているだけだろう？ だから、少し殺すのがはばかられてな」

「何が、言いたい？」

「前回のときは討伐が依頼だったから殺したが、お前に操られているだけなら殺す気も起こらなくてな。さっき撃っていたのはただの普通の弾さ。ただ、全部の足の関節に撃たせてもらった。正確には関節の間にな」

「そんなこと、できるはずが——」

「出来るさ。現に今やった。こいつは今関節に入り込んだ銃弾がストッパーになって、全く動けないのさ」

ゼロはカチャリと撃鉄をおこし、カンパネルラに向ける。

「色々聞かせてもらおうぞ」

とりあえず話を聞くことにするか。

「は、はは。今が僕の全力だとも思ったのかい？」
だが、カンパネルラはまだ敗北を認めない。

「こうなったら見せてあげるよ。僕のおっき、使役魔法…召喚、対象は——」

カンパネルラが魔法を言い終わる前にガンという発砲音がした。

「え？」

その銃弾はカンパネルラの右肘より少し下辺りを直撃しており、その勢いで後ろに倒れる。

「言っておくが俺は裏切ったなんて小さいことをした奴に容赦はない」

ゼロは冷酷な目でそう言う。

カンパネルラもまさか撃たれるとは思っていなかった。

それだけに、いまだ状況をつかめずにいた。

「あ、う、撃たれた？」

自分の血まみれになり始めている腕を見て、ようやく撃たれたことを認識する。

「一応、殺す気は無い。話を聞かないといけないからな。お前も知ってるだろうが、ここの医療レベルはかなり高いから、心配するな。腕が切られても切れ味によっては引っ付けることが出来るスーパー救護師もいるそうだからな」

ちよっと個人的な感情に流されたかもな。

ゼロはそう考えていた。

学園中を混乱に巻き込みやがって————、そういう面ではかなり怒っていた。

「痛い」

突如、カンパネルラは気が狂ったように叫び始めた。

思わずたじろぐゼロ。

カンパネルラは目玉が飛び出しかねん勢いで叫びだす。

正直言つて気持ち悪さを隠しきれなかった。

今までのイメージをぶち壊すように語りだす。

「これは、僕の最初の術式だ!! 使役魔法.. 使役、操作を手動から自動へ、魔力充填、対象は、自分!!」

「自分を、使役!？」

ゼロが驚いている中、カンパネルラの周りが光りだし、魔方陣が組まれる。

「設定は30秒。地獄を見せてやるさ。フォックス・F・ゼロsir h a w y」

最後のほうの声は聞き取れないような声だった。

ドン、と大きな音を立てカンパネルラが突っ込んでくる。その音はどうやら足を踏み込んだときの音のようだ。

「は？」

銃を構えるよりも早く、カンパネルラはゼロに飛び込んだ。

その瞬間、ゼロはカンパネルラに殴られた。

「……!？」

そのまま三メートル近く吹っ飛ばされる。

「ぐはぁ!!」

ふらつきながら前を見ると、眼前にはもうすでにカンパネルラが迫っていた。

「まず——」

ゼロが反応するよりも早く、カンパネルラの拳が右顔面に直撃する。

「いぎぁ!!」

今度は5メートルほど吹っ飛ぶ。

世界が、まわって見える。

ゼロは今の一撃で意識を失いかけていた。

だが、そのまま眠るわけにはいかない。

殺される。

決死の思いで身体を起こすが、そのときにはすでにカンパネルラは構えていた。

ドシュ、という音が聞こえそうな勢いで指を固めた抜き手で腹を突く。

その勢いでゼロは壁に叩きつけられた。

ごぼっ！！ と音を出してゼロが吐血する。

今のアイツは、魔力による肉体強化と、自らの肉体に掛けてあるロックを外した状態って訳か……。

ボロボロになったゼロは不思議と落ち着き、冷静に考えていた。

そんなゼロにカンパネルラが迫る。

最強ながら無防備なその身体に、ゼロは銃弾を撃ち込んだ。

それは確実に左腕を貫いたが、それでもカンパネルラは止まらない。拳をライフルで受けるが、ゴン、と音がしてライフルはくの字に曲がる。

「ば、
けもの、
が……」

29話 世界はひっくり返されて、狂った。(後書き)

やっぱり思うこと。

一番怒らせて怖いのは、自分が絶対に負けないと思っている自信家。

—加—

30話 世界は少しずつ変わり始める。(前書き)

加減乗除ですが、30話です。
―減―

30話 世界は少しずつ変わり始める。

「……………そっ！」

へし折れたライフルを盾にして、およそ人間とは思えないほどの猛攻を防ぐ。

「あはは、無駄だよゼロシルバー。君では僕には勝てない」

「ぐがあ！」

手首を蹴りつけられ、ライフルが地面を空しく転がって行った。

「あまり手を煩わせないでくれよ。さっき言ったろう？ 僕は今逃走途中なんだ」

「ハッ……そんなこと知るかよ。行かせてたまる……ぐはっ！」
カンパネルラの膝が腹にめり込む。

「駄目だな。これだから自信家は。いい加減諦めなよ」

「手前に……だけは、言われたくねえ」
痛む腹を押さえながら、それでも立つ。

「ふんっ」

ごすっという嫌な音と共に、今度はキックが腹に直撃した。

「ぐっ……」

足に力が入らない。

思わず膝をついてしまう。

「はあ、やっとか。中々頑丈だね、君も」
視界が朦朧とする。

「じゃあ、僕は行くよ。さよなら、万年落第生」

そう言い、カンパネルラが振り向き、同時に、銃弾を傷口から押し出して足を自由にしたらしいサラマンダーが踵を返そうとしたが、それは果たせなかった。

何故か。

理由は簡単だ。

「おいおい、特別学科の調教師。いけねえなあ、こういうのは」

大人の背丈よりも大きい大剣がサラマンデルの首を斬り裂いたからである。

「な……」

背中を向けていたカンパネルラが、驚いて振り向く。

そして、驚愕に目を丸く開いた。

「……教師科、大剣のゴルゼキア……！」

「おいおい、先生には敬語で話しかけねえと。単位下げるぞー」
「追いつかれたのか……。くっ」

サラマンデルの遺骸が鮮血と共に地面に倒れ伏す。
一瞬、その地響きにカンパネルラがひるんだ。

次の瞬間、ゴルゼキアはカンパネルラの目の前に距離を詰めていた。
た。

「今回の騒動はお前が原因だよな。ちょっと、職員室まできてもらうぞ」

その手に握られた大剣の刃が首に押し当てられている。

「おい、零狐、生きてるかー？」

「死んで……ねえよ、くそが……」

意識がようやくはつきりし、痛みをこらえながら立ち上がる。

「よし、後で救護科棟に行つとけよ。戦士科棟は駄目だ、ほとんど壊れちゃったからね」

そう言い、戦士科の、おもに上級戦士の成育を受け持つ大剣使い、教師科のゴルゼキアがカンパネルラの首筋に当てていた剣を肩に担ぐ。

「……！」

隙を見せたと思ったカンパネルラが、振り向いて逃げ出そうとしたが、

「だからよ、いけねえなお前は。反省文が良いか？ よしよし、まあ、出ていくなら学園長にでも挨拶してから行けよ！」

瞬きの間に前に回り込んだゴルゼキアに、拳を喰らい、吹っ飛んだ。

「……相変わらず、だな、この鬼教師……」

「うっせえぞ、狐。ほれ、さっさと行け。それとも、担いで貰わねえと駄目かあ？」

「黙ってろ、一人で……行ける」

足を引きずりながら振り返り、再び穴の中を歩き始めた。

「あーあー、今回は特に酷いよな。寝返らせるとは、敵さんも考えたな。そう思わねえか？」

と思つたら、気絶したカンパネルラを担いだゴルゼキアが、噛みながら追い越して行った。

……くそつ、いつも思うがああ鬼教師、何であんな大剣担いで素早く動けるんだ……。

教師科は、学院の生徒の属する戦士、魔術師、救護、隠密師、呪い師、狙撃、その他（一般に第七学科と呼ばれる）とは別に区分された、要するに、先生の属する部分だ。

はつきりいつて、まともな教師と、戦士科や呪い師科の教師の様な少タイカれた連中が半々くらいにいる。人材としては、どの教師も一品なのだが、教えるものが教えるもので、頭が残念な教師（これは教師と呼ぶにはいささか無理があるような気がするが）も多い。

ゴルゼキアはその残念な方の内の一人だ。

……クソっ、痛みがぶり返してきやがった。

それでも俺は歩いた。

30話 世界は少しずつ変わり始める。(後書き)

一章終了。

―減―

熱烈歓迎（前書き）

加減乗除です。

31話で御座います。

堅物文しか書けない乗からでした。

熱烈歓迎

数日後——何とか自力で穴を登りきったゼロは嫌々手を貸すオギに嫌々手を伸ばして助けられて、数日後。

救護科棟二階、205号室。

「……クソっ。この程度の怪我で……」

そう呟いた時、トントン、と部屋がノックされた。

扉が開けられた。

まさかアイツか、と身構えるゼロ。

果たして部屋に踏み込んできたのは救護科の女。正しくゼロが予想した人物であった。

名はフレシア。気丈な女だ。

「こんのクソ馬鹿ア!!」

横たわるゼロへ挨拶代わりに檄を飛ばすフレシア。

「アナタが重傷で転がり込んだのこれで何回目だと思ってるの?!」

「チッ……十回目だ」

「十六回目!」 適当に受け答えをするゼロにフレシアの口調が更に怒張する。

「ああ、クソ!! 油断したんだよ、今回は!!」

「前回も前々回もそんな事言ってたけど!? 油断し過ぎ!!」

「うるせえよ、アンポンタン!!」

「うるさい、留年生!!」

「留年してねーし!!」

性格が似てるのか何故だか知らないが、ゼロとフレシアはとても気が合う。ゼロの数少ない友人だ。

そして、勿論二人の間には恋愛感情もある。フレシアがゼロの怪我に口うるさくしているのが証拠だ。

が。お互いがお互いの気持ちを確かめるような野暮なまねはしないのだ。

お互いで分かってるから。

熱烈歓迎（後書き）

はっちゃけさせました。
ますみせん。

巡々不運（前書き）

加減乗除です。32話だろう？

タイトルイメージ変更。ちなみに造語。

―除―

巡々不運

「・・・・・・・・お取り込み中だな」

俺はメリアとその病室前に来ていた。

「見舞いにくるまでもなかったか・・・・・・・・」

「そうね。むしろ邪魔しないようにさっさと退却しよ」

メリアがそう言って、花束を近くに居た救護科の人に預けた。

「男女の仲って分かんねーよ」

「それはアンタがガキだから」

「お前に分かるのかよ！」

「オギよりはよく知ってるつもり」

「・・・・・・・・」

何だろう。俺はアレか？今をときめく、鈍感な主人公か？

いやいや・・・・・・・・もうアレは古いだろ・・・・・・・・。

「・・・・・・・・メリアにそういう相手はいないのか？」

「・・・・・・・・」

メリアはこちらを見る。それから、

「教えなーい」

と妖しく微笑んで言った。

「・・・・・・・・・・はあ」

分かん。

俺には本当に女子が分からない。

「どうする？これから」

「訓練所とか、色々巡ってみましょう。事件で壊されたところとかもあるかもしれないし」

「・・・・・・・・・・そうだな」

あの事件。

ゼロから軽くは訊いたが、話によると犯人の男はカンパネルラという調教師らしい。

そしてゴルゼキア先生がソイツをつれて闇に消えていったと・・・

その程度しか情報が無い。

実は事件後、例のゴルゼキア先生にあったのだが、

「よくやったな！お前ら！今度、対策委員会から褒美が与えられると思うから、精進しろよ！あと」

そう言っただけ俺達の肩を組んで、

「あんまり深追いするなよ」

と一言言っただけ、じゃーなーと笑いながら去っていった。正直恐かったけど。

「・・・・・・面倒な事に巻き込まれた気がする」

「私の所為っていいたいの？」

メリアが睨んでくる。

はい、そうだと思います。何て言えるはずもなく。

「そんな事無い」

と一言言っただけ、メリアを見ずに先に進む。

「あ、オギ！」

遠くからそう言っただけ呼ばれた。

「お、アレンじゃん」

今日はラッキーデーだ。

「オレガノ知らないかな？」

「あれ？いつもとは逆だな。お前が捜してるのか」

「どうも病室から逃げたらしくて、隠密部隊に依頼が来てるんだ」

「・・・・・・なんで逃げ出したのだったの？も気になるけど、何で

そこまでして捜してんだ？」

「オレガノの呪術は最高級だから。間違っただけで死んでもらっても困るらしい。でも彼女は呪術師の中でも単独行動を得意とするくらいの人で、隠れるのも上手い」

「だから、隠密部隊の得意分野って訳ね」

メリアがそう言って考える。

「……いやな予感。いや、大丈夫だ。アレンと会えたら俺はラッキーに違いない！！」

「ねえ、オギ。私達も手伝いましょうよ」

「ホント！？助かるよ。僕らでも時間が掛かってるからね……」

「じゃあ宜しく。見つけたら救護棟に連れ戻しておいて」

そう言ってアレンは消えるように去っていった。

「おい。勝手に決めるなよ」

「いいでしょ。どうせ学校めぐりするんだから」

そう言ってメリアは歩き始める。

アレンの運より、メリアの巻き込みの方が強いらしい。

やれやれ……………。

巡々不運（後書き）

ちなみに

除の部分の説明（ユーザー情報）を一言で表すと

虚々実々

― 除 ―

津々浦々（前書き）

加減乗除、33話。

随分とキリが良いですねっ！

―加―

津々浦々

「とりあえず、どこから回る？」

「オレガノちゃんがいそうなところでしょ？ そうね……」

メリアは頭を抱え込んで学年次席の頭をフル回転させる。

「今まで発見されていないってことは、いかにも隠れそうなところは探してあるわけよね？」

メリアが早速何か閃いたようだ。

「そうだな、と返す。」

「ということは、いかにも隠れるには向かないような場所にいるんじゃない？」

「それが思いつければ苦労はしないだろうけど……、いや、有り得るな」

確かアレンが前にこんなことを言っていた。

「僕達隠密師はよく隠れているわけだけど、その基本的原理は何だと思う？」

「……、そうだな、人が思いもつかないところとかじゃないのか？ 盲点みたいな」

「それもある。だけど、原理で言うならもっと簡単などころにあるのさ。後ろに立つ。ただそれだけさ」

「いや、それ普通すぐばれるだろ？」

「でも、理論的にはこれが一番なのさ」

—————、後ろに立つ。

オレガノが隠れるとすれば、人が密集しているところの後ろ、つてどこか？

「じゃあ、人が集まりそうなところにも行くか？　とりあえず、食堂にでも」

「まあ、いいんじゃない？」

メリアも承諾したことで、食堂に向かうことに。

この学院の中でも屈指の広さを誇るのがこの食堂である。何せこの学院にいる全ての生徒が昼休みには食べに来るのだ（今は前回のごたごたで色々なところを修理中なため自由だが）。

ちなみにこの学院は七年制である。俺達は一年だ。

食堂の奥には掲示板が設置されており、ここから依頼を受けている。

食堂に着くと、生徒がまばらにいた。

修理の合間に少しつまみに来たのだろうか。

奥の掲示板には修理の依頼が続々と来ている。

そりゃ、運動場をあれだけ穴ぼこにされて、校舎まで吹き飛ばばそうなるだろう。

「ここにはいない気がするけど？」

「そうだな……」

きよろきよろと周りを見てみるが、これといって不審な点はない。

というかよく考えたら、隠密部隊が探してるんなら俺達が探す必要もないんじゃない？

「さーて、次ぎ行くわよ次！」
メリアは相変わらず元気だ。

「次は図書館にでも行かない？」

「図書館か、それは確かにいそうな気がしないでもないな」

そう思って図書館に向かうことになった。

津々浦々（後書き）

私、加を四文字熟語で表現するとっ！！

なんだろう？

愉快痛快？ 踊躍歓喜？

ことわざでいいなら“手の舞い足の踏むところを知らず”でしょうかね。

黙々怠惰（前書き）

加減乗除で34話。
―減―

黙々怠惰

図書館に行くまでの間に、俺は入学したてのころに一度だけ入ったことのある図書館棟の間取りを必死になって思い出そうとしていた。

——確か、新入生を学科ごとに分け、先輩がそれを引率する形で学院案内があった時に一度だけ入ったんだっただけ。一度だけ。

なにせこの学院、前にも述べたような気がするが、生徒数が多い。必然的に、彼らの利用する図書館なるものは比例するがごとく、大きくなるのである。

五階建ての戦士科棟並みの大きさなのだ。正直言ってでかすぎる気も歪めないほどに。

そうこうしているうちに図書館棟の前に着いてしまった。

メリアに続いて俺もドアをくぐる。

……予想どうりだ。静寂。時折聞こえる人の足音。

俺は詳しく知らないし、ここで読んだ本なんて説明時間の間にこっそり読んだ一冊くらいなもんだが（しかも剣術の本だった）、ここに集められている本はそのジャンルがかなり多岐にわたっているらしいのだ。剣術に始まり歴史、神話、魔物に関するもの、職業や物語、大陸情勢や国に対する政治的見解の評論、果てには魔導書なんでものである始末だ。

本の虫、というか。そういう人にとっては夢のような場所らしい。メリア談。

「オギ、思いつきで来たし、多分ここが一番有力だけれど……手ごわいわよ」

「……そうだな」

眼前に螺旋状に広がる階段と、そこから手を伸ばせば届く位置にある、巨大な本棚の数々を見上げながら答える。

いくらなんでも広すぎるだろ。首が辛くなる。

「あれえー？ その赤い髪に隣の長剣持ってるのは、もしかしてもしかすると、オギ君にメリアちゃんじゃないかな？」

静寂だった図書館に鶴の一声。

こんな空気読めないことをする人には一人しか心当たりがない。いや、まあここに来れば会うんじゃないかなーとは思っていたけれども。

そう思いながら右上の方を見上げると、

「あれは……図書委員長ね。さあ、帰るわよ」
速いな、メリアさん。

「おーいおいおい、それは酷いんじゃないのかなー？」
そういう上から響く。

とほぼ同時に、俺達の前に埃が舞った。

「うわっ……」

「きゃ……」

埃が晴れると、そこにはだぶだぶの藍色の制服に身を包んだ、ぼさぼさの長髪。

「図書委員長、シンス・レコルト……さん」

「そうだよー。よく覚えてたねー、感心感心」

そう言いながら、シンス委員長が俺の頭をなでなでする。

「先輩、ふざけるのはやめてください」

「あー、ゴメンゴメン」

メリアにたしなめられた先輩がにやはーという感じで頭にげんこつをぶつける。

一応この人、女性である。ふざけ癖が抜けないのがたまに傷だがな。

「あ、そうだ先輩、ここに呪い師が来ませんでしたか？ 女子の」
俺は本題に入る。

黙々怠惰（後書き）

減を四字熟語で表すなら……。

冷静沈着、ところにより傍若無人、一部では虎視眈々でしょう、み
たいな。要は一つじゃ表せないわけです。

神出鬼没（前書き）

加減乗除、35話。

焼き鳥うまいにゃー。

ー乗ー

神出鬼没

「ああ、オレガノちゃんのことかなー？そーだねー、さっきここから出て行っただの見たよー」

何だこの脱力感。この人と話していると段々力が抜けていく。和みか？ただ単のとぼけか？

シンス・レコルト。ある意味での呪術科である。

それはそうとして、オレガノとはすれ違いになってしまったようだ……。

「先輩、『さっき』っていつ程ですか？」一応、聞いてみる。

「あー……さっき。……さっき。」

「先輩、ふざけるのはやめてください」メリアが再び喝を入れる。すると一分前との答えが出た。

いや、答えが出るまでに一分過ぎたと思うが……兎にも角にも俺達がオレガノに近いという事がわかった。

「ありがとうございます、先輩」俺達は礼を済ますと、委員長の横を通り、図書室を後にした。

がその直後、何者かに背後から腕を掴まれた。メリアも同様だった。振り返ると、シンス委員長だった。

「本を読みー読むのじゃー。」

「先輩、ふざけるのはやめてください」

「君ー、さっきからツツコミが機械的過ぎるよー。」

「こういう風にならざるを得ないんですッ！！」

神出鬼没（後書き）

ワタクシ、加減乗除の『乗』を四時熟語で表すなら。

漠らしく一言で言い切りましょう。

「無法地帯」

理解不能（前書き）

加減乗除 36話。

初の毎日更新失敗。

土下座inディスプレイの前
―除―

理解不能

腕を振り切って図書館を飛び出た。

「1分前だろ？ だったらこの辺に居るんじゃないー」

「あの娘はそんな簡単に見つけられない。逃げている理由は分からないけど、私達が捜している事にはもう気付かれているはず」

メリアはそう言って走り始める。

「私はこっちから捜す！ オギは別方向からお願い」

「わ、分かった」

何だ、アイツ。どうして、こんなしょうもないことにあんな熱血にやっつてんだよ……

思ったが言わずに、俺はメリアとは違う方向に向かって走る。

「って言っても……」

俺は決して方向音痴ではないが、俺にとってはこの学校は迷路みたいなものだ。どこからどう捜しているものか分からない。

……考える。

分からない以上、できることでやるしか方法は無いんだから。

「……なんでオレガノは病棟から逃げ出したんだ？」

独り言。

思考をはじめ。分かるかどうかはこの際関係ない。

何か、重要な事があった。自分よりも大事な何か。

それは恐らく生命に関する事。だって、俺と一緒に入れる奴は根は優しい奴だから。

……ゼロは置いておいて。

ということは、だ。

俺は上を見上げた。

屋上。開放されてはいないが、別に禁止されていない。

夕方になり、太陽が沈み始めている。そして風が激しく吹いている。

「・・・・・・・・ここじゃ告白とかは出来ないな・・・・・・・・っと、関係ないか」

俺は屋上の扉を閉めて、周りを見る。

「あ、居た」

俺は隅っこでうずくまっているオレガノを見た。

「・・・・・・・・オギ」

「何やってんだ？こんなところで」

俺はそう言ってオレガノに近づく。

オレガノは俺の方に振り向いて手のひらを突き出した。

「・・・・・・・・？」

その中には小さな鳥が居た。羽を怪我して飛べなくなっているようだ。

やっぱりか・・・・・・・・。

「コイツが心配だったんだな？」

「・・・・・・・・」

「だからって何も言わず出て行くことは無いだろ」

「・・・・・・・・皆に迷惑掛けるから」

「既に迷惑掛かってるっての！」

オギはそう言ってオレガノの頭を軽くチョップする。

「俺はともかく、アレンにぐらい相談しろよ。こういうときに頼れる奴だぜ？アイツは」

「・・・・・・・・」

「友達なんだからもっと頼っていけて、な？」

俺はオレガノのかおを覗き込むようにして言う。

「・・・・・・・・分かった」

「よし、じゃあ取り敢えずソイツ持っていくか」

そう言っただけ俺達は屋上を後にしようとして――。

頭上に黒い影が現れた。

「・・・・・・・・・・は？」

空には一羽の鳥。

だが大きさは屋上を包み込むほどだ。

「親鳥・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・気のせいかな？アイツ、好戦的に見える」

「アレは、そういう鳥だから・・・・・・・・」

「ココには入って来れないんじゃないかなかったのか？」

「多分、前回の事件の残党・・・・・・・・」

言った後、すぐだった。

鳥が1度羽ばたいた。

風圧が体を押し飛ばそうとしてくる。

・・・・・・・・・・やっぱり俺って呪われてるのかな。

と、言えずじまいだった。

爆弾発言（前書き）

加減乗除、37羽目。

鳥だけに。

―加―

爆弾発言

しかし、鳥は困ったな……。飛行魔法は取得していない。つまり、攻撃が届かない。

オギは普段から持っている短剣を手にながら、目の前で俺達二人にプレッシャーを掛け続けている鳥を見る。

「しかしまあ、逃げるか？」

「……止めておいたほうが良い……」

オレガノは鳥に指を指す。

その鳥は、口から光を発し今にも何かを発射しそうな様子だった。

とうか発射した。

火の息吹は屋上を赤く燃やす。

「そういうことはもっと早く言ってくれ!!」

ぎりぎりのところで後ろに下がり難無きを得る二人。

「まったく、誰でも良いからこの状況を打破できる力を持った奴はいないのか!？」

火の息吹を避けながら叫ぶ。

「……あまり、傷つけないようにしてね。この鳥の親だろうから」

「丸焦げコース一直線だけだな。とうか傷つけさせられないんだよ。……これだけ騒げばあいつ等も気がついてるだろ」

「……多分」

俺達二人にはある確信があった。

「しゃがんで!!」

いきなり女子の声が聞こえると同時に、頭の上をサッカーボール強くらいの火の玉が飛んで行く。

鳥はそれを風圧で打ち消す。

「メリア、やっと来たか」

「大変だったんだから……」

だいぶ走ったのだろうか、息が乱れているメリア。

屋上の騒ぎに気がついて、急いで走ってきたのだ。

「ってことは、もう来てるんだろ!! アレン!!」

「バレていたか」

いきなり屋上にアレンが参上した。

「……アレン」

「君がいなくてこっちはまったく大変だったんだから。というか君は気づいていたんだろう?」

「でも、これは私の責任。頼るわけには——、きゃん」
オレガノが何か言おうとしていたところに、アレンがデコピンをする。

「少しくらい頼ってくれよ。俺はお前のことを頼りにしてるんだから」

「……アレン。ゴメン」

「韻が踏めていて面白いな。じゃあ、やるか。メリア、相手の動きを絞ってくれ」

「分かったわ!!」

メリアはうなずき、呪文詠唱を始める。

「呪文詠唱。火よ、重なり合い炎となれ。……四連!!」

メリアが大きく円を書くように手を振ると、正方形の頂点のところに魔法陣が現れる。

「真ん中よ!!」

その四つの魔法陣から火の玉が出現し、それぞれ四方に飛んで行く。

一つも鳥に当たるようなものではないが、無意識に動きが止まる。

「ありがとう」

それを見計らってアレンが飛ぶ。

「縛鎖…拘束」

いつの間にやら取り出していた長い鎖を鳥に絡みつくようにして縛る。

これで鳥は動きが取れない。

「アレン……」

「分かってる。傷つけないようにだろ？」

子供のように微笑むアレン。

「やっぱり……すごい。アレンは。……呪文詠唱、此のものに掛けられた魔の呪いを呪い師、オレガノ・ルードの名に置いて呪い返す」

そう言い終わった瞬間、鳥の中からなにやらよく分からない呪印のようなものが出てきて、彼方へ飛んで行った。

「K i i ! !」

「K i i ! !」

そうして親子の鳥は二人仲良く並んで飛んだ。

「……これで一段落ね。じゃあ……」

「ちょっと待って。このままハッピーエンドで終わらせないよ」

どこかへ行こうとしたオレガノをアレンが止める。

「……何を」

「君が今から帰る場所は病室だ。分かるね」

「……私はこの通り元気じゃない」

アレンの手を離そうとするオレガノだが、想像以上にアレンの手は強いらしい。

「オレガノ。しかるべき検査を受けてちゃんと療養していないと。任務の後にゴーレムに殴られて、いくら君といえどそのままにいるのはいけない」

「大丈夫だもの。ほら、ぴんぴんしてる」
ブンブンと腕を振るオレガノ。

「ダメ。きちんと病室に連れて行きます」

「や、嫌なの……。注射、やーーーーー!!」

オレガノはアレンに引きずられて屋上を後にした。

「もしかして、注射が嫌で逃げてたんじゃないわよね？」

「俺に聞くな」

屋上に残されたオギとメリアはがつくりとしていた。

爆弾発言（後書き）

最後はちよつとギャグ展開。

長生きのこつ↑気にしないこと。

1話 剛毅木訥仁に近し（前書き）

加減乗除 38話。

第二章 突入

―減―

1話 剛毅木訥仁に近し

オレガノ搜索事件（事件ってほどの事ではなかったけれど）から二週間。

校庭は元通り平坦にならされ、戦士科棟の修復もあらかた終わっていた。

この学院の進級制度は基本的に単位制だ。優秀な生徒が依頼にひっぱりだこになるかららしい。

とはいえ、俺の幼なじみは「依頼は相棒と行く」などというわけのわからないルールを決めているらしいから、例外に当たる。

「はあ……、全く。何が戦士科棟が完全修復するまで、各自依頼を受けて社会に貢献しろ、だ」

遅刻した俺が急いで行ってももう掲示板にはろくな依頼が残ってなかったし。

……遅刻する奴が悪い？ まあそりゃそうだろうけど。

部屋のベランダの手すりにもたれながらそんな事を考えてみる。暇だ……。

夜にベランダで風にあたるのも悪くないな。今度アレンにでも教えてやるか。

あいつ帰ってきたらすぐ寝るし。

「呼んだ？」

「おうわっ!？」

急に声がして横を見ると、アレンが手すりに手を掛け、ひょいとベランダに登ってくるのが見えた。

「ただいま、オギ」

「おかえり。今日は何処に行ってたんだ？」

確か救護科棟にひっぱられていったオレガノからの八つ当たりはそろそろ下火になっていると聞いたが。まだ逃げてるのか？

「いや、その件はもう終わったよ。今日は隠密科棟で授業を受けてきたんだ」

学部ごとに一棟ずつ横長い塔みたいな校舎があるのはありがたい話なんだが、隠密科に必要なのかどうかは意見が別れるところだ。隠れてないし。

まあ一学科だけ扱いが違っているのは考えものだよな。第七学科じゃあるまいし。

「まあね。でも隠密科はそもそも人数が少ないから。広く使えてそこそこ便利だよ」

「それもそうか」

しばらく学院の先生勢の中で誰が一番怖いかを話し合ったり、俺がゼロのことを馬鹿にしたり、アレンの業を見せて貰ったり、俺がゼロのことを毒づいたり、たわいもない雑談をしていたが、ふと思いついたことがあった。

「なあ、アレン」

「なんだい？ゼロさんの悪口かい？そろそろ耳が痛いよ……」

苦笑いするアレン。そんなに酷く罵ったつもりはなかったんだが。

「いや、そうじゃない。アレンとオレガノ、ゴーレムの時に依頼に行ってたって言ってたよな。どんな依頼だったんだ？」

普段一日中部屋を留守して、どんな凄い依頼を受けているのかはよくメリアと疑問にしていた。これはチャンスだぞ。

「ああ、そのことか。そういえばまだ話してなかったよね」
アレンが部屋に入り、自分のベッドに寝転がる。俺は手すりに背をもたれさせ、室内の方を向く。

「あの時の依頼は、オレガノからの直接依頼オーダーだったんだよ」

「オレガノが依頼主だったのか」

どんな依頼だ？ 見当もつかないぞ。

呪いのアイテムでも取りに走らされたのか。お気の毒に。

「うーん。当たらずも遠からずって感じかな」

そう言うと、アレンはベッドから起き上がり、その場で腕を組んだ。

……なんかその姿勢、様になってるな。

「僕が依頼されたのは、ボディーガードだよ。知り合いのところに薬剤を貰いに行くオレガノのね」

そう言った次の瞬間、アレンは俺の隣で夜空を仰いでいた。こういうことはしょっちゅうだから、さすがに驚かないぞ。

……あれ？もしかして回想始まる感じ？

2話 艱難汝を玉にす（前書き）

加減乗除 39話

何書いていいやら

ー乗ー

2話 艱難汝を玉にす

アレンとオレガノは深い森の中にいた。昼下がりの森は薄暗く、何とは無しに不気味なものを感じさせた。

前日の雨に濡れた木々の葉から一滴の露が零れ落ち、アレンの頬で弾かれた。

「……オレガノ。藁人形でも打ちに行くのか？」

「違う……」

アレンにはオレガノに何の依頼をされたかは分かっている。

呪術の道具の調達に行く彼女のボディガード。

分かってはいるが、薄闇の中の大木を見つける度に不安になってしまうのだ。

やがて、森の奥……進んでいる先に光が見えた。

森に入って二時間ぶりに見る日の光だった。

「もうすぐ着く……」目の前にあったブッシュを掻き分けるオレガノ。少しテンションが上がっているように見える。

3話 兵は拙速を貴ぶ（前書き）

加減乗除 40話目。

諺に意味は持たせない。

―除―

3話 兵は拙速を貴ぶ

アロネの森。

光が差し込まないくらいの高さ、掻き分けなければならぬくらいの高さまで木々と葉は伸びている――が。

実は四つんばいになれば、案外邪魔される事もなく突き抜けられるのだ。

なぜならこの森は――。

「着いたよ……」

森を抜けきってから前をみてオレガノは言った。

そのオレガノの横に立って僕も前を見る。

「……」

アロネの森。

別名、ドワーフの森。

ドワーフとは、大酒飲みで手先が器用。鋤夫あるいは細工師、鍛冶屋などの職人であると同時に、斧やハンマーなどを主軸の武器に使う戦士でもある。そして男限定ではあるが、豊かな髭を生やしている等、特徴は幾つもある民族だ。

そして中でも1番有名な点が『人間より小さい』ということだ。
矮わいく躯でありながら、屈強な民族。

そのドワーフたちの通り道であるこのアロネの森は、当然ドワーフたちのサイズを基準に道が作られている。

その道を抜けて視界に広がるのは、そのドワーフたちの住処。

「ここが……ゼミル鉱山……」

視界には高々と1つの鉾山があつた。そしてそこには当然のように幾つも洞窟がありトロツコや様々な道具が置いてあり、また当然のようにドワーフ達が居た。

4話 親しき仲にも礼儀あり（前書き）

今回は分かりやすい諺。

少し文の意味と違いますが。

意味は持たせないで。

—加—

4話 親しき仲にも礼儀あり

「……行くわよ」

オレガノはゼミル高山を前にして迷うことなく一つの洞窟を目指す。

その洞窟の前には『シナモン&サフラン薬剤店』と書かれてある。

「こんなところで薬剤店？」

「……森に囲まれた山だとかこういう店が無いから、ある意味適材適所よ。それにこの薬は、よく効く」

オレガノはどんどん洞窟の中へ入っていく。

僕もそれに続いて中へ。

この洞窟はさっき見た山に開けられたドワーフのものより大きめで、入りやすかった。

洞窟を前に進んでいくと、ドアが現れた。

どうやらここが薬剤店らしい。

「いらっしゃーい、今日は何の——ってオレガノ、久しぶりね
！！」

「……本当に久しぶりね。サフラン」

ドアを開けると、オレガノの前にある女性が出てきた。

どうやらこの人が前の看板に書いてあったサフランさんのようだ。

ドワーフ達の山にしては珍しく人間のようで、活発そうな顔立ちで目は茶色、ショートカットの金髪をゴムで後ろで縛っていた。

どうやらこの人が人間だから、この洞窟も大きめ（人間からしたら少し小さいくらい）なのだろう。

アレンが考えていると、店の向こうのほうからとことこと走ってくる小さな人影があった。

「オレガノちゃん、久しぶりですよっ!!」

その人影は思い切りオレガノに飛びついた。

「……シナモンさんは相変わらず、ですね」

この小さな人がシナモンさんらしい。

茶色の髪にあどけない表情で、元気いっぱいな感じがある。

この人はドワーフだろう。

「そちらの方は誰ですの？」

ギュウと抱きついたままシナモンさんが顔をこちらに向けてきた。

「あ、僕はアレンって言います。オレガノの護衛で来ました」

「なる、オレガノちゃんの彼氏さんですね？」

「なっ!？」

一体いきなりなんて事を言い出したんだこの子は。

「シナモン先生、あんまり思春期の男女をからかうもんじゃありませんよー」

「だってー。二人とも可愛いんですもの」

そういうシナモンさんの顔は、先ほどのようなあどけない顔ではなく、魔女のようなほくそ笑みだった。

「……言っておくけど、シナモンさんがこの中で一番年上だからね」
「そうなのか？」

「ドワーフ族は寿命も長い。シナモンさんは今年で確か123歳だったはずよ」

「123歳!？」

そりゃ凄いな、というか詐欺だ。

「……シナモンさんはここで薬の調合を行って暮らしているの。ゼミルの魔女といえば、それなりに有名よ？」

「どうしてそんな人と知り合いなんだ？」

「……昔に、お世話になった……」

「ほらほらオレガノ。昔話をするのも良いけど、アンタここに用があつてきたんでしょ？」

「……そうだった。シナモンさん、今日はある薬剤について話に來たんです」

サフランさんに促されて、ようやく話の本題に入った。

5話 茶腹も一時（前書き）

わずかなものでも一時の間に合わせになるというたとえ。
だそうです。

―減―

5話 茶腹も一時

いまだアレンをにこやかに見ている二人を少し見て、オレガノが口を開いた。

「……火傷の薬の調合に使う薬剤が、足りなくなったの。分けて貰えない……？」

静かに、要件を述べる。

学院における薬物の扱いには、それぞれの系統学科とは別に、資格を得なければならない。

救護科では、この資格の取得が第一の目標とされるのだが、それはまた別の話だ。

ちなみにオレガノはその資格を入学した時から取得していたらしい。

どこか、そういう技術に特化した家の出らしい。

僕に言えたことではないか、とアレンは肩をすくめた。

「ああ、そんなこと。いいわよ。ちょっとこっちに着いてきてサフランさんがさつと翻して奥に向かう。」

オレガノと、シナモン、そしてアレンもそれに続く。

「ええっと、火傷にはオルグニスの薬だから……、あった」
最後尾にいたアレンは、目の前の光景に驚愕を覚えた。

「うわ、これは凄いですね……」

大きな空間には右を見ても、左を見ても、奥にも、棚。

中には薬剤、薬草、瓶など、色々なものがきちんと整理されているのを見て取れる。

「……これらは、全部、シナモンさんが自分で作ったもののなの」

オレガノが隣で呟いた。

「一人で？」

「そう」

「はあ……すごいな」

振り向いたシナモンさんがえへへ、と照れたように笑う。

「でも、整理整頓はサフランちゃんにやってもらってるんですよ」

二人で成り立つコンビネーション、というわけか。

「……そう。互いが互いを支えあって、このコンビがあるの」

オレガノが同調するように首を縦に振る。

「……、はい、オレガノちゃん。また何かあったら、遠慮しないで言ってちょうだいね」

「はい」

にこにこした笑顔に向けてきたサフランさんに、アレンも笑顔を向けた。

「さあ、帰ろう、オレガノ」

「うん」

6話 晴天の霹靂（前書き）

澄み切った青空からいきなり稲妻がチュドン！！

予想だにできない、いきなりの出来事のこと。

多分。

ー乗ー

6話 晴天の霹靂

帰路へ着こうと振り返った二人。

途端、異変に気づいた。

振り返った先にある筈の、店の玄関がいつの間にもやら消えて無くなっていた。そして風に煽られたのか、岩石や木材が入り込んできっていた。

何時、何故、どうして……？ 呆然とする四人。

洞窟の入り口に向かって四人で走る。入り口のところからは晴天と碧々とした森が覗けた。そこからおそろおそろ外へ出てみる。

何もなかった。辺りに蝶が羽ばたき、その中で働くドワーフ達。その童話のような光景は来た時と同じだ。

しかし、ここでアレンがあることに気付く。

「なんだ……？」

辺りを舞っている蝶達がまるでどこかに吸い寄せられるように飛んでいく。ひらひらと、逆再生される花吹雪のように……。

その先……西の空を見上げた。

すると、途徹も無く巨大な蝶がそこに居た。幻想的な模様をした羽を音も無しに羽ばたかせていた。

そして、その羽が宙を叩く度、ドワーフ達の住居から沢山の木屑が無音で吹っ飛んでいった。

7話 蝶よ花よ（前書き）

加減乗除。

全然意味通して無いね。まあ、この諺、私は好きですよ。

―除―

7話 蝶よ花よ

「あれは．．．．．」

オレガノが呟く。

僕も自らの脳内図書館を検索する。

．．．．．見つけた。

「バルキング．．．．．」

「だね」

オレガノの発言に僕も同調してから、巨大な蝶を見上げた。

周りに居る小さな蝶は、『バル』と呼ばれる殺傷能力の高い蝶だ。そして名前どおり、それらの王とも取れるくらいの指揮能力がある巨大な蝶を『バルキング』と呼ぶ。

バル『キング』と呼ばれるのだから、巨大な蝶は『バル』の雄だ。繁殖されるほとんどの『バル』は雌で、その中で生まれた雄の『バル』と同時に繁殖された雌の『バル』とで、新たに繁殖されていく。雄の生まれる確率は極端に低い、一匹雄が生まれればそれで十分な繁殖能力があるので増殖する。

あまり関係ないような話に思えるが、そうでもない。

あそこにバルキングがいるということは、それに付随するように多くのバルが居るという事だ。

「おかしいわね．．．．．」

と、シナモンさんは突然言った。

「何がですか？」

「確かにあの森．．．．．アロネの森には、バルやバルキングが生息しているわ。ドワーフたちの森だから、木々も高々と伸びていて、あの子たちも隠れやすいでしょうしね」

「たしかに、あの森なら収まりそうですね．．．．．」
僕は奥に見えている森を見た。

ていうか、化物まで『あの子』扱いか．．．．．
「けれどアロネの森にはそこまで荒れ狂うような怪物はいないから、ああしてわざわざドワーフたちの居るところに現れることは無いのよ。それにあの子達の殺傷能力を持つけれど、あれは攻撃を受けた際に防御するための能力だから．．．．．」

「ということは、あの『バル』たちに何かが起きたと．．．．．」
と、落ち着いていると

「シナモン先生！」

と遠くから髭を蓄えた、ドワーフの男性が来た。

どうもシナモン先生という愛称はサフランさんだけではないらしい。

「どうかしましたか？」

「森の怪物たちが、森を抜け出して中央に向かっている！！」

「．．．．．中央！？」

オレガノの表情に焦りが浮かんだ。

その表情を見て僕も気付いた。

「まさか、ササガケですか！？」

「あ、ああ．．．．．」

ドワーフの男性は

ササガケ．．．．．アンモルド大陸の中心に位置している都市。

ここまで言えば分かるだろう。

「僕らの学校が．．．．．聖エンテルミナ学院が危ない！！」

僕らがそう言って焦っているのを知ってか知らずか。

バルキングはそんな僕らを煽るかのように、声とも言えない鳴き声を上げて、風を巻き起こし始めた。

8話 生き馬の目を抜く（前書き）

もう言葉の意味的にはえぐいよね。

加減乗除、45話目。

―加―

8話 生き馬の目を抜く

急がないと、僕達の学校が危ないのに……。

「とにかく、私達としてもあの子達を追い払わないと色々めんどくさそうなのよね」

シナモンさんはいまだ攻撃を続けているバルを見て呟く。

あの子達はバルやバルキングのことか。

「あの量は、僕も頑張らないとね」

腰につけている二振りの小刀を構える。

「じゃあ、オレガノちゃんは呪って動きを遅く。サフランちゃんはいったん戻ってけが人とかに塗りこむ葉の手配をありったけ。私は前線に出ますの」

シナモンさんが手際よく進めていく。

年の功、というやつだろうか。

「アレンちゃんは学科は何ですか？」

……。

ちゃん付けはデフォルメだったのか。

そりゃ満122歳の目線から見ればそうだろうけど。

「隠密師です」

「……アレンは強い。保障する」

すでに魔法の術式をくみ上げてバル達の動きをゆっくりにしているオレガノが、自信を持って言う。

「オレガノちゃんにそこまで言わしめるんだったら、大丈夫そうね。一緒にやるわよ」

「一緒にですか？」

確か今年で123歳じゃ……？

「久しぶりの実戦、腕になるですよ」

ブンブンと腕を振り回すシナモンさん。

「自陣加速」

アレンがそう呟くと、アレンの足元に円状の幾何学的な模様――

――魔法陣が描かれる。

そしてその魔法陣が消えると、アレンの身体がほのかに光っていた。

魔力について詳しく解析し使っていくのは魔術師、治癒師、呪い師だが、別に他の学科で魔力を全く使わないというわけではない。

むしろどの学科でも普通に使われている。

ただ魔術師等とは違って、学科によって相当に際どく使えるもののみを教えてもらうが。

アレンは止まっているバル（正確には非常にスローモーションで動く）を踏み場にして一気にバルキングまで迫る。

そして次の瞬間にはアレンが大きなバルキングをすり抜けたかのように後ろに出る。

「終わり」

アレンが地面に着地と同時に、スパンとバルキングが斜め十字に切り開かれた。

「あらー、私は必要ないですの？
シナモンさんの言葉が響いた。」

9話 臍を噛む（前書き）

46話目になりますかね。

「ほぞをかむ」。諺の意味は、後悔すること。

―減―

9話 臍を噛む

「——と、いうわけさ。後は、二人にお礼を言って、物凄い速さで走るオレガノを追いかけて、ゴレムとの戦闘に入ったわけさ」アレンはそう言うと、眠いのだろうか、あくびをしながら部屋の中へ戻っていく。

「それは大変だったな。お疲れさん」

「今言われてもね……」

俺はベランダで立ったまま、アレンに話しかける。

「しかし、何者だったんだろうな、狐野郎の言ってた……なんだっけ」

「調教師のことかい？」

「ああ、それだ。学院から寝返ったんだろ？ 別に得なことがあるわけでもないのに」

「そんなこと、僕には分からないよ」

「だよなあ……」

学院と暗に敵対している組織なんてもの、片手じゃ数えきれないくらいあるからな。

どんな条件を突き付けられたにせよ、学院を裏切ったとなると、ただでは済まない。

「それほどの覚悟を持たせる何かがあったんだろうね」

アレンが考え込むようにベッドに伏せる。

何が狙いなのか、はたまた気まぐれだったか。

「わからないな、全く」

空を見上げれば、青白く光る星の群れ。

明日には戦士科棟の修理も終了するだろう。

ようやく、いつもの日々が戻ってくるわけだ。

別に俺は戦闘^{バーサーク}狂ではない。ただ、怠惰なだけだ。

「とりあえず、眠ろうか」

「そう、だな……」

俺も自分のベッドに倒れ伏す。

「アレン、風呂は？」

「まだだけど？」

「あ、そう……」

――。

翌日。

俺はいつもの通りに目を覚ました。

アレンはいない、もう出て行ったようだ。

「さて、と……」

顔を洗い、歯を磨き、刃を磨く。

このくらいのことは習慣づけている。さぼったりはしない。

さて、今日はどうしよう。

依頼か、試合か、授業か……。

そう思った時だった。

「オギ！！」

急に部屋のドアが乱暴にこじ開けられた。

その先には、急いで来たのか、制服を乱れさせているメリア。しっかりしろよ。ただでさえお前、可愛い方なんだから。才色兼備の隣にいる俺の身にもなってくれ。

「オギ、大変よ！」

「どうしたんだ？」

またゴーレムでも現れたか、悪運強い学院だな。毎度毎度思っけれど。

「これを見なさい」

そういつてメリアは、一枚の紙を俺の目の前に突き付けた。

「？ どれどれ……」

えーっと、『緊急 情報操作による誤認識のため、学院内の記号表記の情報が間違っているものがあります。以下の情報に誤りがありました。学院側での対処、及びサポートに伴い、正規の情報に基づいた行動をしてください』

「……何？」

「その下、生徒の成績に関する誤情報のところよ！」

なにになに……、俺の名前と、学年、間違っていた情報は……

「た、単位の数字が間違っていたあ!？」

マジか!？　しっかりしてくれよ学院さんよ。

しかも正規の情報だと、俺の単位は足りてない。

「そう。一週間後には単位進級検査があるわ。それまでにその足りてない単位を稼いでおかないと、あなた……落ちるわよ」

「おいおい……」

冗談だろ!？

10話 汝の敵を愛せよ（前書き）

バルキングウウウアア！！！

―乗―

10話 汝の敵を愛せよ

「……メリア……」

「何よ？」

「詠唱魔法で職員室のパソコン焼……」

「駄目。ていうか、やだ。私退学になる」

「そこをなんとか……」

せがんでいた俺の頭をメリアが拳で殴りつける。木魚の様な音がした。痛え。

「頑張りなさいよ」

冷徹な眼差しで俺を見つめるメリア。

「今のまんまじゃ本当に留年確実なんだから……」

「お、おう」

返事はしてみたものの、全く迫が無かった。それはそうさ。

手立てがないのだから。

俺がこの一週間で獲得しなければいけない単位数は生徒平均での四ヶ月分にも及ぶ。とても一週間では埋められない。今更どんなに頑張っても……半月分が限界だろう。

「終わったわね」

うん、終わったな。

11話 焔焔に滅せずんば炎炎を若何せん (前書き)

本当は『焔』は旧字体なのですが。

小さな焔の内に消さなければ、大きな炎を消すことがむずかしくなる。

まあ、そんな話なんですよ。この物語は。

—除—

11話 焔焔に滅せずんば炎炎を若何せん

「・・・・・・・・留年か」

「・・・・・・・・大丈夫よ、オギがどんなにバカでも私は受け入れるつもりだから」

「別にバカだからこうなったんじゃない。機械がバカだった所為だ——そうだよ！機械の所為にすればいいんじゃないのか!？」

「残念だけど、機械も人間が作ったものの一部。校則にもあるけれど、機械でのトラブルは生徒の自己責任よ」

「・・・・・・・・」

「そんな少年、オギ君に朗報だ」

「朗報って何だよ、アレン——え」

見ると、アレンがいつの間にか現れていた。

「うおわ！」

「君が困っているんじゃないかと思ってズバンと参上したよ」

「で、朗報って何なの？」

「うん。依頼を貰ってきた」

そう言って、RCMの依頼受注予約記録表を出した。

その紙には『A』と大きく書かれている。

そのアルファベットはミシヨンのランクを記している。

Dを一番下、Aより上もあるらしいが俺は見たことが無い。

「これは・・・・・・・・」

「オギじゃちまちま任務を行ったところで、無理だろうと判断したから大きな依頼を取り扱おうと思ってね」

「ていうか、Aランクの依頼をよく取って来れたな・・・・・・・・」

「ああ、それは——」

アレンは言い留まって、少し考え始めた。

「どうしたんだよ、アレン」

「……………これは、ゼロさんが取ってきた依頼でね」

「……………何……………!?」

「伝言があるよ。『バカだから単位の稼ぎ方も知らないのか?』だ
そうだ」

アイツ……………!!

ていうかお前はお前で単位だけしか稼いで無いだろうが!!

本当はお前だって留年のはずだろうが!!

心中で沸々とこみ上がる怒りを、依頼をもってきてくれたという
ことで相殺しようと努力する。

「でも、Aランクの依頼でも四ヶ月分の単位を稼げないんじゃない
い?」

唐突にメリアが言った。

「うん、普通は稼げないんだよ。でもこの依頼は長期型だからね」

長期型依頼。

これはどちらかというと、『長期型任務』と呼ばれる。

長期滞在、或いは長期行動を必要とする依頼はどちらかといえば、
モンスター退治ではなく建物の建設などの事を指す。

「……………うーん、それでも四ヶ月分というのは……………」
メリアが相変わらず疑問の声を上げている。
が。

「今更、方法とか理由とか考えている場合じゃないんだよ!それ1
つで終わるならやるしかないだろ!!」

「……………そうね。じゃあ、正式に受注しに行きましょうか」
メリアが言ったのを合図に俺とアレンも移動を始めた。

思えば、あの調教師との戦いから学園と奴らとの戦いは始まっていたのだろうけれど。

もし機械にミスがなければ――或いは、俺がきちんと単位を取っていれば――俺たちがあの戦いに参戦する事もなかったんだろう。

12話 郷に入っては郷に従え（前書き）

なんとなくですが。

加のときだけ諺が簡単な気がします。

難しいのわかんない。

—加—

12話 郷に入っては郷に従え

「でかいな」「でかいね」「ひゅう♪」「……大きい」

俺とメリアとアレンとオレガノはその建物を前にして同じ感想を抱いていた。

目の前には巨大な門。

その奥には噴水のある庭園が見え、更にその向こうに白いお屋敷が見えた。

お屋敷もそれなりに距離を置いてみるはずなのだが、それでも存在感は違う。

高級感というものだろうか、気品というものだろうか。

俺達四人は今、長期型のA級任務のために学園から少しはなれたあるお屋敷の前に立っていた。

未だに任務の内容は極秘。

一体何の仕事を任されるんだろうか。

「普通に豪邸だな」「もう凄いくらい豪邸ね」「驚きなぐらい豪邸だな」「……でっかいお屋敷」

いい加減飽きてきた繰り返しをやめて、とりあえず門をくぐろうとしたときに、アレンが歩を止めた。

「で、いい加減僕達を中に入れて欲しいな」

そして急に何かを言い出した。

アレンを除く俺達3人がポカンとしていると、急に。

背後から。

何も無かった空間から人が現れた。

身長は180cm位の高さで高く、服は黒く布地が腰から膝くらいまで伸びている燕尾服を着ていて、サングラスをかけていた。

「合格だ。この程度の気配に気づけないようでは、警護など不可能だからな」

その人はサングラスをとると前に出て門を開け始めた。目はすらりと細長い目だった。

「試していたんですか？」

アレンは驚いている俺達を尻目に話を進める。

「気分を害したのであれば謝りましょう。ですが、流石に学生に警護を任せるのにはいささか不安がありましたね」

急に口調が先ほどのような威嚇するものではなく、恭しいものになり、それくらいは分かってください、といった風に溜息をつく。

「ところで、一体あなたは？」

あっけにとられていた3人の中で、メリアが謎の人に話しかけた。

「私ですか。私はこのお屋敷で執事、正確には執事長をしているクローバーと申します。気軽にクロウとお呼びください」

非常にお呼びにくい。

「では、お嬢様のお屋敷を案内しましょう」

クロウさんはそういうと門を開け、中へと促した。

13話 宝の持ち腐れ（前書き）

今回は簡単な諺です。

総計五十話目になります。

―減―

13話 宝の持ち腐れ

屋敷の中は外見と同じく、とても広かった。人間が生活するのにこんなに広い空間は必要ないと思う。

前を滑るように、それでいて速く歩くクロウさんに俺達が続く。

しばらく歩き、俺達の目の前にあったのはおよそ俺の身長の二倍はあるであろう巨大な扉だった。

「こちらが、お嬢様のお部屋になります。直接の依頼主はお嬢様です。ので、くわしい依頼内容はお嬢様の御前でお話致します」

クロウさんがその扉を片手で軽く押すと、扉は重さが無いがごとき軽々しきでギイ……と開いた。

もしかするとこの人、万能なのではないのだろうか。

ここまでくる途中の廊下でも一般人がその人生の中では見ることはないであろう使用人であったりメイドさんであったり何人か見かけたが、その人たちは客人の俺達だけでなく、その前を歩くクロウさんにも挨拶をしていた。

……うわあ、絶対この人敵に回したくねえ。

クロウさんに続いて、俺達も部屋に入る。

そこには、大きな円卓でティータイムを過ごしている——ドレスっぽいのを着た——少女が居た。

「こちらが、当屋敷の持ち主にして、私のお仕えする御方、シオン・ヒュウガスラ・アカシアヌルデ様です」

「ど、どうも……」

俺が挨拶をすると、少女はゆっくりとこちらを向き、まず俺を見て、オレガノを見て、アレンを見て、メリアを見た。

そして、急にぱあっと笑顔になった。何故だ。

「アルメリア!!」

そして俺の幼馴染の名前を呼びながら立ち上がった。何故だ。

そして、こちらに駆けよってきた。

「アルメリア! アルメリア・フェアリ・エーデルワイスじゃない!
久しぶりね!」

「め、メリア……」

俺は横を向いて幼馴染の反応を確認する。

と、

「シオン!! やっぱりね、依頼を見たときにそうじゃないかと思
っていたのよ。でもまさか、あなた私有の屋敷に来ることになると
はね」

俺の秀才なる幼馴染は、笑っていらっしゃった。

……ここまでのやり取りでもうおわかりだろう。

この屋敷の主人、シオンさんは俺の幼馴染、アルメリアの友人だった。

——アレンの持ってきた依頼は、ある屋敷を数日間警備することだった。

それがとてつもないお金持ちの家系の人が持つ屋敷のうちの一つらしく、報酬、すなわち習得単位の量も多いのだった。

定員は五人。四人以上と追記してあったため、とりあえず俺の身近でさっさと集まってかつ俺に協力してくれそうな人を集めた結果、この編成になったのである。

14話 触らぬ神に祟り無し（前書き）

―乗―

14話 触らぬ神に祟り無し

だが……何故この屋敷の警護の依頼を出したのかは解らない……

「……クロバーさん」と、メリアが切り出した。

「クロウでいい」

「んじゃ……クロウ……さん？」首を傾ぐ。

「何だね？」

「何故……あなた方は警護の依頼を出されたのですか？」

「……普段、屋敷の警護は私の役目なのだが……少し野暮用が入ったのだ」

「それはどういう……」

「……察せ」

咳払いを一つした。クロウの眼孔がメリアの言及を阻んだ。氷の様に冷たく、猛禽の様に鋭い眼差しだった。その眼力に圧されたメリアは半歩退いた。彼女の目はおびえていた。頭上のシャンデリアが開いた窓からの風で不気味に揺らいた。

「……何かあるな……」アレンがひそりと俺に呟いた。勿論、クロウやシオンに聞こえぬように。

俺は心の中で、頷いた。

15話 明日は明日の風が吹く（前書き）

意味不明。

もういいや。

―除―

15話 明日は明日の風が吹く

少し前に時間軸を戻すでしょう。

聖エンテルミナ学院内。

正式に依頼を受注するために俺達は掲示板のところへ立った。

で。

目の前に3人の男達が現れた。

「何・・・・・・・・・・ですか」

思わず敬語。

それくらい威圧感を持っていた。

威圧感・・・・・・・・それは自信や功績に見合っている『何か』であることは確かだった。

「あー・・・・・・・・」

背後から1人の男が現れた。

「えっと、どうも発注ミスらしくてなー。Aランク任務には置けないんだよ」

そう言ったのは、教師科のゴルゼキアだった。

確か、この間の事件の時にゼロを助けた・・・・・・・・先生だったはず。

「どういうことですか？」

とメリアは尋ねた。

が、本心では分かっているはずだ。

教師科のような上級戦士がここに居るということは、他の2人も同様の力を持っているに違いない。

そして、俺達を止めなければならぬくらいの危険な任務である

ことはまず間違いない……。

「いや、だから発注ミスなんだよ。悪いな」

そう言ってゴルゼキアは俺達の持っていた受注予約の紙を奪い去った。

「待ってください」

そう言ったアレンは、取られたその紙を取り返して立っていた。

「これは予約ですよ？僕らが先にとった依頼です。受注ミスでもそれはもう効力を発揮しないのでは？」

「……先生の物を奪い去るってのは、あんまりいい子とはいえないけどな」

もう1人の男が、小さな拳銃をアレンのこめかみに当てた。

「……学院内での武器の使用は固く禁じられています。教師科の者も科に属する以上『生徒』ですから」

そう言ったのは、アレンでもオレガノでもなかった。

当然、俺でもなかった。

居たのはどこからともなく現れたオレガノだった。

珍しく、立て板に水で言葉を口から紡いでいた。

「……」

銃を持っていた男は静かに放すと、話をゴルゼキアに預けるように下がった。

「でもよー、分かってるだろ？こうやって俺達が現れたってことは、お前らに任せられるような依頼じゃないんだよなー。受注ミスは仕方ないんだから、そのまま受け入れてくれないか？」

そう言ってゴルゼキアは笑った。

「……受注ミスって言うのは、もしかして機械の故障の所為か？」

俺は敬語をやめて、ゴルゼキアに訊いた。

「ああ。よくわかってんじゃない。だったら――」

「だったら俺達を取りやめることは出来ないな」

そう言っ て俺は笑った。

「……………説明してもらおうか？」

「俺がここに居るのは、その機械の故障によって単位が足りていないから、その長期依頼を受けなくちゃならないんだ」

「それは残念だったとしかいいようがないぜ？」

「いや。ある」

そう言っ てアレンがニヤリと笑った。俺の意図が分かったのだらう。

「校則では、機械でのトラブルは生徒の自己責任という校則がある。そしてこの校則は生徒に適用される。教師科の者も『生徒』である、ということに関しては、先ほど否定されなかったので、この校則はそのままあなた方に適用される……………」

「……………なるほどな……………」

ゴルゼキアは苦笑を浮かべる。

「この依頼の処理は？」

「……………仕方が無いな」

そう言っ てゴルゼキアはこう続けた。

「お前の単位は何とかしてやる。だから、その依頼はお前らの受注を禁止する」

「!!」

言い負かされて諦めるのが普通だが、ゴルゼキアはそう提案してきたのだ。

「何とかっ て……………」

「いいからよこせ。絶対進級はさせてやる」

強い威圧感で、ゴルゼキアは迫って来る。

何なら殺してやろうか、とでも言っ てきそうだ。

「そこまでにしておこうか」

突然、1人の青年が現れた。年齢的には多分、ゼロと同じくらい。
「・・・・・・・・!!」

ゴルゼキアと周りの男達は顔を変えた。

「心配しなくても大丈夫だよ。次席のアルメリア・フェアリ・エーデルワイス、呪術科きつての秀才のオレガノ・ルード、隠密師として育てられてきたアレキサンドリア・ノーゼが居るんだ。大丈夫さ」
そう言って青年はゴルゼキアたちの方を触った。

「ああ、そうそう。オギ、だっけかな？」

青年はさらにそう続ける。よく分からないが、俺は基本的には有名でも何でもないらしい。

「君がいるならこの任務は簡単さ。そう信じているよ」

そう言っつて青年は去っていった。

「・・・・・・・・くっそ!」

珍しくゴルゼキアは表情を強張らせてから、青年の後を追っていた。

あの青年も教師科の恐らく上の方の男なのだろう。

「何だったんだ？」

「よく分からないけど、助かったって感じね」

「運が良かったね」

「・・・・・・・・ところで、これは何なの・・・・・・・・?」

4人で小さな会話をしてから俺達はそのまま呆然としていた。

しかし・・・・・・・・。

ゴルゼキアがああまでして、俺たちを止めようとしたこの依頼・・・・・・・・。

一体、どういふものなんだろう・・・・・・・・。

16話 過ちては則ち改むるに憚る事勿れ(前書き)

こじせーごです。

通算53話。

意外に頑張ってます。

感想もお待ちしてたりします。

—加—

16話 過ちては則ち改むるに憚る事勿れ

さて、時間を戻そう。

今俺達はクロウさんに警備についての話を聞いていた。

仕事の話、ということでアルメリアの友人であるところのシオンさんも落ち着いて静かにしている。

「今回あなた方にしていただきたい仕事は警備です。そこまでは伝わっていますね？」

確かにそう聞いた。

「では、こちらに着いて来て下さい」

そういうとクロウさんは俺達を連れて通路の一番奥の部屋に来た。その部屋はある一点を除けばまったく普通の部屋だった。

ある一点。

鉛色で重厚そうな巨大な金庫を除けば。

「この中には、とある宝石が入っております。皆さんには、この宝石を警護していただきたいのです」

「宝石……、ですか？」

聞いたのはメリアだった。

「ええ。世の中でも類を見ない黒く輝くクリスタルです。私もこの扉が開けられたところを見たことが無いので詳しくは分かりませんが、相当に美しいようです」

そう語るクロウさんの声は少し熱っぽかった気がする。

……そりゃ見たことも無いすごい綺麗な宝石を語るならそうなるか。

「で、その宝石をクロウがいない数日警備して欲しいって訳。分かった？　メリア」

シオンさんはどうやら久しぶりにあった幼馴染と早く喋りたくてうずうずしていたようだ。

「ええ。分かったけれど、こういうお屋敷の警備ってのはクロウさんがいなくてもそれなりに整っているはずよ？　それに、私達だって始めて聞いた宝石なんかをクロウさんがいないときに狙ってくるような人がいるのかしら？」

メリアが腑に落ちない点を上げる。

言われてみれば納得だが、こんなことに気がつけるメリアは、やっぱり頭の出来が違うんだと思う。

「もちろん、この屋敷の警備は整っています。最終防衛ラインが私というだけです。それにこの金庫もただの金庫じゃなく、ある程度の魔法であれば消去できる高度な魔法陣が組み込まれておりますしね」

クロウさんがメリアの質問に答える。

やっぱりクロウさんが最終防衛ラインではあるんだな。

だが、クロウさんはその後ですが、と続けた。

「ですが、どうやらよくない噂を耳にしたのです。『この屋敷にある黒水晶が何者かに狙われている』というものです。先ほどメリアさんが言った様に、黒水晶のことはあまり公言されてないのにもかかわらず」

「私も野暮用とは言いしましたが、外れられる用事という訳でもありません。という訳で、あなた方を雇わせてもらった、というわけです。本来この屋敷を守り、お嬢様が安全に暮らしていただけるように全力を尽くさなければならぬはずの執事、それも執事長がこのようなタイミングで外に出てしまうこと、お許しください」

クロウさんはシオンさんに片膝をつき深々と頭を下げる。

「何度も聞いたから大丈夫よ。頭を上げて。それに、私の幼馴染も来てくれたしね」

シオンさんは笑顔でメリアに手を振った。

17話 渴して井を穿つ（前書き）

総計54話目です。

諺の意味は、必要に迫られてから慌てても間に合わないことのとえ。

また、時機を失することのたとえ。
だ、そうです。

―減―

17話 渴して井を穿つ

ふむ。要するに、この部屋にある金庫、シオン嬢、総じて言えば、この屋敷を守ればいいわけだ。

「そうね」

メリアが返答する。

「だがメリア、俺達は何してりゃ良いんだ？ 門の前は玄関の前でしかめっ面で立って立っていいのいいのか？」

「そこまでしていただく必要はありません」

クロウさんが即座に答えた。

「あなた方は基本的に屋敷の中や庭を歩きまわって頂いていけば結構です。見回り……パトロールのようなものでしょうか。自分の部屋に籠っている以外は、日中はそれで構いません」

地獄耳か。結構小声だったんだが。

「夜はどうすればいいんですか？」

今度はアレンが口を開いた。

「夜は……そうですね。できれば、なのですが……」

そこでクロウさんはいったん話を切り、こちらに小声で囁いた。

「お暇がございましたら、お嬢様のお話相手になっていただければいいのですが。ああ見えてお嬢様は大変寂しがり屋でして……」

「クロウ!!」

シオンさんが怒ったのだろうか、顔を真っ赤にして立ちあがった。

クロウさんがおやおや……とでも言いたげに肩をすくめると、

「では、私はこれから屋敷を留守にしますので、今日はご自分の部

屋でお休みください」

流れるような動作で部屋を出て行った。

―――――屋敷、三階客室03

俺に割り当てられてのは三階の角部屋であるこの部屋だった。

一人に突き部屋が一つ。シャワールームあり。キングサイズベッドあり。ソファあり。部屋の片隅には有名な書物を収めたタンスほどの大きさの書棚まである。

まさに至れり尽くせりだ。こんな豪勢な部屋泊まったことないぜ。……メリアの自宅？ ああ、確かメリアの御家のエーデルワイス家もなかなかの地位にある一家なんだったか。だが、俺は一度もメリアの家に行ったことは無い。というか話を聞いたところで行く気が失せた。

まあ、それについて今思い出す必要はないだろう。

だがしかし、気になるのはクロウさんの言っていた『この屋敷にある黒水晶が何者かに狙われている』という情報だ。対魔法用の自動警備まであるのにわざわざ学院の生徒に依頼を出すということは、その黒いクリスタルがいかに重要なものであるかの明らかな証明でもある。

それに、Aクラスの依頼を受けられるレベルの生徒が着ているとは言え、いくらなんでも詳細を話しすぎなのではないだろうか。

そもそもクロウさんの話だと、黒水晶の情報を基本的には外部に漏らしていないらしいし。確かに、守るものが何なのかがはっきりしている方が俺達も動きやすいはずだが、でもそんなに簡単に口外していいものなのだろうか……。

メリアがいたからか？ 御家同士の繋がりがあるなら顔ぐらいは見知っているだろうし。

考え過ぎか……？ だといいのだが。

そう考えた時、部屋のドアがノックされる音が聞こえた。
誰だろうか。アレンか？　そういえば誰がどこを警備するのかと
か決めてなかったな。

などと考えながらドアを開くと、そこにはメイドさんが二人立っ
ていた。一人はボブカット、もう一人は肩まで髪を下げている。

「オギ様ですね？」

「は、はい……」

おお、なん見事なハモリ具合だ。

「お嬢様が」

「あなたとお話がしたいと仰っています」

「来てくださいますよね？」

「は、はあ……」

「よかった！」

なんだこのメイドさん二人組。双子には見えないが。

「ではではっ」

「ご案内いたします。私たちについてきてください」

そう言うと、二人は振り向いて、廊下をすーっと歩き出した。

メイドさん専用歩行法でもあるのだろうか。音を立てないような。

目測五階建ての屋敷は、予想通り、五階までしか階がなかった。
そして、五階の廊下のつき当たりには、数時間前に見たシオン嬢
の寝室のドアよりも大きい、木製の扉がそびえていた。

語弊ではない。文字通り、そびえていた。でかすぎるだろ。

「ここは天井が吹き抜けになっておりまして」

「今日のように天気の良い夜には、星空を楽しみながらお茶ができ
ちやうのですよっ」

へえ、珍しいな。

「きれいなんですか？」

「それはもう！」

メイドさんが二人で扉に手をかけ、重そうなそれをさっと開ける。見た目ほど重くはないらしいな。

「でははっ」

「私たちはこれで失礼いたします」

「はあ、どうも……」

温度差のある二人のメイドさんは、俺が部屋に入ったのを確認すると、開けた時と同じようにさっと扉を閉めた。

部屋は俗に言う室内庭園のようになっていた。

おそらく五階のフロアのほとんどを使っているのだろう。低木や良い香りのする花、少し先には小さな川まである。どうなってんだよ。

しばらく歩いていると、前方に少し広い空間が空いていた。

円状に芝生が生えているその空間には、白いテーブルに、彫刻の施された白い椅子が二つ。

椅子の片方には、ローブを着たシオンさんが、グラスにブランデーを注いでいた。

「どうしました？」

歩いてくる俺に気付いたらしい、シオンさんがこちらに微笑んでいた。

「いや、何でもありません」

しかし一応同年齢なんだよな。なんでさん付けで呼んでんだよ俺。「ふふ。いいですよ、普通にお話になって」

見れば、シオンさんの向かいには同じようにグラスが置かれていた。どうやら俺の分らしいな。

促され、白い椅子に腰かける。

「ごめんなさい、こんな夜中に呼び出したりして」

「何で俺を呼んだんですか？ おしゃべりならメリアの方が適任でしょう。幼馴染なんですし」

「敬語じゃなくていいですよ？」

シオンさんが困ったように言う。言い換えよう気をつけよう。

「確かにメリアを呼んだ方が良かったかもしれませんが。でも、私はあなたに、あなたとメリアのお話を聞きたいんです」

「それはまた、どうして？」

「だって、メリアとは9歳の時に御家同士のパーティーで会ってからもしばらく連絡を取り合っていたんですけれど、メリアったら、あなたの話ばかりするんですもの。一度、あなたがどういう人なのか知っておきたかったんです」

「今なんと？」

……メリアの奴。俺の話を周囲にばらまくなよ。聞いたところによれば、お前のせいでエーデルワイス家での俺の株は尋常じゃない位に高いらしいじゃないか。ますます行く気が失せるわ。

「でも、話している時のメリアの声はとても楽しそうでしたよ」

「そうですかそりゃどうも」

「怒りました？」

「いや、別に。それより、えーと、メリアと俺の話……だったっけ」

「はい」
確かに付き合いは長いが、それほどたくさんの出来事があったわけじゃないぞ。

ただ、グリフォスに襲われたり竜に追われたり崖から落ちたり、小さい頃メリアに「火炎」の誤射で焼かれかけたりメリアが木から

下りられなくなったりくらいのことならあったが。

「それが聞きたいんですよ！」

目が光ってますよシオンさん。

「……じゃあ、あれですね。俺とメリアが初めて会った時のことで
すけれど……」

「……という訳で、その時俺はメリアにそう言ってやったんですよ
！」

「あはははは！ それは聞いたこと無かったです！」

いつの間にか思い出話はメリアの恥ずかしい話暴露大会になっていた。
いた。

お互いに共通の話題であり、最も白熱する話題でもある。

結局、俺達の大暴露大会は吹き抜けの天井から朝日が差し込み始めるまで続き、メリアが突進乱入したところでようやく終焉を迎えたのである。

18話 知恵は小出しにせよ（前書き）

55話目です。ハイ。

―乗―

18話 知恵は小出しにせよ

「……思い出話っていいものね」

「……ああ……ああ!？」

シオンの声と明らかに違う声がしたのでその方を向いてみると、噂のメリアさんがそこにいらっしやっていた。口調はいつもと変わりはないが、身に纏っているオーラが明らかに違う。顔は笑顔だが、眉間に血管が浮き出ているのが見えた。

死を確信した。

……いや、まだだ。

こっちにはシオンさんがいらっしやる!!

よし、今から何とか話を……。

しかし向き直ると、そこにはシオンの姿はなかった。忽然と消えていた。ふと見てみると、庭園の向こうに、逃げ去る彼女の姿があった。

逃げ足早つつつ!!!!

そうして俺は、メリアの凄絶なる説教と暴力の餌食となりましたとき。

19話 籠が外れる（前書き）

殺戮したい。

―除―

19話 籠が外れる

警護任務…事実上、2日目。

メリアの説教で疲れていたのだろう、俺はあの後すぐに眠っていた。

起きたのは、まあまあ早朝だったと思う。

外から威勢のよい声が聞こえて、服を着替えた後に外へ出た。

「う……………」

案外寒い。

早朝だけあって、空気は凍っているような印象を受ける。

大陸内だけでも当然気候の変化はあるのだろう。学院より圧倒的に寒い。

「……………」

で、だ。

威勢のいい声の正体は、数人の兵士達だった。

剣や槍を持ち、朝から特訓に励んでいるようだった。

俺はそれを木の下から見ている。

「……………見たところ、お屋敷というよりは城って感じだな」

「そうだねえ……………。どうも、兵士以外にも戦闘要員は居るらしいし」

突然、横から声が聞こえたので振り向いてみると――。

「……………」

アレンが太い木の枝に膝を引っ掛けて上半身は下ろした状態で逆さ吊りになっていた。

俺の顔の丁度真横に、アレンの顔（逆ver）があった。

「何やってんの」

「隠密師としての特訓はしばらくできそうにもないからね。こうして、最低限の隠密行動さ」

「俺を驚かせることが、か？」

「いやいや。隠密師の基本は『情報収集』だ。人殺しよりはそっちが専門なのさ」

そう言ってアレンは膝を枝から外して、くるりと1回転してから着地した。

「この屋敷の今は亡き主、シオンさんの祖父『ハイド・ヒュウガスラ・アカシアヌルデ』は、軍隊の人間だったらしくてね。ここも昔は戦争の最前線に赴くものたちの拠点として利用されていた……。あの兵士たちはその名残で、他にも僕らの学院やその他の学院の卒業生である魔術師もいるみたいだね」

「へえ……。それを1日で調べたのか？」

「当然……。ああ、それで一応言っておくと、ここを取り仕切っているのは執事長のクロウさんと、メイド長のアマリスさん……通称、マリーさんだそうだ」

「ということは、何かあったときはマリーさんのところへ行けばいいんだな」

「何かあること自体が、最悪だけれどね——おっと」

アレンがそう言ったと思うと、いつの間にか消えていた。

「なあ」

突然、声を掛けられた。

目の前には俺よりも巨体で年上だろうと推測される、兵士が1人。

「お前が警護を頼まれた、名門学院の生徒だな」

目を見る。

「……。そうです」

俺を見下した目。

そんな目をした相手でも、『まずは』敬語だ。

「見たところ、剣士らしいが……」
「……」

「どうだ？一戦勝負しないか？」

既に勝ち誇ったような目。

後ろでは、数人がニヤついて見ている。

アウェイ感が漂っている。

「遠慮します。元軍隊の兵士と戦って勝てるほど、俺は強くはありませんから」

俺はそう言って、その場を去ろうとした。
限界だ。

これが、俺の最大限の礼儀だ。

「逃げるのか？」

はい、来たー。凄く分かりやすい挑発。
で。

「……」

「学院の剣士がこんなじゃ、他の奴らもたかが知れてるな。さっき、男も1人逃げ出したようだし」

アレンの事か。

まあ、アレンは面倒ごとから逃げただけだから、それとは違うだろうけれど。

じゃ、ないんだな。

俺の中の怒りは。

「おい」

俺は言った。

「俺のことはともかく、俺の友達をバカにするな」

「お、やる気になったか？」

男はそう言ってニヤリと笑う。

客観的に見ても、俺は単純だったろう。でもなあ……。俺の目にはこの男はもう『まじ的』にしか見えてないんだよ。

「やってやる。但し、俺が勝ったら謝れよ」

20話 売り言葉に買い言葉（前書き）

高校生クイズに油断しました。
時間も忘れてはらはらして観てました。

ごめんなさい。

—加—

20話 売り言葉に買い言葉

と、かっとなつていつてしまったけれど。

しょうがないよね。

「威勢が良いなあ！！ よっしゃ、お前が勝ったら謝って土下座して逆立ちでこの屋敷を一周してやるぜ！！」

心底馬鹿にしたような目で俺を見る。

「ハハッ、気前良過ぎだろコマクサさんよお」

「じゃあ俺はコマクサさんに5メルツ」

「俺もコマクサさんに9メルツだな！！」

「おいおい、賭けになるわけ無いだろ？ こんなひよろっちいのがコマクサさんに勝てるわけが無いだろうがあ」

取り巻きの男が次々と囃^{はや}し立てる。

コマクサ、というのが目の前の男だろうか。

ちなみにメルツというのはこの国のお金の単位。

つまり、この一戦をネタにこいつらは賭けをしているのだ。

「なら、俺はその少年に50メルツ」

その声は、取り巻きの後ろから聞こえてきた。

歩いてくるその姿を見て、取り巻きの者達の背筋が伸びる。

白い髪に明るそうな目、とても背筋を伸ばすような相手ではなさそうに見えた。

「だ、団長……。これは、力試しという決闘で……」
コマクサが小さくなっている。

「どうした？ 賭けにならないから、そっちの少年に賭けてやったんだぞ？ さっさとやらねえか」

団長と呼ばれている男はどうかやら決闘推進派のようらしい。

「は、はい！！」

コマクサも良い返事を返す。

「じゃ、お前ら適当に賭けてな。俺は50メルツをこの少年だ。後、ついでだから決闘の審判もしてやる」

団長は俺とコマクサの間に入り込むと、両手を広げて俺達二人を少し下がらせた。

「俺はそこの少年に賭けちゃいるが、審判に狂いなんて出すつもりは無い。それは、お前達が証人になってくれ」

団長は取り巻きを見る。

「は、はい！！ もちろんでさあ！！」

いかにもこびへつらってそうな口調の男が一人大声で答えた。

「じゃあ、ルールを説明する。場所はこの練習場。くれぐれも機材や床を壊さぬように。時間はそうだな、十分だ。決着はどちらかがギブアップするか気絶するか。相手を殺すような攻撃、魔法は厳禁。いいな」

「おうよ！！」

「ああ、続けてくれ」

早くこの男を倒したい。

「コマクサが負けたときは謝って土下座して逆立ちでこの屋敷を一周する。少年、負けたときはどうする？」

「今までの無礼をわびてここから出て行けば良いのか？　もう、そんなんでいいだろ」

さっさと始めろ。

俺は、

俺は、

こういう奴らが。

昔から大っ嫌いなんだよ！！！！

「ハッハッハア！！　ほえずらかいても知らねえからなあ！！」

「コマクサ。黙れ、少年、一つアドバイスだが」

団長はこちらを向いて話す。

「今の少年の目は曇っているぞ？」

「だったらどうなるんですか？」

「うんにゃあ、別に？　一応言っておくけど、コマクサは副団長だからね？」

「だから、それを話して俺に何の得があるんですか？　というか、アドバイスが一つじゃありません」

「だな。よーし、始めるかー！！」

団長は元の場所に戻り、右手を下ろす。

「3，2，1，始め！！」

そして団長は思い切り右手を振り上げた。

「名門学園の生徒だからって、いい気になってんじゃねえ！！」

コマクサは俺に突進するようにしながら、剣を振り上げてくる。

剣は騎士が持つような太く両刃になっている。

構えは流石にこういうところを警備するだけはある、よく様になつていた。

だが、かわせない訳じゃない。

オギは前に進みながらぎりぎりのところで左に避ける。

すると、後ろで何かが爆裂したような音が響く。

コマクサが振り下ろした剣の威力で、庭の地面が抉^{えぐ}れていたのだ。

「まったく、威力だけは馬鹿でかいな」

オギは前に出ながらコマクサの腹に右手を当てる。

その瞬間、手を当てた場所から魔法陣が現れる。

「手前、何しやがった！！」

コマクサはすばやいバックステップで下がると、またオギに向かって剣を振り下ろす。

「うっせえ黙れ」

オギは持っていた短剣をその両刃に当てる。

「へし折れ————、ない？」

コマクサが両手で振り下ろした一撃を、オギは右手の短剣で止めていた。

「俺を本気にさせたな？」

左手を握り締める。

「魔法を解放^{open}」

オギがそう言った瞬間、またコマクサの腹部に魔法陣が現れる。

そこ目掛けて、オギは殴る。

その一撃で、コマクサが数メートルも吹っ飛んだ。

「なっ!？」

取り巻きもそれには仰天している。

「やれやれだな、まったく」

団長はふう、と溜息をつく。

「——勝者、少年、敗者はコマクサだな」

「ちょ、ちよつとまで!! 俺はまだ負けて——」

「頭を冷やして」

団長はその瞬間。

吹っ飛ばされながらも頭に血が上り走ってきたコマクサの頭を掴み。

「考えろお!!!」

綺麗な弧を描いてその掴んだ顔面を庭に叩き付けた。

「えーーーーー!!!」

さっきの怒りが彼方に吹っ飛ぶくらいびっくりした。

「俺はルールにちゃんと言っただろ？ 床を壊すなってな。何だこれ？ お前の剣で床の地面が抉れただろうが」

明らかに団長が地面に叩きつけてへこました一撃のほうに傷が大きいんですが!?

「ほら、お前ら。勝負はついたぞ」

団長は取り巻きのほうを向いて手を出す。

「い、一体なんですか……?」

その動作の意味が分からない。

「俺はこの少年に50メルツも賭けてたんだぜ？ さっさと金を出せ」

そのときの団長はとても凶悪な笑みを浮かべていた。

その後団長が俺と話がしたいと言ってきた。

断る理由も無いので、庭園にあるベンチで座って剣の素振りをしている兵士を見ながら話していた。

「ところで、団長さん。お名前は？」

「俺？ ああ、俺はキヨウチクトウ、長いから下の奴らは団長つてるがな。ところで、俺も聞きたいことがあるんだが、あの魔法は、一介の兵士、戦士科の者がやすやすと使えるようなものじゃないと思うんだが？」

「……今は、あれくらいも頑張つて覚えるんですよ。戦闘用の魔法は戦士科ではそれなりに覚えるんですよ、キヨウチクトウさん」
「キヨウさんで構わんよ。しかし今の言葉、間はなんだ？」

キヨウさんの目が鋭く光る。

その目は、深い闇を湛えていた。

「間、何のことですか……？」

「……、俺、いやここにいる兵士はな、元々ごろつきの傭兵くずれみたいな奴等なんだよ。だから、少年みたいな名門学院の出なんて奴は気に食わないって奴も多い。そんな俺らをクロウさんは雇ってくれたんだから、あの人は本当にいい人だ。それはさておき、俺はそういう見で、色々少年なんかよりも経験と修羅場をくぐってきたわけだ」

目は笑わない、真剣そのものだ。

「だからさ、そういうの。何か隠してるってのは分かるんだよ。まあ。空気とか声の震えとかな。だが、俺もお前のそういう気持ちも分かる。言いたくないことなんだろ？ ならこれ以上詮索はしないさ」

そこでようやくキヨウさんは目から笑ったいい笑顔になる。

どうやらこの屋敷には油断ならない人が多い。

「そういうことが分かったから、あの時は俺に賭けたんですか？」
「そうなるな。お前のオーラはとても普通の学生には見えなかったからな。面白そうだったし」

最後の一言に本音がまぎれたな。

「良いじゃねえか。win-winの法則ってやつさ。ま、話してみて分かったけどお前やっぱ面白いわ」

今の会話のどこに俺のオモシロ部分を発見したんだろうか。

「俺にまた話を聞きたくなったら近くにいるメイドちゃんとかに聞くんだな。じゃあな!!」

そこでキョウさんは立ち上がり、兵士達の元へ向かった。

「コマクサ!! さっさと始めねえか!!」

???

何か嫌な予感がする。

「団長? 一体何の話だ?」

「謝って土下座して逆立ちでこの屋敷を一周して見せろつつてんだよ!! さっさとしろ!!」

そういえばそんな約束してた。
すっかり忘れてたけど。

「本気でするんですか?」

「さっさと謝れや!!」

団長はまた頭を掴んでコマクサの頭を床に叩き付けた。

「少年、これでいいかい？」

すいません、そこまでは望んでませんでした。

21話 一斑を見て全豹を卜す（前書き）

諺の意味は、一を聞いて十を知ると一緒です。

あー、腹痛い。

ー減ー

21話 一斑を見て全豹を卜す

結局、哀れ、逆立ちなんとかをやらされてしまっているコマクサを軽く見捨ててキヨウさんと挨拶を交わし、そう言えば朝に説教ついでにメリアに教えられていた俺の巡回地点である一階を歩くことに俺は専念していた。

しかしこの使用人たちは無茶苦茶律儀な人ばかりだな。
すれ違えば挨拶。

誰かは常に掃除をしている。

みんな優しい。

徹底してるな、全く。逆にそろそろ俺の方が辛くなってきたくらいだから、相当なものだ。

――――――夜。

いやはや、何も起こらない（朝の決闘？ あれは除く）一日というものは総じて時間の流れが遅いもので、結局部屋の本棚にあった有名な剣士の著作を読んでいたら、すっかり外は真っ暗になってしまっていた。

夕食も済ませたし、風呂……は今女子が使っているな。

アレンは……居ない。庭園にでも行ってるのか。

暇だなあ……。散歩するか。

意味も無く鼻歌を歌いながら、俺は自室を出た。

――――――同刻、庭園内。

アレンはオギと同じように暇を持て余していた。

……しかし、何で僕は庭園担当なんだろう……。

メリア曰く、「アレンはあれね、外が良いわ。木とかに登ってて」らしい。なんて曖昧な。

僕のキャラは一体周囲にどういう風に思われているのだろうか。

まあ、現に僕は木の上でのんびり夜の帳を楽しんでるんだけど。そういう意味では、やはりメリアは人を見る目があるのだろう。僕には真似できないな。

しかしオレガノは今頃どうしているのだろう。オギが緊急招集するからほとんど無理やり連れてきてしまったのだが、まあ、大丈夫だろう。今頃本でも読んでるはずだ。

そう思っていた時、視界の端で何かが揺らいた。

「……？」

なんだろう、動物か？

暗いところでも目は効く方だから見えることには見えるけれど……なんだあれ。

真っ黒だな。何体か居るみたいだ。

二足歩行しているな。

手には……なんだ？ 杖みたいなのと……。

「剣……！？」

人間だ！

就寝モードに入っていた頭が急に回転を始める。

わざわざ黒い服を着ているってことは、カモフラージュのつもりなのだろう。

昨日一通り屋敷の人々は確認したが、こんな奇妙な格好の人々は居なかった。

ということは……！

木から木に飛び移り、集団の上空の枝に静かに着地する。

……………。

「……あれが今回の目標か」
ターゲット

「間違いない。あそこの四階の突き当たりの大部屋、そこがクリスタルの隠し場所だ」

クリスタル……！？

先日クロウさんが言っていた言葉が頭をよぎる。

不味い事になった。噂は本当だったのか……！

とりあえず落ち着いて、相手を観察する。

全員で十二人。少数精鋭で来ている辺り、プロだな。

僕一人で止められるだろうか……。

集団はゆっくりと屋敷の方に歩みを進めていく。

半々くらいで魔術師と剣士がいるな。

まずは連絡をしなければ……音は……仕方ない。

口に手を当て、軽く口笛を吹く。

「ん？　なんだ？　今音がしなかったか？」
くそっ。

だが、僕の存在までは気付かれていないようだ。

しばらくして、夜空から一羽の黒い鳥が腕に舞い降りてきた。

隠密師が連絡用に飼う低レベルの魔鳥、タナトス。

闇にまぎれて文書の配達や情報の経由をすることができ、これを扱えるようになってようやく隠密師としての第一段階をクリアできるのだ。

「タナトス、オレガノにこれを届けてくれるかい？」

黒鳥は首を小さく振ると、音も無く飛び立った。

その足には今書いた小さな紙を結んである。

よし、これで一応は大丈夫だ。

僕は懷から短刀を抜き、音も無く足を進める集団を見下ろす。
止められる……のか？

……いや、やってみなければわからない！

ヒュンッ

「ん……？」

「どうした？」

「いや、今何かが落ちる音が……うわあっ！」

「どうした!？」

先頭にいた男が振り返る。

その時には僕はもう木の上に戻っていた。

最後尾にいた男は短刀の柄で気絶させ、持っていた縄で縛りあげてそばの枝に括りつけてある。

「アロウはどこだ!？」

「わ、わかりません!! 急に消えて……」

「チッ。どうやら敵にばれたらしいな。3、3、3、2に分かれて屋敷を強襲しろ。中の人間は抵抗するような始末して構わん！」

急げ！」

「はっ!!！」

集団の戦闘の男が呼びかけ、他の全員が返答する。
かなりチームワークのとれた連中だ。普通なら仲間が消えたら取り乱すもののに……。

厄介な相手だ。僕一人で何人削れるか……。

「オギ、オレガノ、メリア……。頼んだよ……。!!！」
僕は集団の背後に素早く忍び寄った。

22話 疾風に勁草を知る

まずは……この三人を消す……!!

俺が近づいたのは、屋敷を堂々正面から入ろうとする一班だった。赤髪の巨漢が先頭を切り、その後ろに、細身の剣を持った痩身の男、酷く巨大な大剣を携えた老人と続いていた。

連中が前庭の噴水を迂回し、屋敷の正面玄関へ向かう。俺はその遙か後方を隠れ忍ぶ。

――どうする？ 一気に畳みかけるか……？ それとも……

俺が考えていると、連中が玄関へ辿りついた。

そこで、俺の思考はロックされた。

扉に入った瞬間、襲ってやれ。

23話 籌を帷幄に運らし勝ちを千里の外に決す（前書き）

記念するわけでもない、60話。

ちなみにこの世界と我々の人間世界の常識とは違うという設定なので、滑車の原理に関して説明していますが、皆さん分かりますよね？

—除—

23話 籌を帷幄に運らし勝ちを千里の外に決す

「・・・・・・・・」

そもそも諜報部員に過ぎないような僕に出来る事なんて限られている。

正面突破よりは作戦勝ちで行くしか方法論としてはないと思う。ともすれば、やはりあの扉の先に何かしかけることが最大限の努力だと思う。

「誰も見てなけりゃ、いいよね」

僕は呟いて、巻物を取り出す。中心に『秘』と書かれている。くうかんのかせをはずせ

「空間枷外」

と続けた。

巻物の中心に書かれた『秘』という文字から一気に発煙した。ドロン！という効果音が似つかわしい。

そこから1つの黒い布に包まれたものは落ちてきた。

「よし」

その中にはベルトが入っており、そのベルトには色々な加工がされてあった。

右側の腰に短刀を備え付け、左側にはポーチのようなものがついている。ポーチの中には『隠密』の人間にしか使えない武器が入っている。

さて、準備は完了。

先手必勝だ。

「行くぞ」

敵の声が聞こえて扉を開く。

「うお！」

開けた瞬間、戦闘のリーダーと思われる男が上に向かって引っ張られた。

「な——」

残りの2人は当然、視線をそちらに向けて動かす。

でも残念、『滑車の原理』だ。

縄を地面に仕掛けておき、輪のようにしておく。そしてその輪に足が入った瞬間に引っ張ればその人間の足を捕まえることが出来る。そして『滑車の原理』と呼ばれる方法で上に引っ張り上げるのだ。

リーダー格の男は頭部をぶつけて気絶する。

その瞬間に男を縛り付けた縄を地面に固定してから、瞬間的に2人の男に走った。

僕の場合は人間の目から見れば、影のようにしか見えないということになる。

そして『隠密専用』の魔法靴を使って速度を上げる。

もうこれで僕の速さは人の目には追いかけられない。

僕は短刀を掴んで男の1人を刺す。その男が悲鳴をあげる前にもう1人の男を新たな短刀で刺した。

それから2人ののどを押さえて、地面にたたきつけた。

「悪いね」

僕はそう言ってから手刀で2人の男ののどを突き刺した。

完了。

さて、お次の作戦といこうか。

「うわぁぁぁぁぁ！」

僕は大声で叫んだ。

24話 天は自ら助くる者を助く（前書き）

これ、何話くらい続くんでしょうね。

61話目、個人的には素数で好きじゃないです。

—加—

24話 天は自ら助くる者を助く

「何だ今の声は!!」

「ちっ、悟られたか!？」

「仲間を呼ばれる前に始末するぞ!!」

黒服達が慌てて僕の元にやってくる。

「さて、これ全員を僕が相手するのか」

できればさっきの大声で救援に来て欲しかったんだけど、不思議なことに屋敷からは誰も出てこない。

「どこ行った!？」

「探せ!!」

「俺が探す!!。深き湖、水面に跳ねるは獲物の波紋。導け」

今のは探索タイプの魔法!？」

「ここから1時の方向、距離は————ごはっ!？」

ばれるなら仕方が無い。

アレンはそこから目にも留まらぬ速さで飛び出し、探索の魔法を出した男の腹を思い切り殴った。

「お前が、俺達の仲間をつ……!!」

「やっちまえ!!」

黒服たちもいつせいに囲んで魔法や体術を放とうとする。

が。

「遅い」

アレンは周りを取り囲んだ黒服全員の急所を的確に鋭く突いた。

十人ほどが同時に膝を突いて倒れる。

隠密師にとって、数は問題ではない。

むしろ、数が多いほうが数的有利という相手の隙を突く事ができ、有利になることが多々ある。

「意外に、脆い」

どうしたものかとアレンは周りを見渡す。

「お前ら、マンガで出てくる噛ませ犬じゃねえんだから。たかがガキ一人にばったばったとやられてんじゃねえよ」

その声は、後ろから聞こえてきた。

僕が。

後ろを取られた？

油断している間に、突く！！

アレンは後ろを向いたままバックステップのみで一気に迫り、正面を向こうと回転しながら相手を殴った。

振り向いてから殴りかかるより、このほうが相手の隙をつけたと思っ
ての行動だった。

「おいおい、いきなり殴りかかるとはキレた少年だな」
だがその拳は、黒服たちを沈没させたその右拳は、易々と片手で
止められていた。

まずい。

まずいまずいまずい！！

隠密師としての勘が、アレンの勘が、そう告げていた。

目の前にいたのは、やはり黒服。

けれど、ただの。先ほどまでの黒服ではない。

威圧感が、違う。

格が違う黒服は、アレンの右拳を握り締めたまま離さない。
むしろ、その右拳をさらに手で握り締めるようにして、壊しにか
かっている。

「……」

「声の一つや二つくらい上げても良いだろうが」
その男は冷めた目をして、アレンの拳から手を離す。

アレンは自分の右拳を見ると、自分の指の爪が手のひらに突き刺
さっており、指の骨はほとんどが脱臼、もしくは折れていた。

こいつから、離れる!!

常人が見れば瞬間移動とまで言われる速度。

逃げ切れる!!

アレンはその場から全力で撤退しようとする。

「逃がすわけ無いだろうが。これ以上任務果たせなかったら俺が死ぬっての」

しかし、アレンの願いは叶わない。

黒服はアレンの速度に追いついただけでは飽き足らず、その首を掴んで宙に浮かす。

「く、かはっ……」
氣道を圧迫される。

「さて、色々と聞きたいことがあるんだがな。少年。まずは――」
「」
その聞きたいことを聞くことは出来なかった。

何故なら。

上から降ってきたある男の手が黒服の頭を驚^{わしづか}掴み、地面にめり込ませたからだだった。

アレンはその勢いで地面に放り出された。

「ケホッ、ケホッ、。確か、あなたは……」

せきこみながらもその男の顔を見る。

「キョウチクトウだ。ま、ここまで掃除できたことは褒めてやる」
黒服の頭を地面にめり込ませたキョウチクトウは、アレンに微笑む。

「一つ、質問があります。余りにも、余りにも屋敷が静か過ぎるのですが……」

アレンはすぐに冷静になる。

「本当だ。外から見たら何にもおきてないように見えるな」

「外から見たら、ですか？」

「中はてんやわんやだぜ？ おそらくこいつらは陽動だ。中にいる面子はお前の仲間でも相当苦戦、しかも負ける感じがする」

「……嫌な予測ですね」

「俺の勘は当たる。経験値がお前らと違うんでな」
苦い顔をする。

「本当は俺も中にいたかったんだがな」

「ここに助けに来たのも、勘ですか」

「その勘に助けられてんだぜ」

その時、ゴリと音がする。

「いきなりフェイスクラッシャーかますとは思えなかったな。いやまったく。しかもその後俺の事忘れてどうでも良い話しやがって。陽動にだって意地があるんだぜ？ 正確には戦力の分断だが」

黒服は地面から頭を出す。

「ここは俺に任せてお前は屋敷のほうに行け」

「え、ですが……。この人はかなり強いですよ……」

「気にするな。俺はもっと強い」

「……分かりました」

「それくらいあのオギって少年も素直だと俺も面白いんだけどねえ。君、あのオギ少年の友達だろう？ 普段のオギ少年は――――」
「……っ
っていねえ!!」

どうやらアレンは会話中に屋敷に向かったようだ。

「おいおい、俺が行かすとしても!!」

駆け出そうとした黒服の前に、キョウチクトウが足音をダンツと響かせながら立ちはだかる。

「邪魔する気か？」

「ここを通りたかったら、俺を倒してからいきな」
腕を組んで黒服の前に立つ。

その気迫は、黒服にも負けていない。

「なるほどな。さっきの少年よりは面白そうだ」

「俺も久しぶりにアンタみたいなレベルの人に会ったよ。さあ、顔と地面をディープキスさせてやるよ」

庭園で死闘が、始まった。

25話 縦の物を横にもしない(前書き)

諺の意味は、面倒くさがって何もしない
だそうです。

―減―

25話 縦の物を横にもしない

後ろから黒服の男とキョウチクトウさんの叫び声が聞こえたが、僕は無視して屋敷に走り込んだ。

一階は物静かだった。

隠密師の僕だから解ることだが、この階にはだれもいない。

その時、上の階から爆発音が聞こえた。

「……！」

まずい、やはりもう戦闘が始まっている……！

二階に向かって全力で駆ける。

。

「つくしよお！！」

俺はいきなり窓から侵入してきた黒服の男の斬撃をとっさに構えた剣で受け止めた。

「オギ！」

廊下に出ると、メリアが二人の魔術師を相手に戦闘をしているところだった。

「メリア！ 大丈夫か？」

メリアが左手に水の障壁、右手に炎を構えて相手の攻撃を往なしている。

さすがメリアだ。二対一でもほとんど余裕そうである。

「私が負けると思うてるの？ オギ、そいつも私が相手するわ

！　あなたはシオンのところに！」

「分かった！　任せるぞ！」

メリアなら大丈夫だ。こいつの本気は半端じゃないからな。それは俺がよく知ってる。

それよりも今はクリスタルとシオンさんだ。一応敵は食い止めているつもりだが、もしかすると窓を使って上の階へ行かれているかもしれない。

急がなくては……！

急いで階段を上がり、まずシオンさんの寝室へ向かう。
不味い事になってなければいいのだが……。

そう思った時、すぐ横の部屋のドアががちゃりと開いた。

「……！」

思わず剣を構えたが、目の前にいたのは、

「オギ……」

「オレガノ！」

だった。

見れば、部屋の中に黒服が二人ほど転がっている。

部屋は一切散らかっていない。どういう戦い方をすればあんなにあっさり敵をしずめられるのだろうか……。

「アレンから伝書があったから……」

「アレンから！？」

庭園にいただろうと思っていたが、やはりか。

さすがのアレンでも全員を喰いとめることは出来なかったようだな。

「シオンのところには私が向かう……。……だから、オギはクリスタルのところへ。あれを守りきらないと、単位が取れない……」

「そうだった!!」

襲撃に気を取られすぎていた。不味いぞ。

何としてでもあの漆黒のクリスタルを防衛しないと、俺の学園生活がもれなく終了してしまう!

「すまんオレガノ! シオンさんの部屋は突きあたりだ!」

「わかってる……」

しかし、敵はあきらかにプロの集団だ。

おそらく庭園に回っているアレンが相手してるだろう敵は陽動か何かだろう。

クロウさんの話では、ここに攻め入ってくる連中の目的は総じてクリスタルのはずだ。

だとすると、一番強くて手際の良い奴がああの部屋に侵入してくると思うのだが……。

……もしかすると、これ、無茶苦茶責任重大なんじゃ……?

まあ、いいか。単位のためにちよっくら頑張るとしよう。

俺は先ほどよりもスピードを上げながら、階段を上って行った。

26話 挨拶は時の氏神（前書き）

63話目です。

今回のタイトルは少しふざけてみました。

（乗）

26話 挨拶は時の氏神

階段を登りきると、廊下に出た。

クリスタルの部屋へと続く廊下では、一瞬呻く程の凄惨な風景が拝めた。床に敷かれた、赤のカーペットの上には無数のガラス片が飛び散り、壁に掛けられた絵画は廃墟のそれのようにズタズタに引き裂かれていた。天井のシャンデリアも幾つかが壊され、廊下全体が薄暗がりにも包まれていた。

最悪のイマジネーションが頭をよぎる。

……糞！！

地を蹴る足に力を込める。

走る、走る、走る。

ようやく、廊下の右へ曲がる突き当たりに部屋の扉が見えた。それを肩で強引にぶち開ける。

開けた扉の先……鉛色の重厚な金庫が依然としてそのまま置かれてあった。

26話 挨拶は時の氏神（後書き）

ちょっと関係ない話なんですが、

ニンテンドー3DS、車で轢いても壊れないらしいですね。
某ゲーム雑誌で知りました。

27話 時は金なり（前書き）

時間は大事に。

明日には死んでいる人がいますよ。

―除―

27話 時は金なり

「・・・・・・・・」

見たところ開けられた気配は無い。

もしも俺が盗賊ならばわざわざ閉め直したりはしないだろうけれど・・・・・・・・。

ためしに金庫を引っ張ってみる。

ロックされている。

「・・・・・・・・」

確かめる方法が無い以上はこのまま守るしかない。

何者かが奪いに現れれば、それが答えだ。

ともすれば。

「外と連絡する手段でもあればな・・・・・・・・」

アレンやオレガノ、メリアが戦っている今、外がどんな様子かが分かれればいいのだが。

そう思って、ふと俺が来た扉を見る。

「・・・・・・・・あれ？」

俺が来たとき、扉を肩でこじ開けた。

その扉が今は閉まっている。

俺が閉めた覚えは無い。

・・・・・・・・。

咄嗟、上を向いた。

「ばれた？」

うききき、とソイツは笑う。

姿は人・・・・・・・・に近いが、尻尾があるので猿と判断しよう。

猿のようなソイツは天井に張り付いていた。

「・・・・・・・・なんだコイツ!？」

俺が言っただけで天井から降り立った。

「お前……何者だよ!!」

「分らん。オイラはそういう風に作られて無いから」

「作る？」

「オイラは猿と人の合成獣キメラだよ」

キメラ……!?

この世界の法律でキメラの創造は禁止されてはいない。

あらかじめ許可を取り、倫理を守った上でそのキメラの行動を制限するという事を守れば。

しかし、このキメラは2つの違反を犯している。

まず、キメラを1人で行動させてはならない。

これは動物である以上、野生に戻ってしまい生態系を壊してしまう可能性があるためだ。

が、もしかしたらこのキメラは案外この屋敷の何かかもしれないので、それは保留しよう。

最大の問題点。

倫理を守った範囲。

人と動物の合成の禁止だ。

これは簡単な話、『蟻』は殺してもかまわないが『人』は殺してはならない。のようなものに近い。

つまり、人間を上等としそのほかを下等種とするような考え方だ。俺自身あまり好んでは居ないが——そういう問題ではないのだ。

「お前……何者だ!!」

俺はもう一度尋ねた。

「だからオイラは知らんよ。ただ、この屋敷の金庫を奪えと言われただけなのだ」

そう言ってソイツは俺に突っ込んでくる。

「オイラには名前が無い。だから、『シラン』だ！宜しくな！」
シランは、俺の頭に向かって掌を向けて叫んだ。

「呪文詠唱！」

「な——」

呪文使えるのかよ！！

28話 関公面前舞大刀（前書き）

意味。

関羽は大刀の名人でしたので、その面前で大刀を振り回すのは「身の程知らず」という意味となります。

三国志。

—加—

28話 関公面前舞大刀

「硬化、鋭化———爪」

シランは俺に爪で引つかこうとしてきた。

咄嗟に短剣でその爪を庇う。

パキン、と小気味良い音を立てた。

俺の持っていた短剣が、爪の数、五等分に寸断された。

「なっ!？」

コマクサと当たった程度じゃ折れないようには魔力を送っていたはずの剣が。

斬られた。

「ありゃ？ 意外に堅いな、その剣。もっと柔らかいかと思ったが」
シランの爪は傷一つ無い。

「なんつー切れ味してやがる……」

いや、よく考えればこれもありえる。

おそらくあの爪は、この馬鹿でかい金庫を斬るためだろう。

「ウキ、さっさと片付けないとあの人が来ちまうからな、行くぜ———」

シランは一気にこちらに迫ったかと思うと、その姿が一瞬で消えた。

「何!？」

辺りを見渡すが、姿が無い。

一瞬、辺りが暗くなる。

「上か!!」

その瞬間、上からシランが爪を振りながら直下してきていた。

それを下がってぎりぎりのところで避ける。

服が一枚、切れた。

着地したシランは止まることなく追撃を繰り返す。

その攻撃は変幻自在だった。

通常人間対人間ならば、大抵攻撃は左右に絞られる。

何故なら、空中は身動きが取りづらく、敵の攻撃の餌食となるからだ。

だが、猿とのキメラであるシランには、それが無い。

上下左右、加えて猿のすばやい動き、そしておそらく一撃必殺の鋭い爪。

その攻撃を見事に避けながらもオギは、少しづつダメージと疲労を負い始めていた。

うききき、と変わらずシランは笑う。

まだまだ余裕があるようだ。

「猿とのキメラである俺が言うのもなんだが、すばしっこいなあ」

「どう、も!!」

「面倒だから」

その言葉でシランはいったん間合いを広げる。

「猿舞、回転竜巻!!」

ぐるとシランが一回転したかと思うと、鋭い八本の斬撃が飛んできた。

「危ねえ!!」

オギはそれを紙一重でかわす。

が。

ゴトン。

不意にオギの後ろで金属の音がする。

まるで重たい金属が床に落ちたみたいな――――。

ある考えに至り、後ろを向くと。

金庫が斬撃で斬られていた。

斜めに、一直線に。

どうやら今の斬撃、バラバラに撃っているように見えてよく考えられていたようだ。

時間差で同じところに八発。

それだけ撃たれれば斬れた、というわけか。

と、ここまで考えて前を向くと、シランが消えている。

「ありがとうございます」

シランの声は後ろから。

その右手には、黒く輝く美しいクリスタルが握られていた。

「じゃ」

そして、シランは壁を丸く切り抜いた。

「待て!!」

そうさけんではいても、この距離じゃあアイツのすばやさには敵わない。

と、次の瞬間オギの横を誰かが通り過ぎた。

あの速さ、アレンか？

シランが出ようとした瞬間、クリスタルを持っていた右手が突っ張るように吊り上げられた。

キキッ!? とシランも驚く。

その間に左手も吊り上げられる。

空中にはキラリと光る糸の様な物が。

「ワイヤー？」

今度はシランが苦しみだす。
見ると首にきらめきが集まっている。

「この、泥棒猫が。いや、泥棒猿かしら」
その声は、アレンではない。

というか、アレンに女装癖、ましてやメイド服を着る様な趣味は無いだろう。

そう、目の前に居たのはメイドさんだった。

「まったく、せっかく警備を頼んだって言うのに。しっかりしてくれないかしら？ まあ、時間稼ぎくらいにはなったようだけれど」
メイドさんは手を後ろにして何かを引っ張っているようだ。

言わずもがな、あのワイヤーだろうけれど。

メイドさんの手には、白い手袋。

指が自分のワイヤーで切れないためだろう。

「あの……？ 貴女は？」

恐る恐る尋ねる。

「聞いているいかしら。私はアマリリス。しがないメイド長をやっているのだけれど」

アマリリス、通称マリーさんは、鋭い目をして答えた。

29話 歯牙にもかけない(前書き)

諺の意味ですが、無視して問題にしないこと。
だそうです。

―減―

29話 歯牙にもかけない

マリーさんがクリスタルを持っていない方の手の指をくいっと引く。

「うぎゃあー!!」

その動きに連動するように、シランの体が操り人形のように拘束されていく。

うめき声を上げるシランを、マリーさんが冷たい目で見据えた。

……熟練者の眼だ。

基本ワイヤーなどを使う業は自己防衛のための護身術がほとんどである。

しかし、マリーさんはそれを転じて完全に攻撃用の戦闘術として扱っている。殺しのプロか、護衛のプロか……、どっちもなんだろうな。

「さあ、泥棒猿。これから私が一つずつ質問をします。必ず本当のことを言いなさい。嘘を吐いたかどうかは、今あなたを縛っているワイヤーから伝わるあなたの全身ありとあらゆる筋肉の硬直が教えてくれます」

「うきき、誰が本当のことなんかぎゃあああ!」

シランは一瞬余裕の笑みを浮かべたものの、それはすぐに苦痛の色に変わった。

理由は一目瞭然、シランの身体に巻き付いているワイヤーの内の一本が、その右手を切り落としたからだ。

悲鳴を上げるシランを前に、マリーさんは、

「言っておきますが、あなたが抵抗したり嘘を吐くたびに、身体パーツのどこかを切断します。私、キメラって大嫌いなんですよ」
笑っていた。

その声を聞いたシランはびくつと身体を硬直させる。

「じよ、冗談だろ？ おいらがこんな女に……」

「それでは、最初の質問をします。あなたを送り込んだ者の名を答えなさい」

「……お、おいらを送り込んだお方は……」

シランが答えようとしたその時だった。

「ぐっ!!」

シランがその場でうめいた。

「マリーさん!？」

「わ、私ではないです!」

俺はマリーさんが力を入れ過ぎてしまっているのかと思ったが、
どうやらそうではないらしい。

「うぐっ、うぎゃああ!!」

シランは、ついには叫び声を上げ始めた。

そして、気付く。

なんだ……？ シランの身体がなんだか歪んで……。

「うきき、や、止めてください! おいらは、おいらはまだ……」
そうおびえたように言うシランの身体がどんどんねじれていく。

「これは……拘束術式の魔法!？」

マリーさんが慌てたように言う。

拘束型の魔法。属性は関係なく、相手を物理的もしくは念力のよ
うな魔法で空間に固定する攻撃魔法。

聞いた話では、かなり高度なものらしく、一介の魔術師程度のレ

ベルでは出来ないと聞いたが……。

「でも、この魔法は……」

ついにはマリーさんまでもが圧倒されたかのように後ずさりを始めた。

「うぎぎぎぎぎ……」

そうこうしている間にも、シランの身体は空中で歪んでいき、そして、

「うぎゃあああああああああああああ!!」

耳をつんざくような断末魔と共に、砕け散った。

いや、文字通り、破れた。

「……、おそらく、このカメラは、もう用済みと判断されたのでしよう」

落ち着きを取り戻したらしいマリーさんが四散する肉片を見て呟く。

「でも一体、どんなやつが……」

「わかりません。ただ、相当な手だれだということだけは確かです。むしろ、その本人が出てこなかったことに安堵しています。……情けない事です」

マリーさんがひゅっと手を振ると、空气中に何かが舞った。

糸を回収しているらしい。

「どうやら、強襲してきた黒服の集団はあなたのご学友や兵士たちが粗方沈めてくださったようですね」

マリーさんが探索系の魔法を使ったらしく、こちらを見て言う。

「そう、ですか……」

俺は片膝をつく。どうやら相当緊張していたらしい。

魔法を使った本人が現れたわけでもないのに、この圧倒感。相手取っていたら、おそらく今の俺ではあっけなく殺されていただろう。

……ひとまずは、安心か。

30話 瑠璃も玻璃も照らせば光る（前書き）

67話目。

なんか右足の親指がヒーターみたいに熱い。

（乗）

30話 瑠璃も玻璃も照らせば光る

次の日。

「あーークソ。完全に戦力外になっちゃったよ、僕。」

満身創痍のアレンが療養用ベッドに横たわっていた。

なんでも、昨晚、襲撃の夜、前庭に現れた団の頭領と戦い合い、ギリギリのところまで追い返したらしいが、その際、身体の数か所を深く斬り付けられてしまったらしい。

彼の看護を任されたメイド長アマリスによると、命に別状はないらしいが、傷が塞がるまで二週間程の養生が必要だ、と。

「……ごめん」

「いや、いいよオギ、キメラと戦ってたんだろ？ お前も傷だらけじゃないか」

31話 待てば海路の日和あり（前書き）

待ったって現実はあるだけだぜ？いつまで経っても近くには来ない。

命も恋も明日も昨日も。それでも待てって言うのか？

—除—

31話 待てば海路の日和あり

アレンはそう言って苦笑する。

「それよりクリスタルは無事だったのか？」

「ああ。でもあの猿によって金庫は破壊されちゃったから、今は別の場所で保管されているってのが、ちょっと痛いところかもしれないな」

そう言って天井を見る。

「とりあえずアレンが回復するまでと……クロウさんが帰ってくるまではこうしていかないといけないな」

「僕のことは気にしなくてもいいよ」

「そういうわけにはいかないよ」

仲間だから、というのもあるが別の理由もある。

昨夜の騒動で破損した場所を修復する作業が現在はずすめられている。

オレガノとメリアは既に2人とも行動中である（オレガノはハンマーと釘の扱いが手の物だ）。

俺自身も本当は配属されているのだが、アレンのことが心配でココまで来たというわけだ。

「嘘はいけないな、オギ」

「バレたか」

本当はサボりに来ただけだ。何だかんだ行ってもアレンの事を心配はしていない。彼にとってこのくらいの怪我は日常茶飯事なのだから。

だから、一般人が2週間掛かる怪我でも彼にとっては5日もあれば何とかなるだろう。

「修復作業もそんなには時間は掛からないだろう？だから早く帰っていいのに……」

「どうせクロウさんが来るまでは依頼は継続するんだよ」

俺はそう言っただけで席を立ち、アレンの顔にずっと近寄る。

「お前がいればもっと早く修復作業もできるんだよ。分かったら、治すことだけ考えろ」

そう言い放って部屋を出た。

アレンが、ありがとう、と一言言っただけが聴こえた。

それからは本当に大変だった。

対立していた兵士たちとも仲良く汗を流し協力し合って、色々な作業に取り掛かった。キョウチクトウさんは怪我が思ったより酷かったようで、作業は余り手伝ってはいなかったが兵士達を激励する役目として十分に存在自体で役割が強かった。

メリアは労働力としてはやや弱いので、メイドたちと一緒に兵士達のための食事作りに取り掛かったらしいが。

メリアはちゃんと足手まといにならなかっただろうか……。

対してオレガノは基本的に器用らしく、修理作業も食事作りも両方ともこなしていたようだ。

マリーさんが『あの子……メイドにしてみたいわね』と、静かに言っていたのを聞いた。いつものドレスも汚れてしまっていたが、よく考えれば見た目はお嬢様っぽい。

と、そういうわけで1日の作業のほとんどが終了して、夕食の最中だった。

俺の周辺には当然の如く、兵士勢が集まったの夕食だった。

「キョクチクトウさんって強いんですね？」

俺はコマクサさんに聞いてみる。

「あー、まあな。あの人に勝った事があるのは2人だけだろ？」

以前いがみ合っていた相手とは思えないほどの軽さだ。まあ、嫌
いじゃないぜ。

「2人？」

「ああ！俺らの屋敷の三本柱さ！」

そう言って、兵士の1人が盛り上がりを見せる。

「メイド長のマリー！執事長のクロウ！そして我らが団長のキョク
チクトウ！この3人がいるからこの屋敷は成り立ってんだぜ？」

「ということは、キョクチクトウさんが負けた2人というのは・・・
・・・」

「ああ。マリーさんとクロウさんだよ。そしてあの人たちが負けた
ことがあるのも2人だけだぜ」

なるほど。

つまりあの3人の力はほぼ同じくらいの強さ、ということになる
だろう。

「いや一概にもそうは言えないんだな、これが」

とコマクサさんが言った。

「体術だけで言えばキョクチクトウさんが誰よりも強い。そこに魔
法が加わるとクロウさんが強くなる。さらに武器を入れればマリー
さん。みたいな感じだ。状況にもよるんだろうと思うぜ」

「なるほど」

マリーさんがあの強さなのだから、どちらにせよクロウさんもキ
ョクチクトウさんも俺では相手にならないんだろうと思った。

「でもお前だって素質はあると思うぜ？お前に伝説の戦いを聞かせ
てやろう！」

そう言ってコマクサさんたちが盛り上がり始めた。

宴はそのまま次の日の朝まで続いた。

32話 酒は百薬の長（前書き）

適度な量のお酒であれば、身体に良い、という意味。

適度な量ですよ？

という今回はお酒の話。

—加—

32話 酒は百薬の長

さて、途中から飲めや騒げやのどんちゃん騒ぎの次の日。

俺と屋敷の人たちは焚き火をした後、それを中心にして眠っていた。

「ほら、お前ら起きなさい。朝食は用意してやったから、仕事仕事」
フライパンをガンガンと鳴らしながら、マリーさんが俺達の焚き火の後の所に来た。

「二日酔った……、頭ガンガンする……」

オギは兵士達のアルコール度数の高い酒を吐息で当てられ続け、少し吐き気と頭痛がする。

「飯だあ!!」

兵士達は飛び起きてマリーさん以下メイドさん達&オレガノメリアコンビの作った料理に走り出す。

「お前、酒も飲んでないのに二日酔いか？」

オギの元にキョウクトウさんが寄ってきた。

キョウさんの怪我はアレンよりよっぽど酷い。

右腕と肋骨三本、左足の骨を折っているそうだ。

その割に普通に歩いていた。

ただし包帯ぐるぐる巻きで松葉杖をついてだそうだ。

「大丈夫なんですか？」

「ん？ かすり傷だろ？」

かすり傷じゃないから折れてるんじゃないんですか？

「いや、強かった。久しぶりに俺もこんなに怪我をした」

「普通絶対安静ですよ……」

ちなみにキョウさん、宴が始まった辺りからこの席に参加している。

「お前ら、俺とこの少年の分の朝食は残しとけよ!!」

『はい!!』

どうやらキョウさんは相当支持されているようだ。

「あ、キョウ」

「げ」

と、話している最中にマリーさんがこっちを向いてキョウさんに話しかけた。

「応援くらいなら良いけど、ベッドから出るなって言ったわよね？」

修復工事の場所には似つかわしくないベッドが置かれている。

これはキョウさん用のベッドだ。

「は、いやー……。ほら、百葉の長つつってな？ 酒は身体に良いんだよ」

「へえ。火をつければ燃え出すような酒をビン一本飲むと、骨折は直るのかしら？」

そういえば、確かにちびちび飲んでたような。

結局ビン一本飲んだのか。

「あ、あれはレモンハートって酒でな、アルコール度数は知ってる
だろ？ たったの40度だよ」

たったの40度？

それをビン一本？

やっぱりこういう傭兵上りの人たちは酒に強いんだろうか？

「何言ってるのよ」

それをひややかな目でマリーさんが返す。

「私の部屋からビンが一本なくなってたわよ。レモンハートがね。
犯人はどんな手を使ったのかしらね？ 何故か大きな穴が私の部屋
に開いていて、どこかに繋がっているようだったけれど？」

マリーさんの視線が陰しくなる。

「そ、それが俺とは限らないだろ？」

明らかにキョウさんは動揺していた。

「大きな穴を通ってきたら、何故か離れのあなたの部屋に着いたわ
？」

キョウさんの肩がびくつと震えた。

「今までにも私の部屋から酒がなくなることはあったけれど、何故
かその酒があなたの部屋にあったわね」

登場人物がどれくらい危険な状況かは、汗を見れば分かるという。

恐る恐るキョウさんの顔を見ていると。

ダラダラダラダラ。

手と肩ががくがく震え、顔は青ざめ汗が滝のように流れていた。

圧倒的な危機の様だった。

「さて、もう一つ言わせてもらおうね。私の部屋から盗まれた酒は確かにレモンハートだけれど、それは75・5度の方だったんだけれど?」

「ごごごめんなさい!!!」

一瞬でキョウさんが土下座した。

「75・5度お!」

度肝を抜かした。

そんな酒を一日で飲み干したのか、この人は?

「謝って、私の酒は帰ってくるのかしら?」

「ほ、ほら。シオンお嬢様に頼めば!」

「そんなことできるわけ無いでしょ。私の部屋のお酒は、ちゃんと自分のお金で稼いだものなのよ?」

目から怒りがほとばしっている。

「キョウチクトウ、言い渡します」

「は、はい」

土下座した状態で答える。

「朝食抜き、そして」

マリーさんが指とくいつとひっぱると、ベッドが近づいてくる。

「ま、待ってくれ、それは!!」

キヨウさんはそのまま引きずられるようにベッドへと貼り付けられてしまった。

「一週間は貼り付けられてなさい。絶対安静で」

「ま、待ってくれ!! 動けないのは暇すぎる!! お前達、助けてくれ!!」

キヨウさんは必死な瞳で仲間の兵士達を見つめる。

兵士の間ですこし動揺が走る。が。

「じゃあ皆に聞くけれど。キヨウチクトウは相当手負いでろくに体術も出せない状況、対する私は臨戦態勢でワイヤーも装備しているけれど? あとね——」

そこでマリーさんが微笑む。

邪悪に。

「飯抜きになるけど♪」

『頑張ってください団長!!』

その声は屋敷に響いた。

33話 歓学院の雀は蒙求をさえずる（前書き）

諺の意味は、普段から身近に見たり聞いたりしていることは、いつの間にか覚えてしまうというたとえだ、そうです。

―減―

33話 歓学院の雀は蒙求をさえずる

——しかし、俺達はクロウさんが帰ってくるまで何をすればよいのだろうか。

俺は……そうだな。

剣でも稽古するかな。兵士もいることだし。

翌日になって、アレンが着々と回復しているのを見に行った俺は、その後、一人で四階の金庫部屋に向かっていた。

……いや、特に理由はないんだが。あの時の戦闘に何かひっかかるものがあつたんだよな。

ドアを開け、中を確認する。

「……あら？」

中には、乾いた血だまりと、窓や家具の破片。現場はそのままだな。

そして、その前に立つシオン嬢と、数人の執事とメイド達。

「シオンさん。なんでここに？」

そう聞くと、シオンさんは困ったように微笑んだ。

「私はこの御屋敷の主ですよ？ 御屋敷で起こったことは私が責任を持って処理しないと。それに、こういうことはよくあるんです」
まあ、普段はほとんどクロウがやってくれるのですけどね。とシオンさんは続けた。

「しかし、ここはその……」

もう乾いているとはいえ、血や肉片が飛び散っていた場所だ。

俺のように戦闘を生業としているような学院の生徒とは違って、いわゆる深窓の令嬢レベルの人だろうに。こんな現場を見せて良い物なのだろうか。

「御心配には及びませんよ」

シオンさんはそう言うのと、こちらに近づいてきた。

「しかし、今回は手強れが相手だったようですね。メリアもあなたもご学友も、ご無事でなによりです」

「そりゃあ、どうも」

しかし、シオンさんの方は大丈夫だったのだろうか。

一応あの時オレガノに任せはしたが、その後のことは聞いていなかった。

「私はいたって健康ですよ。賊が侵入した時点で、周りに執事が待機していましたから」

警備にはやはり問題は無かったようだな。

しかし、連中のなかには魔術師もいたはずだ。

奴らはどうして罨魔法をくぐり抜けられたのだろうか。

俺が気になっていたのはそこだ。

「そうですね……。私もそればかりが気がかりでここを調べていたのです。もしかすると、解呪系の魔術を使う相手がいたのかもしれない」

解呪か。

呪術師とは対極に位置する、稀有な魔術。呪いや、仕掛けられた

魔術を打ち破る術式だ。

上位の呪術師もこれを使えるが、呪う方に力を注いでいることもあり、解呪の能力が高い授受知氏は少ない。

それこそ、その解呪に全ての魔力を使っているような相手でなければ、この高度な罫魔法の突破は困難なはずだ。

「どちらにしても、相手がこれまでとは違う、高位の魔術を使い、陽動をも用意するほど人力のある集団だということは確かです」
シオンさんは難しい顔で言った。

34話 仕上げが肝心（前書き）

―乗―

34話 仕上げが肝心

「……………それに……………ね……………」ここでオレガノが前に出た。いつもより重い足取りだった。左手で何かを摘んでいる。

「……………盗聴機なんて仕掛けるなんて本当したたか……………」左腕を延ばし、摘んでいるものを揭示する。青白く油光りする1センチ程の肉塊の先端で無数の赤い触手達が揺れていた。

それが、オレガノの指の先で垂れ下がっていた。

「……………ゲル。使役キメラ。四六時中、マスターに自分が拾った音の情報を飛ばしてるの。コレは死んでるから大丈夫だけど」

ゲルの死体を足元に放ると、靴で踏みつぶした。クチャリ、と小気味良い音が鳴った。

「……………屋敷内に百数十匹。駆除に三時間も費やしたの。しんどい」

35話 轍を踏む（前書き）

一気に行くぜ！！

―除―

35話 轍を踏む

「もしかして、全部倒したのか？」

「まあ……多分」

オレガノはそう対応してから

「でも気を付けて。まだまだ向こうが用意した罠はあるかもしれない……」

と続けて、身を翻して去って行った。

「……これらを仕掛けたタイミングはいつなのでしょう」

突然、シオンさんがそう言って難しい顔をした。

「どういうことですか？」

「いえ……ここには優秀なメイドと執事がいます。そして魔術に関してはクロウの手にかかればどうということもありません」

「ということは、クロウさんなら使役魔法にも気づくことはできた……となると」

「ええ。ですから、これを仕掛けたのは先日の連中……ということになります」

……なるほど。

それは間違いなくそうなのだろう。

「だとしたら、難しく考えることはないのでは？」

つまり、連中はここにやってきたときにそれらを仕掛けた。そして去って行った、ということになる。

それで正解なのだから。

「いえ……あの……」

俺の対応にちよつと口ごもるような態度をとるシオン。

「何ですか？」

「いや……」

どうしたんだろう？急にこんな対応をとるなんて。

「おいおい、オギ。わからないのか？やれやれだな」

そう言って天井から、アレンが降り立った。

「……俺はもう驚かない。驚かないぞ……」

自分に言い聞かせる。それから、

「どういことだよ、アレン」

とアレンに尋ねた。

「シオンさんはお前の間違いを正すと、オギのメンツ丸つぶれだから、どう柔らかく言ったものかを考えているのさ」

アレンはそう言ってにやりと笑う。そしてシオンさんは「凶星！」という顔をした。

マジか……。

「で、どういことなんですか？」

「あ、いや……別に私は」

うむ、そんなことないことにして何とか逃げようとしているようだが、表情を隠せていない。

「僕の口から説明しますよ。全部聞いてたから」

そう言ってアレンは笑う。

全部聞いてた……って。

お前それ俺の後ろから入ってきたってことだよな？
はあ……。

「いいかい？オギ。どのタイミングで仕掛けたかはわかったろ？先日、連中が侵入してきた時だ」

「まあ、そうだろうな」

「でも、そんなことして意味があるのかい？」

ニヤリと笑った。

「意味……？」

「だって、彼らの行動から——特にシランの発言からしても上の者は用意周到にここにやってきたわけだろう？」

「ああ。そうだな」

「てことは、ここでミッションは成功。あのクリスタルは持ち帰ることができるし、この屋敷は破壊して終わる予定だったってことだ

ろ？じゃあ盗聴器なんて仕掛ける必要は無い」

「あ……」

そうか。その通りだ。

あいつらは成功することを前提のような行動——それこそ俺たちを殺しにくるような動きで戦いやがった。

負傷者がほとんどいない。理由は『死人』か『無傷』かだ。

また、盗聴器を仕掛けるなら建物を全力で壊す必要はない。

「……どういふことなんだ？」

「さあ。僕にはそれ以上はわからない。ただ、可能性としてはまだ攻撃にくるかもしれないってことかな——」

「話は終わった？」

そう言って扉を開けて怖い笑みを浮かべたのは、マリーさんだった。

「げ」

「アレン君、わかってますよね？」

「……イエス」

アレンがおびえながら静かに近づく。そしてマリーさんにヘッドロックを食らう。

「うげ」

「さっさと寝なさい」

コキ。

という音がして、アレンは気を失った。

おいおい……この女……。

「ああ。そう、大事な話があります」

マリーさんはそう言っただけでシオンさんの方を見る。

「クロウが帰ってきましたよ」

「クロウが！」

シオンさんの顔がパッと輝いて、それから走り出した。

「慕われてるんだな……」

昔からずっと一緒に行動してきた執事です。私とは年季が違う

のですよ」

マリーさんはそう言って、笑みを浮かべる。それから、アレンを担いで去って行った。

「ふむ……」

俺もクロウさんのところに行くことにしようか。

クロウさんとシオンさんはまだ門のところにいた。

「おかえりなさい。クロウさん」

「ああ、帰ってきましたよ。それにしても……」

そう言ってクロウさんは屋敷の方を見た。

「タイミング悪くやってきたようで」

「すみませんね」

「ああ、大丈夫です。お嬢様にお聞きしましたよ。皆頑張ってくれたと」

まあ、誰がどうなったかは知りませんが。

と、若干冷たく言い放った。

「クロウ。早く入って。体休めないよ」

「お気づかいありがとうございます。お嬢様」

そう言ってクロウさんは笑った。

「すぐに執事とメイドを集めるわ!」

その笑いに喜んだのか、シオンさんは笑顔になりそして走って行った。

「クロウさんでも笑うんですね」

「ええ。人ですから」

「あ、そう言えば聞きましたよ。三本柱の話」

「……ああ、そのことですか」

クロウさんはさらに笑う。

「まあ、今はキョウさんも負傷してしまつて、三本でもなんでもないですけどね」

「そうですね」

「まあお酒を飲める元気があれば大丈夫でしょう」

「ですね——」

……え。

俺は固まって歩みを止めた。

「どうかしましたか？」

「……どうして……」

「はい？」

俺は唇が震えるのを感じながら、必死に口を開いた。

「どうしてアンタが、キョウさんの怪我を知っているんだ」

35話 轍を踏む（後書き）

来たコレー！

ー除ー

36話 一葉落ちて天下の秋を知る（前書き）

さて、いい感じの話、だと思います。
お久しぶりです、加です。

36話 一葉落ちて天下の秋を知る

「……ほう」

クロウさんはそう呟くと、口元をゆがめて少し笑った。

その笑いはシオンさんに見せた優しい笑顔ではなく。

もっと邪悪なものだった。

「一体、何が可笑^{おか}しいんですか……」

「いや、いやいやいや。少し驚いたんですよ」

クロウさんはそう言いながら一歩下がる。

「ただの少年かと思って、私も多少口が滑りました。さて、どうしましょう」

両手を広げて、おどけるクロウさん。

何なんだ。

何なんだこの余裕は。

一体この人は、何者なんだ。

「では一つ聞きますが、君はこのことを、どうする気ですか？」
クロウさんが尋ねてきた。

「どうするって、そりゃあ……」

マリーさんに、伝えないと……。

「一つ聞きますが、誰があなたのそんな話を信じるんでしょうね」

「どういう、ことですか？」

「いえいえ。あなた方はこの屋敷を守ってくれた。とはいえまだ2, 3日しか経っていない。かたや私はここで何年も働き続けている。君が、クロウがおかしなことを言ったと言って、誰が信じるのか、少し疑問に思いましたね。言い訳ならまだ、色々あるのですが」

……確かに、この人なら皆を信じさせるくらい容易い気がする。

「私は、信じるわよ？」 「……信じる、アレンの親友だし」

その声は、オギの後ろから聞こえてきた。

「メリア、オレガノ！？ どうして!？」

それはメリアとオレガノだった。

「おやおや、これは……」

クロウさんは事の次第を見守っている。

「あなたの言葉を借りるならね、今まで私と一緒にオギは何年も居て、アンタなんか一日しか会ってないんだから!!」

メリアはビシッと指を指す。

いや、だからどうしてここに居るのか教えて欲しいんだが。

「……さっき私がゲルって使役キメラを潰したって言ったでしょ」
「どうやらそれはオレガノが教えてくれるらしい。」

「流石に数時間で百数匹も見つけられるわけ無いでしょ？ メリアに手伝わってもらってたんだけどね……。ある部屋だけ、このキメラが無かったのよ」

「それが、私の部屋というわけですか？」
オレガノの言葉にはクロウさんが答えた。

「ええ。そりゃ、自分の部屋を盗聴なんてするはずないものね。それに、屋敷を自由に動き回っても全く違和感が無いですしね」
「どうやらそれを聞いて、二人もクロウさんのところに来ていたのか。」

「大した学生だ。シオン嬢のお友達も居るとなっては、少しまずいかもしれませんね」

クロウさんは口ではまずい、と言いながらも笑みを浮かべる。

次の瞬間。

「!？」

全身の毛が逆立った。

鳥肌、を超える。圧倒的な、動物的直感とも言えるものが、それを感じ取った。

気迫。

クロウさんから滲み出る、その気迫に、気圧された。

形容するなら、人間の密度が違うと言えば良いのだろうか。

そのクロウさんの重みに耐え切れない。

どうやらそれはメリアやオレガノも感じ取っているようで、顔からは冷や汗が出ていて、顔も少し青くなっている。

「では、記憶くらいはぶっ飛んでいただきましょうか。価値も分かってらぬゴミ共が」

最後の言葉はおそらく、この人の地なんだろう。

言い放つクロウさんの目は、鋭く光っていた。

36話 一葉落ちて天下の秋を知る（後書き）

悪役ひゃっほいつ!!

一番書きやすいのは悪役です。いや本当に。

37話 同日の論ではない(前書き)

差が大きくて比較することができない。同じに扱うことができない。
の意です。

―減―

37話 同日の論ではない

クロウさん……いや、クロウがその鋭い瞳をこちらに向けたまま話す。

「やはりあの学院の生徒は侮れない。ふん、さすがにあやつの学院というだけはある」

プレッシャーに押し負けている俺達に向かい、クロウが手を向ける。

「拘束魔法…壺式、発動」

「ぐっ……」

拘束術式……。

やはり、あのキメラを殺したのも……。

「ふ、そうだ。私は拘束術式の使い手。……無駄話は無用だ」
身体が動かない……。

「ぐうっ……」

「から……だ、が……」

後ろからメリアとオレガノのうめき声が聞こえる。

二人も同じ状況にあるらしい。

「とはいえ、貴様らが消えては皆が怪しむな。とりあえず、記憶は消させてもらうぞ」

まずい……、クロウが糸を引いていたと、屋敷の人々に知らせなければならぬ。

ここであっさり負けるわけにはいかない。

だが、どうすれば……。

「――、――」

「……？」

何だ？ 声が……。

「オレガノ……」

この声は……

「広域型……呪術式……、呪縛……」

「なに！？」

そうつぶやいたオレガノの足元から黒い魔方陣が急速に広がり、その範囲がクロウをも包んだ。

「よし！ オレガノ、いいわ！ 今度は私が……」

「止めろ、メリア」

「何でよ！ オギ！」

俺は目の前の、呪術を身に受けながら全く反応を見せていないクロウを睨む。

「忘れたのか？ この屋敷にあったのは、兵士や俺達だけじゃない。あの罫魔法を破ったのは誰だ？」

「あ……」

それもおそらく、こいつ。

「オレガノの広域呪術も、解呪の前では、無意味だ」

「わたしの……呪術が効かない……!?!?」

「ふん、物解りの良すぎる、生意気な餓鬼どもめ」

禍々しい呪術の魔方陣の上を悠々と歩くクロウが言う。

38話 友と葡萄酒は古い程良し（前書き）

— 乗 —

38話 友と葡萄酒は古い程良し

「畜……生……！」俺は動かない体を振り、剣を取ろうと試みた。柄に指が触れた。手汗で厭にベタついた。柄を握り、鞘から引き抜く。

「拘束魔法…式、発動」

クロウが言った途端、俺の腕はまるで時が止まったかのように動かなくなった。渾身の力を入れて抗ってもビクともしない。

「抵抗しても一切合切無駄だ。さっさと……」

クロウの台詞の途中で彼にメリアの詠唱破棄魔法の火球が飛んできた。

クロウは顔色を一切変えずそれを殴って霧散させた。無数の火の粉が辺りに舞い散った。手袋に付着した炭をうざったそうに払い除ける。

「無駄だというのに」

クロウが一歩進む毎に、重圧が強くなっていく。動けない三人は意識が飛びそうなのを懸命に堪える。

39話 横槍が入る（前書き）

そのままの意味じゃねーんだよ

―除―

39話 横槍が入る

クロウが右腕を振り上げる。

「拘束魔法…参式、発——」

パァン！と、右腕が弾かれた。

石飛礫いしひりが遠くから投げられたようだ。

「……遠距離まで指定はしていなかったのが仇となったか」

そう言いながらも、余裕そうな笑みを見せ、俺たちの拘束が解けることはない。

「いやいや、あなたが何をしているのか分からなかったので、遠距離から様子を見ようとしただけですから」

と、いつものように誰かに恩を着せるでもなく、自分を褒めるわけでもなく、事実を相手にぶつける。

こういう喋り方をするのは——

「アレン……」

首を向けることはできないが、このタイミングで戦いに参加できる男はこいつくらいだ。

「それにしても貴方が真犯人ですか」

「真犯人という言い方は好まんな」

「では、黒幕ということになりますね」

「だ」

そう言って、クロウが腕を別方向に向けた。

その瞬間にニヤリと笑った。

「俺のレベルを間違えているぞ」

そして腕を下げると、

「が……！？」

アレンの短い悲鳴が聞こえる。

「拘束魔法…参式、発動」

張りつめた空気が出来上がる。

体は持ち上がることを拒否し、重力が倍になったような感覚さえあった。

「どうなってんだ……！」

「壱式はあなた方の周りにまとわりつく、空気を。弐式はあなた方の筋肉を。参式はあなた方の血流の速度を、それぞれ拘束する。まあ、正確に言うなら、拘束というよりは、超低速にするだけなんですよ」

急に敬語に戻り発言をする。

そうか。なるほど、血流が拘束されて体が重く感じているのだ。貧血状態が常が続いているようなものか。

「……くっそ」

「さてと、どういう理由であなた方は死にますか？」
クロウが笑う。

横槍が入る。

それを直接的に表現したのを見たことがあるだろうか。
クロウの頭蓋に向かって横やりが飛んできた。

「……」

クロウは、静かに手を差し出して、横槍を地面に水平な状態で止めた。

「どうだろう、ここでお前も死んでみてくれよ」

「処理は私たちに任せてください」

そう言って現れたのは、マリーさんとキョウさんだった。

三本柱がここにそろったのだ。

40話 面を輝かせる（前書き）

輝かせるのは面だけじゃねーんだyoi

気に入りました。

—加—

40話 面を輝かせる

「どうしてここに？」

クロウは三本柱の二人を睨んで言う。

「メリアちゃんとオレガノちゃんからキメラの事情は聞いていたわ。だから、早くここに駆けつけようと思ったのだけれど……」

そこでマリーさんが隣のキョウさんを睨む。

「悪い、支度に手間取った」

どうやら遅くなったのはキョウさんのせいのようにだった。

「マリーはともかく……、キョウは大怪我をしていたはずでは？」

クロウが黒幕だと分かるきっかけでもあったキョウさんの大怪我が、まるで無かったかのように平然と歩いている。

おそらく、あの槍を投げたのもキョウさんだろう。

「ああ。気合で治した」

「嘘つかないの。“金色夜叉”で治したんでしょうが」

マリーさんとキョウさんの会話に、知らない単語が出てくる。

「……成程。それで……、だがそんなに使っているのか？ 襲撃のときにも使ったんだろ？」

「だから、三分が限界だろうな」

そう言った直後、キョウさんの身体が急に光り輝きだした。

比喩などではなく、身体から輝くように煌きらめく。

「これは……、骨が折れますね」

「脊椎のことか!？」

キヨウさんは踏み込んだ、と思った瞬間にはクロウの眼前まで迫っていた。

「拘束魔法…壺式」

「んなもんで止められるかあ!!」

一瞬キヨウさんの拳が遅くなったが、それでも止まることなくクロウの腹部にその右拳を叩きつける。

だがクロウは数メートルぐらい地面を後ろに滑って、止まる。腹部には手が当てられており、その手からは煙が出ていた。

その頃、マリーさんは俺達を守るように立ちながら話していた。時折魔法陣を展開しているのを見ると、何かの構えをしているのかもしれない。

「こん……じき、夜叉?　って何なんですか?」

「分かりやすく説明するとですね。魔法を使えるのはそれ相応の才能と特訓した者ですが、別に魔力自体はどんな人間にも、というよりもどんなものにもあるのは知っていますか?」

「『魔力の常備性』ですか……」

俺は初耳のことだったが、どうやらメリアは知っていたらしい。

「キヨウはその身体の中にある魔力を無理やり引き出して、体中に魔力を纏まとうことができるんです。今はそれで戦っていますね」

「そんな馬鹿な!!」

それにメリアが反発する。

「魔力を身に纏って戦ったりなんかしたら、普通自分の身体のほうが崩壊しちゃいますよ!!」

メリアの言うことももつともだ。

簡単に言うなら、小型飛行機に宇宙へ飛ばすロケットのエンジンを取り付けるようなもの。

一瞬で空中分解してしまうだろう。

「えっとね……、何ていえばいいのかな。キョウはそうならないように常人とは比べ物にならないくらい身体を鍛えてるっていうのと……、体細胞とも密接にかみ合っているのが理由なんだよ。別にキョウは“金色夜叉”なんてかけなくても普通に強いし、体細胞にまで魔力を浸透させることで、体細胞自体に強度と、超回復を實現させてるんだよ」

体細胞にまで魔力を浸透させているから、その“金色夜叉”というのを使ったとき、キョウさんが光り輝いたのだ。

魔力が反応していた、ということだろう。

「でも、これは身体に相当な負担が掛かるから、本人もあんまり使いたくないらしい。最近は抜け毛がいきなりくるんじゃないかって気にしてた」

……切実な悩みだった。

41話 空谷の登音（前書き）

くうこくのきようおん。

人気のないさびしい谷間に響く足音。転じて、孤独なときに思いがけなく人が訪れたり便りが届いたりする喜び。

41話 空谷の登音

キョウさんがその金色に輝く腕をふるい、素早くクロウに距離を詰める。

「ぐっ」

「はっ！　ざまあないな、クロウ。いくらお前でも、俺とマリーメイド長が相手となれば、さすがのお前も、逃げられはしないだろう」

キョウさんの拳が素早く動き、クロウが防戦に努める。

「く……そっ……」

「オギ、どう……なってるの？　私の向きからじゃ……見えない……」

後ろからメリアの声とオレガノのうめく声がする。

あれだけの肉弾戦を続けながらも、新たな戦力を増やさないためか、俺達の拘束は離していない。

そこはさすがというところか。

「キョウさんと……クロウが……戦っている」

「戦況は……？」

「キョウさんが……今は押している……」

「そう……」

俺の目の前でレベルの違う戦闘が繰り広げられている。

キョウさんの方が圧倒しているように見える。見えづらいが、マ

リーさんがその糸を張り巡らせて戦闘エリアの周りを囲み、退路を塞ぐ。

だが、あの時、一瞬の圧力。

クロウから感じた圧倒的な殺意。

それが今は、まだ刀を収めている。

「ふん、腕が鈍ったのか！？　クロウさんよお！」

「……ふふふふふ……」

「……何が可笑しい」

いったんキョウさんが下がり、不敵な笑みを浮かべるクロウを見据える。

「ふははは……。貴様らはまだ分かっていない。分かっていない！
」

「なんだと？」

クロウが腕を振り上げ、睨みつけるような視線をこちらに向ける。

「貴様らはまだ理解していない。あのクリスタルが……。あのパンドラの箱がいかに重要なものか。黒き漆黒のクリスタルに秘められしモノが、世界をも揺るがす力を持っていると」

「クリスタルだあ？　なんでいつもこいつもあのクリスタルにこだわる？」

キョウさんがうざったそうに唸る。

42話 脳有る鷹爪隠す（前書き）

79話目。早いもんです。

（乗）

42話 脳有る鷹爪隠す

「拘束術式 二式」

突然、クロウの口が開いた。それと同時にキョウさんの身体が一瞬止まる。が、すぐ動き出す。

「ぜえんだよ!!」その身体を叩き付けるようにして殴る。その刹那、クロウの腕の骨がきしみを上げたのがキョウさんの拳に伝わった。

「折れたか、老い^{ロートル}耄れ!?!」

「拘束術式 三式」

今度はキョウさんの怒号を遮るようにしてクロウが言った。

「くあ……!!」急に身体が重くなった。

頭が醒めている事からこれはおそらく、クロウの術によるものではない、自分の身体の限界が近づいているためなのだとキョウさんは悟った。

これは早くキメちまわねえとマズいな……!!

そしてそう確信した。

43話 終わり良ければ全て良し（前書き）

80話。

短め。

―除―

43話 終わり良ければ全て良し

「ここまでにしましょうか」

クロウはそう言った。

キヨウさんにとってもそれは嬉しい申し出だったが、突然すぎて意味が分からない。

「流石にあなた方2人を相手にするには全力を出さなければならぬのですが……私の全力は地球の滅亡を招きかねませんので」

何しろ『拘束』ですから。

クロウはそう続けた。

「あなた方に一応、教えておきましょう。私の拘束魔法…肆式を」
そう言ってクロウは――

消えた。

「え……」

消えた、という表現。素早く動いたわけでもなく、俺たちの眼を拘束したとかでもなさそうだ。

「私の肆式は『時間』を拘束するのです」

そう言ったときには俺の背中に座っていた。

重さたった今来たことから、以前から後ろにいたのは考えにくい。
いや、それ以前に。

「時間を拘束する……!？」

それはつまり――。

「時を……止める!？」

「まあそういうことですな」

そう言ってクロウは、静かに俺の背中から離れる。

「マリーさん。貴方にこの屋敷の全権限をお譲りしますので、私の最初で最後のわがままです」

「貴方にはそれ以上の迷惑をかけられています」

「最初で最後のわがままです」

スルーして言い直したクロウは、こう続けた。

「お嬢様をよろしくお願いします。真実を伝えるなり、嘘を吐くなりお好きなようにしていただいて結構ですが、どちらにせよ『お怪我、ご病気のなさらぬように』とお伝えください」

誰かが行動するまでもなかった。

その時にはもうクロウさんの姿はなく、俺たちへの拘束も解除されていた。

マリーさんを除く俺たちはその場に倒れ伏すことしかできなかった。

43話 終わり良ければ全て良し（後書き）

時間を止めれる相手にどうやって勝つんでしょうか。

―除―

44話 例外の無い規則は無い(前書き)

文字通りです。

―加―

44話 例外の無い規則は無い

「……追い駆け、ないと……」

「どこへ行こうってんだ……、少年」

まだ血の流れが余り戻っておらずふらふらなオギが立ち上がり、追い駆けようとするが、キョウさんの声で止められる。

キョウさんは“金色夜叉”が解けたのか、文字通り地面に倒れこんでいた。

「キョウさんは……、どこに行ったのかな？」

「おそらく、今頃のうのうとクリスタルの部屋に行っているでしょうね」

「ふう。お久しぶりです。黒きクリスタルよ」

クロウは真っ二つにされた金庫の中にある黒いクリスタルに手を掛ける。

「いただく」

そのままクリスタルに触れる。

「相変わらず美しいな」

右手に握り締め、うっとり眺める。

その時だった。

「……!？」

ジュツ、と肉の焼ける音が聞こえる。

その音は右手から聞こえ、クロウはその熱さで思わずクリスタルを離してしまう。

クリスタルは黒く光輝き、空にふわふわと浮いていた。

「反発……、まさか」

——引かれよ、心悪しき者よ。

クロウの言葉に答えるように、声が響く。
それはクリスタルから聞こえてきている。

「人の右手焦がしといて、何が引かれよ、だ。解呪法」
クリスタルの周りに円環が四本現れる。

「丸裸にしましょうか、美しきクリスタルよ」
両手をクリスタルに向け、集中する。

無駄よ、この程度。

そうクリスタルから返事が聞こえる。

すると、それを証明するかのように円環が碎け散る。

天罰。

クリスタルはそう眩く。
その瞬間、黒い光がクロウを貫く。

「くっ!!」

その攻撃にひるんだ隙に、クリスタルは窓を割って飛び出した。

45話 老いたる馬は道を知る（前書き）

— 減 —

45話 老いたる馬は道を知る

「キヨウさん……」

「何だ……」

「何で倒れ伏してるんですか」

「もう無理だ。もう駄目だ。もたねえ」

キヨウさんは倒れ伏したまま動かない。

「マリーさん、キヨウさんは……」

「私は拘束術式の解析に忙しいんです。それに、キヨウのこれはいつものことです」

「そうすか……」

「くそおおっ！」

「!?!」

聞き覚えのある声が出て上を向くと、クロウが窓を割って飛び出しているところだった。

「やはり、クリスタルの部屋に！」

「オギ！ 見て、クロウの少し向こう！」

拘束が解けかけているメリアが顎で上を指す。

見ると、クロウが追っているのは、あの部屋にあった漆黒のクリスタルだった。

クリスタルが……飛んでる!?

「どういうこと!?!」

「わからない。マリーさん！」

「恐らくクリスタル自身の防衛機能が働いたのでしょう。あのままでは、クロウを取り逃がすだけではなく、クリスタルまでもが行方不明になってしまいます」

「でも、キヨウさんはダウンしてるし、まだ俺達の拘束も解けきっていない……」

そう言いかけた時だった。

急に、空中で浮遊していたクリスタルが黒い光を放ち、それがクロウの胴体を貫いた。

「ぐあああっ！」

クロウが苦痛に声を上げる。

クリスタルはなおも飛んでいく。

「オレガノ！ 探索魔法を！」

メリアが呼びかけたが、オレガノは顔を伏せたまま答えない。

「どうしたの！？」

「広域呪術式を……拘束されていたから……、魔力の消費が……」
なるほど。クロウは解呪だけではなく、拘束も術式にかけていたらしい。

どうりでオレガノがさっきからひと言も喋らないわけだ。

「まだです！」

マリーさんが片手を空中のクリスタルに向けた。

すぐに、シュル、という音と共に細い糸がクリスタルを捕縛する。

「よし！ クロウが動かないうちに回収を……」

が。

急にクリスタルから火が吹き出し、糸を焼ききってしまった。

「そんな！」

クリスタルは何事も無かったかのように、急にスピードを上げると、屋敷の外に飛んでいった。

「……ふっ」

上空のクロウが滞空したまま、笑みをこぼした。

「封じられてなおこの威力。……やはり素晴らしい。必ず……手に入れてみせる」

そう言ったクロウは、素早く身を翻すと、「高速魔法…肆式」と呟き、次の瞬間、その姿は忽然と消えていた。

――。

「それは大変なことになったね」

自分の腕や足を、曲げ伸ばししているアレンが、天井と床にジャンプして交互に手を着くという、さながら大道芸のような動きを始める。

「何だよ、アレン。他人事みたいに」

「とはいっても、僕は実際クロウさ……クロウの物捕り劇は見えないわけだし。ああ、物捕り劇って捕まえた場合に言うんだっけ」
しかし、あのクリスタルは一体なんなのだろうか。

魔法が掛かっているにしてはやけに防衛性能が高かった。

あのクロウの魔法をもとめず、マリーさんの糸を焼き切り逃げたのだ。あれ自体に相当な魔力が込められているに違いない。

「それは……どうなんだろうね」

アレンがいぶかしげにこちらを見る。

「どうって……何がだ？」

「いや、ふと思ったんだけど。あのクリスタル、ただの宝石じゃないんじゃないかな」

「宝石じゃないなら、何なんだよ」

「そこまでは僕にも分からないよ」

アレンがどさっとソファアームに腰掛ける。

「お待ちせしましたっ！」

「お連れ様です」

いつぞやの二人組のメイドさんがドアを開けて、俺達が待っていた玄関ホールに入ってくる。

「待たせたわね」

「……マリーさんに……話を聞いて、いたから」

そのあとに、メリアとオレガノが続く。

「マリーさんに？」

「ええ。あのクリスタルについてだけど、アレンが治るまでの間、使用人総出で書物庫を捜しまわったらしいわ」

メリアが手のひらに火の玉を出しながら言う。

極地とか行ってもこいつだけは死にそうにないな。

「それで？ 何かわかったのかい？」

隣のアレンが言う。

「あのクリスタルは……古代に、シオンさんの祖先が……“何か”

を封じ込めたもの……らしいわ」

「何か？」

「おそらくは、何かの魔物の類でしょう」

上から声がし、ホールの螺旋階段からシオンさんが降りてくる。

「そういうことね」

メリアがシオンに駆けよっていく。

「メリア、みなさん。今回は本当にありがとうございました。クリスタルは現在、マリーとキヨウを筆頭に、捜索を行っています。今回は事なきを……得ているとはいい難いですが、みなさんにはとてもお世話になりました。ぜひ、また、今度は依頼ではなく、お友達としていらしてください」

「堅苦しいわね、シオン。こういう時は、素直にまた来てねって言えばいいの」

メリアが笑いながら屋敷のドアに手をかける。

行方をくらました漆黒のクリスタル。

今だはつきりとした目的のわからないクロウと、その陰にある集団。

クリスタルに封じられているという“何か”。

分からないことばかりだが、依頼が終了した以上、名残惜しいが俺達は一度、学院に戻らなければならない。

だが同時に、俺達は確かな何かを感じていた。……それは、これから何かが始まるという予感。

休学届を準備しておく必要があるそうだな。

「そんな事態にならないといいけれど、ね」

隣を歩くメリアが言う。

「まあ、今日はオギの単位入手を記念して、僕たちの部屋で乾杯で
もしようじゃないか」

「それも悪くないな」

今はまだ、嵐の前の静けさに、過ぎない。

War of Death (前書き)

タイトルの直訳は「死の戦争」。

（乗）

War of Death

「おるりやあああああああ！！」翌日、俺は走っていた。学校の廊下を。

敵に追われている？いや、違う。

メリアを怒らせた？違う。もしそうだったら俺の顔面は真っ赤に腫れているだろう。

俺が走っているのは他でもない、アイスクリームのためだ。

今日は学食内で年に二回しか発売されない蜂蜜ソフトクリームの発売日なのだ。

このソフトクリームは数量限定で発売され、発売日毎回多くの人間が殺到する。そしてそこで大乱闘になる程それはおいしい。（この乱闘を巷では「学食戦争」と呼ぶらしい）

その為に俺は授業を早めにこっそり抜け出して抜け駆けで食堂へ向かっている。

見ると、狂喜乱舞しながら食堂に向かう俺と同じ連中がチラホラ。多分あと数十秒後にチャイムが鳴る。今にこの廊下は人混みで滅茶苦茶になるだろう。

そうなる前に歩を進めなければ……！！

**I
w
i
l
l
g
e
t
i
t
b
e
c
a
u
s
e
……****(前書き)**

私はそれを手に入れる、なぜなら……。

—除—

I w i l l g e t i t b e c a u s e . . .

「もう少し……」

チャイムが鳴り始めた。生徒の足音が激しくなるのを感じた。勢いを留めずに、食堂へ。

数量限定で、しかも毎回このように荒れてしまうため整理券が配られる。

数量がわからないので、整理券も何枚配られるのか分からない。

「あるのか……俺の分は！」

目の前に食堂が見えた。すでに何人かが入り込み歓喜の声を上げている。

整理券は中央のテーブルの上に置かれており、もうほとんどないのが分かった。

俺はラストスパートをかけて走りこんだ。

「あと一枚だぞ！」

見知らぬ生徒の一人が俺を見て教えてくれた。ありがとうございます。

周辺には誰もいない。後方も人は5メートル以上離れている。

獲った。取るではない。獲ったのだ。

俺はその紙に手を伸ばす。

ガッ！

「いて！」

「うわ！」

2人の声が重なる。

誰かが超高速でここまで来たがために、衝撃で倒れこんでしまった。

——いや。今はそんな場合じゃない！

俺は立ち上がり、もう一度整理券に手を伸ばした。

俺の右手はしっかり整理券を手にした。

「はい、整理券終了。さっさと帰んなー」

学食の気のいいお姉さんっぽい人が周りの人に言う。

残念そうな声を出して、後方にいた人たちは引き返していき、そのうち数人は普通に食べに来たようで、他のメニューの食券を買い求めて券売機に足を運んでいた。

いや、それより。

俺は自分の手にしている整理券に目を落とした。

整理券は俺の手だけに確保されている者ではなかったのだ。

もう一人、この整理券を掴み取っているものがいた。

「……アレン」

「オギ……」

そう、そこにいたのは親友のアレンだった。

「なるほど。あの状況で俺の手に衝突できたのはアレンのスピードだからこそか」

「ちゃんと見ていなかったからぶつかってしまった。集中していたら、腕を避けて普通にとれたのだろうけどね。申し訳ない」

「申し訳ついでに、これは俺に譲れ」

「それはそれ。これはこれだ」

お互い離そうとはしない。

ちなみに分けるという考え方はない。もうこうなってしまうえば、自分の手にするまでは引くわけにはいかない。

「……やるしかなさそうだな」

「ああ。整理券のおかげでなくなると思っていたけれど、まさか僕らがやることになるうとは……」

アレンはそう言って少し笑った。

俺も笑いたくなる。

初めての親友との真剣勝負。

「「学食戦争だ！」」

A p p e t i t e i s f e a r f u l . (前書き)

食欲は恐ろしい。

いや、本当に恐ろしい。

—加—

A p p e t i t e i s f e a r f u l .

しかし、俺は右手で、アレンは左手で整理券を掴んでいて、互いに片腕が使えない。

「整理券をどっかにおくから俺に任せてくれないか？」

「整理券をどこかにおくから僕に任せてくれないかい？」

何だ、考えてることは一緒か。

「ハハッ!!」

「ハハハ!!」

思わず笑ってしまう。

その次の瞬間、アレンが動く。

アレンは右足で回し蹴りを顔面に狙ってくる。

「容赦ねえな!!」

それを上体をそらしてかわし、俺はアレンの左肘に手刀を打つ。

だが、アレンはそれを右手で受け止めてひねる。

「痛い痛い痛いって!!」

キリキリとアレンがねじ上げる。

「早く整理券を放したほうが身のためだと思うよ僕は」

「口が裂けても言ってたまるかっての」

俺は足を振り上げて食券を握っている手を蹴る。

「うわっ」

その勢いで二人とも手を離し食券が宙に舞う。

「この隙に!!」

その間に掴まれた手を振りほどき、舞う食券を掴もうと手を伸ばす。

だが、その手が何かに阻まれるように止められてしまう。

「一度蹴り上げてもう一度掴むつもりかい？　なら、ちょうどいいアレンがそう言う。」

「ちょっと覚えた技を使うタイミングを見計らっていてね」
俺の腕は、何かに引っ張られるようにして動かない。

一瞬、キラリと光る物が見える。

……まさか!？

「何て名前をつければ良いのかな。でも、まだまだだね。片腕くらいしかまだ止められない。しかも全力でだ。面白そうな技だったから頑張っただけ、もうこれは使わないな」
アレンの左手には、細い糸が巻きついている。

「お前、改めて思うが、すげえな」

「そりゃベッドにずっとくくりつけられたりとかしてたからね……」

そうか、アレンはなんだかんだで一番マリーさんのお世話になっていたのか。

だからワイヤーを操ることが出来るのか。

「じゃあ、この整理券はもらっていくね」
そうしてアレンが食券を掴もうとする。

だが、その時パン、と音が鳴って整理券がどこかに弾かれる。

「空砲でもこの威力か。なかなか良く出来てるじゃねえか」

廊下の端から、男の声が聞こえる。

忘れもしない。アイツの。

「ガキ共、面白そうなことしてるじゃねえか」

手には小さめのライフルを握り。

廊下の端からこんな小さな整理券を破れないような場所に撃てる男は、少なくとも一人しか知らない。

「ああ、学食戦争か」

男は、少しずつ二人に近づく。

「面白そうだな。ちょっと混ぜさせてくれよ。二枚目が欲しくなった」

「こんの……、ゼロ狐……」

立っていたのは、フォックス・F・ゼロシルバーだった。

B a t t l e s t a r t ! (前書き)

戦闘開始。

―減―

Battle start!

「お前、二枚目ってことは……」

「ああ、そうだ。そう滅多に食えるもんでもないしな。二つ食ってもばちは当たらねえだろ」

そう言いながら、ゼロはライフルを持っていない方の手に二枚の整理券をひらひらとさせた。

「クソっ！ 俺の、年に二回の至福を奪われてたまるか……！」

「オギ、悪いけれど、あの整理券は僕の物だ」

「そうかよ。じゃあ……」

「「どっちが先にゼロから奪えるか！」」

切り替えの早さは戦闘においても優位に立てる特権だ。

「ハッ。調子に乗るなよ餓鬼どもが。こいつは、渡さねえよッ」
いち早く突っ込んでいくアレンの手刀を、ゼロが促し。

「五月蠅い！ 大体二個も食えるとか！ ふざけん……なッ！」
俺の蹴りをライフルで受け止める。

「おいおい、全然覇気が足りねえぞお前ら。やる気あるのか？」

「こんのッ……」

完全に嫌がらせじゃねえか！

「まあ、二つも食ったらさすがに気分が悪くなるよな。……よし」
ゼロがにやりと笑うと、アレンの拳を払い、すぐその窓を開けた。

そして、片手に整理券を一枚持ち、それを窓の外に投げ捨てた。

……投げ捨てた!?

「この……手前ええええ!」

「ハッ。せいぜい戦争してろ。俺から奪おうなんざ、百年早い」

「うっさい! いいからもう一枚の整理券を……」

「オギ、僕は確実な方法って奴が大好きでさ」

俺が激昂しているすぐ横を、アレンがそう言いながらさっと通り抜けて行った。

「おい、アレン!」

「じゃあね、オギ。僕はもう一枚を頂くよ」

アレンが窓からさっと飛び降りる。

ゼロの投げ捨てたもう一枚を追うらしい。

「おいおいどうする? ここで俺と引き換え期限が過ぎるまでバトロるか?」

「……くそッ!」

もうこうなりや自棄だ!^{ヤケ}

俺も窓枠に手をかけ、さっと外に飛び出す。

後ろから、「そーいや、フレッシュがアイス好きだったっけか……」
とかなんとか言うゼロの呟きが聞こえた気がしたが、今はそれどころじゃない。

「アレン! 待てよ!」

身体を転がして衝撃を和らげ、芝生の上を駆ける。

「オギ、まだ着いてくるのかい？ 風に飛ぶ整理券なんて、君には回収できないと思うけれどッ！」

前のアレンが振り向いて小さい刃を投げってくる。

「あぶねっ！ けどな！ 元をたどれば先に俺が取ろうとしてたものなんだ！」

「同時に掴んだじゃないか！」

「知るか！」

自棄である。

もうどうしようもない程に自棄である。

「全く！ 君とはあまりやりあいたくないのに！」

「こっちもだ！」

そうこう言いながら、風に流されて右へ左へ移動する整理券を追いかける。

が。

ぱしっ、とその整理券を誰かが掴んだ。

「なッ！？」

アレン、続いて俺が足を止め、その人物を確認する。

「ああ、丁度よかったわ。まさかこんな大事な日に寝坊するなんてね。私もオギの馬鹿が移りつつあるんじゃないかしら」

寝癖を立たせているメリアが、眠そうに立っていた。

D i v e i n t o Y o u r s e l f (前書き)

テメエのハートにぶっ込みやがれ!!
く乗く

D i v e i n t o Y o u r s e l f

そしてメリアは自分の手中の券目掛けて飛んでくる男二人（俺とアレン）に気付いたようだった。

俺達を見るなり、メリアはいきなり詠唱破棄魔法で無数の氷弾を放ってきた。

「アイスクリームは絶ッッ対渡さないわ！！」

「「だああああああああ！！！！」」

何と云うことだろう。攻撃に全く容赦がなかった。

目の前に一瞬銀幕が張られた、と思った次の瞬間全身に無数の鈍痛が走った。

想像してみよう。冬、自分がいきなり百人の餓鬼に囲まれ一斉に石入り雪玉を投げつけられる恐怖の構図を……。

それとおおよそ同じである。

「いだいだいだいだいだいだああああ！！！！」

「あだあだあだあだあだあだあだああああ！！！！」

余りに氷弾の数が多すぎたため、俺はともかくアレンでさえも避けられなかったらしい。

俺とアレンは力なく地に墜ちた。

I t i s d i f f i c u l t f o r u s t o g e t i t . B

中学生レベルの英語。

— 除 —

I t i s d i f f i c u l t f o r u s t o g e t i t .

B

パサリと。一枚の紙が宙から地面に落ちた。
魔法の際の衝撃で手から離れていたようだ。

「はい、ゲット」

メリアはそう言って、その紙を手取る。

「くっそ……こんな廊下で魔法使いやがって……」

「あとで……風紀委員にでも言いつけておこうかな……」

俺とアレンはそう言って苦笑いを浮かべることしかできなかった。

「それより私が保健委員会に連絡しとくわ」

とメリアがそう言って笑った。

「くっそ……」

「……？」

メリアはそう言って、顔をしかめた。

「貴方たち……もしかして」

そう言ってメリアはこっちにその紙を見せた。

「白紙を取り合ってたの？」

そこには何も書かれていなかった。

「「……は？」」

「いや、そんなはずはないわ。私もちゃんと見たから……」

そう言ってメリアは、前方に目を向ける。

俺たちも静かに立ち上がってからそちらを見てみた。

「「「あ」」」

全員で言った。

「どうした？」

「彼女か……道理で気づかないわけだ」

そう言ってアレンは笑い、指をさした。
その先には、少し小柄な少女。
オレガノだった。

パン！

と、俺の頭の中でピストルがなった気がした。それは全員同じだったようで、ほぼ同時に走り出した。

アレンは少し早目のスピードで、俺とメリアはそれに次ぐように走りこむ。

そして同時にオレガノも走り出していた。

ゼロの所為で遠くなってしまうているので、時間がかかるかもしれない。

「……」

オレガノは黙って校舎の方に走り出して――校舎を昇り始めた。
釘を校舎に一本ずつ刺して上へ上へと昇っていく。

「げ！」

「こうなれば、君には対抗策がないね、オギ！」

アレンは言いながら校舎を地面と垂直に上り始めた。

「じゃ、またね」

メリアもそう言って地面に水流を作り、上に向かって流す。

「重力無視か、畜生！」

俺はそう言って、オレガノが刺していった釘を昇っていくしかなかった。

「って、それすごいよ!？」

アレンはそう言ってこっちを見て驚く。

「知るか！俺はこれくらいの力しかないんだよ！」

と、気づくとオレガノはすでに校内に入っており、姿が見えなくなっていた。

「お先！」

「二番手！」

と順番に侵入していく。

「俺も入る！」
と。

アレンとメリアが固まっていた。

「う、お、あ!？」

何やってんだ、こいつら……。

俺はそこで視線の先を見た。

「あ……」

時すでに遅し。

そこにはアイスを持ったオレガノがいた。

「どうして固まってんだよ！」

「いや、引っかけちゃってね……」

アレンはそう言って足元を見た。

足元にはお札で円形が作られており、2人はそこに立っていた。

「術式でも魔法でもなく……ただのサークルよ」

そう言って、オレガノはアイスを口にする。

「お疲れ様」

オレガノはそう言って妖艶に笑った。

I t i s d i f f i c u l t f o r u s t o g e t i t . B

オレガノはどうやって奪ったんだろう……疑問 W

— 除 —

**S
w
e
e
t

i
s

I
c
e,

I
c
e

i
s

L
o
v
e,

L
o
v
e

i
s

S**

甘いものはアイス、冷たいアイスは恋のようで、恋は甘い。

おそらくですが、文法迷子。

こんな感じの甘いお話。

—加—

一方その頃、保健室。

「まったく、怪我しないために作った整理券制度でどうしてこんな怪我の生徒が多発するのよ、んの食いしん坊共が!!」

「そりゃまあ、根本的な解決にはなってねえからだろ」

喧騒の中、二人の男女が話している。

男子はアイス握って背中に銃を、女子は白衣を着ていた。

「まったく、そんなに美味しいもんなの? 言ってもただのアイスクリームでしょ?」

「いや、あのアイスクリームを侮ると人生損するぜ? 蜂蜜の自然の甘みとアイスクリームの冷たい甘さ、その二つが決して対立することなく、互いを極めあうようにして究極の一品への仕上がっているのさ!!」

「なんでそんな無駄に熱く語ってるのよ」

「なら、これ食うか? つーか、今回はお前にやるために取って来たし」

男のほうを持っていたアイスを女のほうに手渡す。

「いいの? ゼロ、これ半年に一度の楽しみとか言ってたでしょ?」

「あ、気にすんなよフレッシュ。さっきも言ったが、手前のために今回は取ってきたんだから」

そういうとゼロは強引にフレッシュに握らせた。

「……じゃ、遠慮なく」

フレッシュはアイスを食べる。

「滅茶苦茶うまいわねこれ。麻薬でも入っているの？」

「だろ？ 苦労して取ってきたんだから。ったく、そんな姿見せられたらこっちまで食いたくなっちゃまってきたじゃねえか。あーあ、あん時外に捨てるんじゃないかったぜ」

「あん時？」

「あのオギとアレンって後輩が整理券争ってたのをちょっと頂いたんだよ。ま、外に捨てたんだけどな」

「……アンタ最低ね」

「奪うよりはマシだろうが」

ウマツ、とした顔をフレシアはし続けている。

「いる？」

「……は？」

「そんな顔されたら食べにくいっての。ほら、美味しいのはわかったから、残りはアンタにあげるわよ」

目の前にフレシアがある程度食べているアイスクリームを差し出される。

「べ、別に良いって。お前食えよ。アイス好きだろ。っーかこれって……」

……間接キスじゃねえか。

その言葉はゼロの心の中でだけ言われた。

「美味しすぎて申し訳ない気持ちになったわよ。まったく……」
「やれやれ、といったジェスチャーをしてフレシアはゼロの顎を掴んだ。」

「黙って食え」

そのまま顎をクイツと少し引き、手に持ったアイスを口に突っ込んだ。

「もがつ、もがもが!!」

「何言ってるんだか分かんないわよ。アイスはあんがと。仕事あるから戻るわ私」

フレシアはゼロにアイスを突っ込んだ後、そそくさとその場を去った。

「まったくアイツは……。照れんなら最初っからやらなきゃ良いのによ」

残されたゼロは、口からアイスをひっこ抜いた後、保健室の端でアイスを食べていた。

**S
w
e
e
t

i
s

I
c
e,

I
c
e

i
s

L
o
v
e,

L
o
v
e

i
s

S**

何か自分の中のピュア分をろ過しながら書いてる気がします。

1話 夜散歩（前書き）

90話めです。

―減―

1話 夜散歩

——かくして学食戦争なるものは終了し、それから数日が経過した。

単位も前の屋敷の護衛で稼いでどうにか切りぬけ、今学期は終了。メリアは本家に顔を出しに行ってしまう、今休暇中、俺はすることがなくなった。

アイスもゲット出来なかったしな。なんだか今回の休暇も何か悪い事が起きそうな気がしてならない。

「はあ~~~~」

「オギ、そんなに落ち込まなくてもいいんじゃないかな。半年後にもう一回狙えばいいじゃないか」

いや、俺はお前みたいに先づっかり見てる前向きボーイじゃないのさ。

今はアイスを捕獲できなかった悲愴に暮れさせてくれ。

「いやいや、何でブルーなのさ」

しかし、今回は悲惨だった。

一応、もし知り合いと抗争になった時のことも考えて策を練っていたつもりだったのだが、全く役に立たなかったな。

まあ、メリアといい、アレンといい、オレガノといい、あのクソ狐といい……。

頭にそれぞれの顔を浮かべてみる。

……ああ、どっち道無駄だったか。このメンツじゃ。
何か俺、この中で最弱な気がしてきた。

「そうでもないと思うけれど……。ところでオギ、今日から長期休暇なわけなんだけれど。何で僕たちは休みに学校にいるんだい？」

「愚問だな」

アレンは今実家に帰れない事情があるらしい。

俺は俺で……。事情があるしな。

しかし、休暇になったためかは知らないが、学院もずいぶん閑散としている。

「まあね。今回の休暇は里帰りしてる生徒も多いらしいよ。しかし、この学院も酷なことするよね。里帰りしない生徒は自学自習……。もとい、強制依頼が課せられるし」

まあ、わからないでもない。

学院は長期休暇でも、世の中は平和にはならないからな。

俺みたく、帰らない生徒はこの機に学院にしっかりこき使われるのだ。

「まあでも、依頼を受けないっていう選択肢もあるしね。君には剣技の訓練の方が向いているんじゃないのかい？」

「かもな」

しかし、休暇ともなると、暇でならない。

「アレンは、この休暇中に何かすることあるのか？」

「いや？……特には」

そうか。よかった、同類が居て。

「まあ、これから特にすることもなし。僕は散歩に行ってくるよ」
散歩……か。

「なあ、お前、いつも夜に散歩に行ってるみたいだけどさ。具体的にどの辺歩いてるんだよ」

いつも気になってはいたのだが、俺が気付いた時にはもうアレンはいないからな。

この際だ。聞いてみるとしよう。

「うーん。まあ、学院の敷地のぎりぎりまで……塀までなんだけどね。広いし、動物とかもいて、飽きは来ないよ。……ついてきてみるかい？」

「いいのか？」

「ああ。たまには一人じゃない散歩もいいだろうさ」
そう言って、アレンは笑った。

2話 夜散歩 2

夜になった。俺が校庭に出ると、アレンが隅にある花壇の垣根に座っていた。

「今日は風が心地良い。散歩日和だよ」俺を見つけたアレンはすつくと立ち上がった。

清涼な夜風が闇を吹き抜ける。月で照らされた木の葉が揺らいだ。風が体を透かすようなこの感覚……

なるほどな、と俺は心の中で相槌を打った。

「んじゃ、行こうかオギ」アレンが背を向けて歩いていくので、俺はその台詞に従い、走ってアレンに追いついた。

「…綺麗だな」しばらく歩いていると、俺は思わず呟いてしまった。

夜の校庭は昼とは全く違う顔を見せる。人の心を感傷させる静寂の夜闇の中で展開される清雅な風景。詩でも書けそうだ。

少し先に進むと、突然アレンが、見せたい物があるんだ、と言って俺の手を引いた。

夜散歩 3 (前書き)

除

夜散歩 3

うちの学校は大陸のほぼ中央に位置している。

故に、もともと『都会』ではあるのだ。すなわち、あらゆるものが『最大』と言っても過言ではない。

まあつまり何が言いたいかと言えば、この学校も大きさとしては最大級なのだ。

そして学校の校庭の奥には小規模ながら（と言ってもかなり大きい）森があるのだ。

アレンはそこに俺を連れて行った。

「何だってんだよ」

「いいからいいから」

「こんな気持ちのいい夜なんだから、森みたいな気味の悪いところやめにしようぜ？」

「何だよ、怖いのかい？」

とアレンは笑う。

「……怖くねーよ！」

「そう。だったらいいよね」

とアレンはそのまま先に進む。俺はそれを静かに追う。

そして5分くらい歩くと、少し開けた場所についた。

「ここだ」

「ここがどうかしたのか？」

「ほら、空を見てごらん」

「空？」

俺は空を見上げた。

森の木々が開けた空に、無数の星。

それぞれが輝きを放っている。

「隠密の古代の術式にはあの星々が関わっているって言われてる。それは呪術や魔術も一緒らしいね。あの星空がこの僕らの世界を守ってくれているのさ」

「これが……」

思わず感嘆の言葉が出る。

「どう？」

「すげー……」

「だろ？」

「これが見せたかったものか？」

「ああ。でももう一個、すげーのがある」

と、アレンは笑った。

それからさらに歩き始める。

「今日は運がいいからな。いい感じの場所に月がある」
「月？」

「最高に月が見やすい、スポットライトの様な広場さ」

とアレンはどんどん進んでいく。

「っと、先に君に行ってもらおうかな」

アレンはそう言って笑った。

俺は指示に従って前を歩く。

しばらくすると広い場所についた。

「……」

「どうだい？」

「ああ、すごいな」

「だろ？」

「毎晩、お前は犯罪まがいのことでもしてたのか？」

「……え？」

と、アレンは俺の前を見る。

俺たちの視線の先の広い広場の一部を月明かりが照らしている。

そこには倒れた少女。

スポットライトのように照らしていた。

「見せたいものってこれか？まあ、お前の色恋に文句をつけるつもりはないけど、オレガノに何も言わずにこんなことをするのはどうかと思——」

「いやいや、違う違う。僕も予想外だ」

と、アレンは静かに駆け寄る。

俺もそれを追う。

その人は少女だった。

「……気絶しているだけみたいだ」

「それにしても、白いな」

肌は白く、衣服も白い。髪の毛も限りなく白に近い白銀だ。

「……どうする？」

「いくら校内で安全とはいえ、放置しておくわけにはいかないだろうけど……」

とアレンが少女の体を軽く持ち上げる。

「……緊急事態だ。急いで帰ろう」

と、今度は全力で少女の体を持ち上げた。

「どうした？」

「軽い怪我だけど、毒が回りつつある。オレガノを呼んで解毒してもらうことにしよう」

言っていることは冷静だが早口であるため、危険であることが分かった。

俺たちは森を走って抜けた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8564u/>

Not Only But Also

2011年11月16日09時42分発行